

L'expansion des Tu-fan (Tibetains) en Asie centrale

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5074

吐蕃の中央アジア進出

森 安 孝 夫

はじめに

本稿は、昭和四十九年度(1974—1975年)に東京大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文『唐代内陸アジア史の研究——トルキスタン成立前史——』(三部作……cf. 流沙海西奨学会編『アジア文化史論叢 3』東京, 1979, p. 238)の第二部「ウイグルの西方発展以前における西域の情勢——とくにチベット族の動きを中心として——」を、構成とタイトルに修正を加えた上で、増訂したものである。これで第八回(1975年)流沙海西奨学会賞の授賞対象となった私の修士論文の全部を、ようやく公表し終えることになる。

本稿の骨格・論旨は1974年当時といささかも変わっておらず、考察の対象となった各種史料も全てその時点で把握していたものである。しかるに1979年、奇しくも二人のチベット学者が同じく「吐蕃の中央アジア進出」のテーマに取り組んでいることが判明した(cf. 『史学雑誌』89—10, pp. 58—59)。その一人ウライ氏 G. Uray は、まず“The Old Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 A. D.: A Survey”という論文を公表し(cf. 文献目録)、さらにハンガリーのチョパックで開かれた第二回チョーマ記念学会では、“Einige Probleme der tibetischen Herrschaft über das Lob-Nor-Gebiet im 7.-9. Jh.”と題する発表を行ない、席上4枚からなるレジュメ(簡単な史料紹介と地図と大事年表)を配布した。もう一人のベックウィズ氏 Ch. I. Beckwith は、イギリスのオックスフォードで開かれた国際チベット学セミナーで“The Tibetan Empire in the West”と題して発表し、その内容は既に公刊されている(cf. 文献目録)。また伝え聞く所によれば、両氏ともこれまでの発表は部分的なものであり、「吐蕃の中央アジア進出」についてもっと大きな論著を準備中であるという。

ところで私は、これら両氏の説に直接または間接に触れる機会を持ったわけであるが、それによって本稿の論旨を変えた箇所は一つもなく、また新たに付け加えられた史料もない。しかし、この両氏のものも含め、1974年以降に出版された論文や著書、さらには1974年当時見落としていた幾つかの論著(とくに榎一雄氏より御教示いただいたペテック氏のイタリア語論文等)の中で、私と同じ史料を使ったり、同じような考えを示しているものについては、極力これを註記するよう

に移めた。ただし、同じ史料を使っているといっても、単に漢文史料を翻訳・翻案しただけのもの、あるいは先人の著作から引用したり並べ変えただけのものについては、この限りでない。(1983年9月、金沢)

序 論

吐蕃の中央アジア進出前夜にあたる6世紀末から7世紀前半、高昌・焉耆・龜茲・疏勒・于闐などの西域の主要な国々は、それぞれ独自の王を立て、シルク=ロードの要衝として繁栄していた。これらの国々は、高昌を除けば、全てインド=ヨーロッパ系民族がその住民の大半を占めており、チュルク(Türk, トルコ)系住民の姿はまだわずかしか見られなかったと思われる。にもかかわらず、これらの国々が程度の差こそあれ、全てチュルク族(突厥・西突厥・鉄勒など)の間接的支配を受けていたことは、隋書西域伝・旧唐書西戎伝・新唐書西域伝の当該国の条や隋書及び両唐書の西突厥伝に照らして明らかである⁽¹⁾。一方、かつてはやはりインド=ヨーロッパ系の住民が主体であった楼蘭・鄯善・且末を中心とするタリム盆地東南辺地方は、6世紀初頭からモンゴル系⁽²⁾の吐谷渾の支配する所となっていた。隋代には一時的に吐谷渾から隋の手に渡ったこともあったが、唐初には再び吐谷渾の勢力下に帰していた⁽³⁾。漢代以来強力な武力を背景にしばしば西域に覇を唱えた中国の勢力は、隋末の大乱によって全く地に落ち、新興の唐の勢力がここに及ぶにはまだ少し時間が必要であった。隋から唐初の西域の情勢は大まかに見て以上のようなものであり、漸く勃興の兆しをみせた吐蕃は、吐谷渾をめぐって唐と激しい政争を演じながらも未だその姿を西域の地に現わすには至っていない。

さて、唐が本格的に西域経営に乗り出すのは、ハミに西伊州を置いた貞観四年(630年)よりも、むしろ貞観八~九年(634-635年)に鄯善・且末地方奪取の目的で行われた吐谷渾征伐⁽⁴⁾より始まるとみなすべきであろう。これ以後、唐朝の西域における勢力は太宗一代(在位626-649年)の間に急速に拡大する。貞観十四年(640年)高昌国を滅ぼしてその地を西州と改称し、ここに安西都護府を置き、次いで貞観十八年(644年)と二十一年(647年)の再度の焉耆平定、二十二年(648年)の龜茲平定へと及び、是歳、安西都護府を西州より龜茲に移した。さらに同年または翌年、焉耆・龜茲・疏勒・于闐に四鎮を設置し、これらを安西都護府の下に総管せしめることとなった⁽⁵⁾。即ち唐初の西域におけるチュルク族の優勢はここに至って唐朝に取って代わられたわけである。しかしこの唐の西域支配体制も、西突厥が天山以北に健在する限りは基盤の弱いものであり、

一旦は庭州方面に来て唐の覇権を認め、瑶池都督を拜して安西都護府治下に入っていた阿史那賀魯が、太宗死後の永徽二年(651年)、十姓部落及びカルルク・処月などのチュルク諸族を統合して唐に叛旗を翻すと、たちまちにして瓦解し、安西都護府は西州にまで退かねばならなくなった。すなわち太宗によって推し進められた西域支配の大業も、彼自身の死によって一頓挫をきたすことになったわけである。

しかし唐朝はこのような情勢に拱手することなく、すぐさま積極的な攻勢に転じた。前後三回に亘って派遣された討伐軍の総数は延べ数十万に上るといわれ、唐側は六年という長年月を費した結果、ようやく顕慶二年(657年)に至って勝利を収めることが出来た⁽⁶⁾。突厥第一帝国の西域進出と、それに続く西突厥帝国の西域支配は、この阿史那賀魯の敗北を以って一応の終熄をみたと言ってよかろう。逆に唐は、この戦勝に功績のあった阿史那步真と阿史那弥射(共に西突厥可汗の血を引く者)をそれぞれ継往絶可汗と興昔亡可汗とに任命し、西突厥の遺民を安撫させることによって、太宗時代以上に安定した西域支配体制の足がかりを築いたのである。以前から西突厥十姓の領土は、イリ河～イシク＝クルを境にして東の五咄陸部と西の五弩失畢部とに分割されていたが、唐はそれにならい、東西それぞれに崑陵・濛池の両都護府を置き、興昔亡可汗を以って崑陵都護に、継往絶可汗を以って濛池都護に任じた⁽⁷⁾。安西都護府も658年には再び龜茲に移され⁽⁸⁾、ここに唐の勢力は西域全土にゆきわたる形をとったのである。しかるに継往絶・興昔亡両可汗には部衆統御の才は薄かったらしく、659年、五弩失畢の思結部の闕俟斤・都曼は疏勒・朱俱波(カルガリク)・喝槃陀(タシュクルガン)の兵を率い、安西四鎮の一つ于闐を攻撃した。唐の西域支配がまたもや頓挫しかかったわけであるが、すでに唐の勢力は前年以来ある程度の確立をみており、安撫大使となった猛将蘇定方の活躍もあって事なきを得た⁽⁹⁾。いやそれどころか、この乱の平定後、唐の影響力はさらに西方にまで拡大した。即ちパミール以西の吐火羅・嚙噠・罽賓・波斯等の十六国にそれぞれ都督府を置き、すべて安西都護府の監督下に隷属せしめることとなった(661年)⁽¹⁰⁾。唐の西域統治体制は658年当時より一層の充実をみることになったわけである。

ところがこのような状態が保たれたのはごく僅かの期間だけであった。早くも662年、唐に服属しながらも内実は十姓故地に於ける自己の勢力拡大を目論んでいた西の継往絶可汗が、唐の颯海道総管・蘇海政と謀って興昔亡可汗を殺害すると⁽¹¹⁾、東の五咄陸諸部の間には反唐的気運が高まった。唐の庭州刺史・来濟が入寇する突厥を防いで陣没したといわれるのは、このような状況下の出来事であったと思われる⁽¹²⁾。一方、興昔亡可汗謀殺に成功して意気揚るはずの

繼往絶治下の五弩失畢部の情況はどうであったか。この謀殺事件の直後に、五弩失畢の一部の拔塞幹部が離反し、且つこれまた五弩失畢の一部と思われる弓月部⁽¹³⁾が、吐蕃を率いて蘇海政と戦わんとしているところをみると、繼往絶可汗にはやはり部衆を統率するだけの度量はなかったようである。本論で詳述するように、吐蕃が唐の敵として西域に登場するのはこの662年を以って最初とするが、これ以後唐は河西～青海方面のみならず西域に於いても吐蕃のためにしばしば悩まされることになる。わけても670年、既に安西四鎮のなかでは吐蕃に近く位置している于闐を攻陥していた吐蕃は、于闐軍ともども大挙して龜茲の安西都護府を攻め落し、故に唐は安西四鎮をすべて放棄し、安西都護府を再び西州に退却させるの止むなきに至っている。

ところで先の繼往絶可汗であるが、彼がいかに統衆の才に欠けていたとはいえ、当時まだ十分に強力であった唐軍の支持を受けていたのであるから、宿敵・興昔亡可汗を謀殺した後は十姓の地をある程度までは保ち得たことであろう。しかしその彼も667年には死亡した⁽¹⁴⁾。この傀儡的可汗を失ったことは、西突厥遺衆の安撫を意図する唐にとっては大きな痛手であり、これ以後西域の唐軍は絶えず南の吐蕃と北のチュルク諸族という二大勢力の動きに注意しなければならなくなるのである。670年、吐蕃が安西四鎮の地を陥れたことは既に言及し、本論でも述べる通りである。だがせっかくここまで支配の手を広めた唐としては、ここで引き下るわけにはいかない。この点、史料は乏しいのであるが、上元年間中(674—676年)に四鎮は再び唐の手に取り戻されたらしい⁽¹⁵⁾。しかしそれも束の間、677年には、繼往絶可汗の死後分散した西突厥の遺衆を糾合した阿史那都支と李遮旬なる人物が、吐蕃と連携して安西都護府を陥れた。四鎮は今度は吐蕃とチュルク両方の手に落ちたのである。(以上、本論参照。以下同)。

この頃の西域情勢を一口で言えば、まさに唐と吐蕃とチュルクの三者が一進一退を繰り返していた時代ということになる。安西都護府を陥れられた唐はすぐさま攻勢に転じ、計略を用いて阿史那都支と李遮旬を擒にし、まもなく四鎮を回復した。そしてこの時の四鎮には従来の焉耆に代わって、チュルクの本拠・碎葉が加えられたのである(679年)⁽¹⁶⁾。本拠深く楔を打ちこまれたチュルク諸族は、682年、阿史那車薄を擁して最後の反抗を試みるが、この反乱はあえなく鎮定された。西突厥余衆の反乱は一応この時を以って終わりを告げ、次にこれに代わって天山以北の地に台頭してくるのは突チュルクギッシュ騎施 Türgiŝである。それはさておき、安西四鎮の地に目を戻すと、687年にはまたもや吐蕃の軍隊によって疏勒・龜茲そして焉耆(四鎮の一つではない)が蹂躪されている。ただ于闐については史料がないが、恐らくこれも同じ運命を辿ったと推測される。次いで

692—694年、王孝傑らの活躍により安西四鎮は最終的に唐の支配下に帰すこととなった。それはひとえに、それまでの一朝事あれば大軍を繰り出すのが、普段は原地人や遊牧チュルク族の支配者を最大限利用するという消極的西域経営策から、三万の軍隊を安西都護府に常駐させるという積極策(ただし莫大な費用がかかる)への転換の結果である。もちろん、これで吐蕃及びチュルク諸族(とくにこれ以後は突騎施)の四鎮攻撃が終わったわけでは決してないこと、本論に見る如くである。しかしまた逆に、この年以後は唐朝が安西四鎮(719年に碎葉鎮は廃止され焉耆鎮が復置さる)をまがりなりにも支配し続け、少くとも安史の乱勃発までは本国との連絡を断ち切ることなく西域の地を保ち続けたことによって、中唐に於ける絢爛たる国際文化を現出させたことも事実である。

以上、本論である「吐蕃の中央アジア進出」の理解を助けるために、当時の中央アジア情勢を、唐とチュルク諸族の動向を中心に概観した。以下の本論では、吐蕃の側に視座をすえて中央アジアをみるというこれまでともすれば閑却されてきた観点から、考証を展開していきたい。

本 論

第一章

ソンツェン=ガムポ Srong btsan sgam po 時代(6世紀末—649年在位)

ブラマプトラ河の中上流域、即ちラサヤヤルルンを含むウ地方やツァン地方を中心にして勃興した吐蕃王国の軍隊が、初めてその姿を中央アジア(西域、天山南北路、現在の東西両トルキスタン)に現わしたのは何時のことであろうか。チベットからトルキスタンに出るには、地理的制約から、大まかにみて二つの道しか考えられない。即ち一つは西北のパミール方面(本稿ではカラコルム山脈・パミール高原を含む広い範囲をパミール地方と呼ぶ)からコータン～カシュガル地方に抜ける道であり、もう一つは東北の青海地方から敦煌～ロプ地方(本稿ではロプ=ノールからミーラン・チャルクリク・チェルチェンを含むタリム盆地東南辺一帯の汎称としてロプ地方の語を使う)に通ずる道である⁽¹⁷⁾。それ故、吐蕃がチベット高原から中央アジアに進出するには、先ず最初にこれら二つの大道⁽¹⁸⁾上に存在する国々を軍事力で服属させるか、あるいは何らかの手段を使って懐柔せねばならなかった。では、それらの国々とは如何なる国々か。

まず西北方面からみていくと、Zhang-zhung(シャンシュン=羊同)⁽¹⁹⁾、Suvarṇa gotra(スヴァルナゴトラ、金氏=女国)⁽²⁰⁾、Sbal-ti(バルティ=大勃律=Baltistan)⁽²¹⁾、Bru-zha(ブルシャ=小勃律=Gilgit)⁽²¹⁾等がその主なものである。そのうち吐蕃に

最も近い羊同は早くもソンツェン=ガムポ王(?—649年)の治世中の643—645年にその領域に組み込まれたことがチベット側史料から知られるのである⁽²²⁾。しかるに女国及び勃律(はじめは大小に分裂していない)の吐蕃への服属年代については、これを伝える直接的史料はなく、わずかに大唐西域記・卷四・波羅吸摩補羅国条に「(蘇伐刺擊瞿坦羅国) 東接土蕃国」とある記事から玄奘が西域～印度の地にあった628—644年の頃、女国は未だ吐蕃の支配下に入っていなかったことを推測し得るのみである。もちろん女国よりさらに遠い勃律が吐蕃に服属していなかったことは、言うまでもなからう。また、通鑑・貞觀二十(646)年之条及び兩唐書・西突厥伝にある

六月丁卯、西突厥乙毗射匱可汗、遣使入貢、且請婚。上許之、且使割龜茲・于闐・疏勒・朱俱波(カルガリク)・葱嶺(サリコル溪谷中のタシュクルガンあたり)五国以為聘禮。

〈TCTC・卷198, p. 6236〉

という記事は、吐蕃がまだパミール地方から西域に進出していなかったことを消極的ながらも物語るものである⁽²³⁾。

一方、東北地方には蘇毗⁽²⁴⁾・多弥⁽²⁵⁾・白蘭(Sum-pa, スムバ)⁽²⁶⁾そして吐谷渾('A-zha, アシャ)⁽²⁷⁾の諸国が存在したが、このうち前三者はすでにソンツェン=ガムポ時代の比較的早い時期に臣属しており⁽²⁸⁾、残るは吐谷渾ただ一つとなっていた。この時代の吐谷渾に関しては佐藤⁽²⁹⁾・山口⁽³⁰⁾氏等の詳しい研究があるが、要するに親唐派と親吐蕃派に分かれて激しい勢力争いを演じていた時代である。だが序論でも触れたように、吐谷渾からツァイダム盆地を通して直接西域に出る幹線上に位置するロプ地方は、すでに635年に唐の支配下に帰してしまっていたのである。玄奘は帰途、コータンから使者をやって太宗に上表文を奉ったが、それに対する太宗の返書の中に「敦煌の官司には玄奘法師を流沙でお出迎えするように、鄯善の官司には沮沫^{チュルチエン}まで出ていってお迎えするように命じた」〈大唐大慈恩寺三蔵法師伝・卷五〉とあることから、644年頃にも唐の勢力は引き続きロプ地方に及んでいたことが窺われる⁽³¹⁾。このことは裏を返せば、即ち、当時吐蕃の勢力はこの辺りにまでは及んでいなかったということである。

ソンツェン=ガムポ時代の吐蕃と西域の結びつきについて私が見出し得た史料は、通鑑・貞觀二十一(647)年十二月之条にある

龜茲王伐疊卒、弟訶黎布失畢立。浸失臣禮、侵漁鄰国。上怒、戊寅、詔使持節崑丘道行軍大總管左驍衛大將軍阿史那社爾・副大總管右驍衛大將軍契苾何力・安西都護郭孝恪等將兵擊之、仍命鉄勒十三州・突厥・吐蕃・吐谷渾連兵進討。

〈TCTC・卷198, pp. 6250—6251〉

という記事だけであるが、これは単に、641年の文成公主の降嫁、さらに646年のソンツェン=ガムポ王との再婚などにみられるように⁽³²⁾、唐と親密な関係にあった吐蕃が、唐の龜茲征伐を援助する目的で一隊を派遣したことを示すにすぎない。この時の派兵は吐谷渾も一緒であるから、吐蕃軍はその東北方面より出陣したものと思われる。

以上概観してきたところをまとめれば、吐蕃開国の英主と謳われたソンツェン=ガムポ王も、その勢力を直接西域にまで伸ばすことが出来なかったということである。しかしながら西北のシャンシュン(羊同)占領と東北の吐谷渾への食い込みは、彼を継いだマンソン=マンツェン王、さらにその次のチ=ドゥーソン王の時代における吐蕃軍の華々しい西域進撃の足がかりを築くものであったこと、これだけは確かなこととして認めてよいであろう。

第二章

マンソン=マンツェン Mang srong mang btsan 時代 (650—676 年在位)

吐蕃軍が吐蕃の軍隊として初めて中央アジアに登場するのは、ソンツェン=ガムポの没後十数年を経た龍朔二年(662年)⁽³³⁾のことである。冊府元龜には、颯海道総管・蘇海政が継往絶可汗・阿史那步真の讒言を容れて、共に興昔亡可汗・阿史那弥射を討ったことを伝える続きに、

海政與步真追討，平之。海政軍廻至疎勒之南，弓月又引吐蕃之衆来拒官軍。海政以師老，不敢戰，遂以軍資賂吐蕃，約和而還。

〈TFYK・卷449・将帥部・専殺，p.5324下〉

とある⁽³⁴⁾。ここに見える弓月部については、その出自や本拠が十分には解明されていない。しかし弓月はこれ以後吐蕃及び疏勒と行動を共にすることが多く、コータンなどへも侵入しているところから、松田氏は「弓月についての考」の中でその本拠をイシック=クル付近～ナリン河流域に比定した⁽³⁵⁾。氏のこの論考は非常に着想豊かで、それだけに問題点も多いが、その本拠地の比定と、弓月を五弩失畢部の一姓とみなす点については、一応氏の説に従っておきたい。ところでこの年、吐蕃がカシュガル地方に進軍するにはパミール地方を經由したであろうことは常識的にも推測されるところであるが、この考えは、吐蕃が東北の吐谷渾を手中に収めたのが、どんなに早くても翌663年⁽³⁶⁾、最近の山口氏や鈴木氏の研究に依拠すればもっと後の670年である⁽³⁷⁾ことから裏付けられるのである。

先にソンツェン=ガムポの時代には、吐蕃の西北にあった羊同(シャンシュン)・女国(スヴァルナゴトラ)・勃律(ボロル)のうち羊同だけが吐蕃の支配下に入って

いたことをみたが、慧超の往五天竺国伝によれば、
又一月程過雪山。東有一小国，名蘇跋那具怛羅，属土蕃国所管。衣著與北天相似，言音即別。土地極寒也。

〈同伝，蘇跋那具怛羅の条〉⁽³⁸⁾

又迦葉弥羅国東北，隔山十五日程，即是大勃律国・揚同国・娑播慈国。此三国並属吐蕃所管。衣著言音人風並別。著皮裘疊衫靴袴等也。地狭小，山川極險。亦有寺有僧，敬信三寶。若是已東吐蕃，総無寺舍，不識佛法。當土是胡，所以信也。

〈同伝，大勃律・揚同・娑播慈の条〉⁽³⁹⁾

とある。即ち慧超がこれらの情報を得たと思われる726—727年頃⁽⁴⁰⁾には、羊同(揚同)はもちろん女国も大勃律もすでに吐蕃に完全に服属していたことが知られるのである。このような情勢がいつ頃から生じたかについては史乘に明文がなく、はっきりしたことは分らないのであるが、恐らくソンツェン=ガムポの治世末年から662年の間に吐蕃は女国及び勃律を「服属ないし懐柔」することに成功したのであろう⁽⁴¹⁾。ちょうどこの頃(桑山氏によれば640年代末—650年代初め)、インドへの求法途上にあった娑門・玄照は、東トルキスタン→ソグディアナ→トカリストン→パミール→吐蕃へと到り、そこから文成公主の命をうけた一隊に送られて北インドに赴いた、という⁽⁴²⁾。玄照がインドに行くのにパミールから直接南下するという古来からの常道を取らずに、わざわざ吐蕃を経由したのは、当時吐蕃の威令がパミール地方にまで鳴りひびいており、吐蕃に保護を求めておく方が安全だと判断したからではあるまいか。あるいはまた彼は、熱心な仏教信者であったといわれる文成公主の招きを受けたのかもしれないが、それにしても吐蕃の勢力がパミール地方にまで及んでいなければ、文成公主からの使者はこの方面でうまく彼に連絡を取ることは出来なかったはずである。

次いで665年になると吐蕃は疏勒・弓月と共に于闐に侵入した。冊府元龜・外臣部・交侵篇には、

麟德二年(665年)閏三月，疎勒・弓月両国共引吐蕃之兵，以侵于闐。詔西州^{原文⁽⁴³⁾西川}都督崔知辯及左武衛將軍曹繼叔率兵救之。

〈TFYK・巻995, p.11687上〉

とあり、新唐書・巻3・高宗本紀及び通鑑・巻201も同内容を伝えている。ここでこれらの記事に対するトマス氏の解説を聞いてみよう。

Khotan, which early in the seventh century had been subject to the Turks, was first threatened by the Tibetans in A. D. 665, when it was saved by the Chinese. These Tibetans may have approached from the

eastern (Cer-cen) direction ; but, as they were co-operating with Turks and Kashgaris, it may have been by the northern route from the kingdom of Shan-shan, which at that time was perhaps under their control.

〈TLTD, I, p. 149〉

In the year A. D. 665 the Tibetans attacked Khotan, no doubt from the eastern or northern direction, but it was succoured by the Chinese.

〈TLTD, I, pp. 159-160〉

この年の吐蕃のコータン侵入を史上初とみる点は一応うなずける⁽⁴⁴⁾。しかし氏は吐蕃のコータン侵入経路として、東方の Shan-shan (鄯善) ~ Cer-cen (チェルチェン=且末) 地方から直接来る道、ないしは一旦天山方面へ北上し、そこから南下してくる道を想定しており、この点私の考えと異なる。確かに、従来の説によれば、663年には吐蕃は吐谷渾を征服しており、吐谷渾の旧領であったロブ地方が吐蕃の領土として編入されたと考えられなくもないのであるから、トマス氏の考えも一概に否定し去ることはできない。しかし私は、この時の吐蕃は弓月だけでなく疏勒とも連携しているのであるから、やはり662年の時と同じくパミール方面から侵入したと考えるのである。

ちなみに佐藤氏はチベット語の敦煌編年記 (P. t. 1288 & India Office 750 & Or. 8212-187)・668年の条にある

'bru gi lo la / btsan po sprags gyi
 龍の年に ^{ツェンボ}王 は Sprags の
 sha ra na bzhugs cing / ji ma gol du
 Sha-ra に お住まいになり, Ji-ma-gol に
 dgra bzher brtsigs par lo chig /
 城塞を建設してこの一年〔はすぎた〕。

〈CDT, Pl. 580, l. 48; DTH, p.14 & p. 33; 『敦歴』 p. 17&p. 103〉

という記事を紹介し、ここにみえる Ji-ma-gol をチェルチェン=ダリアに比定した⁽⁴⁵⁾。本文書の最初の紹介者であるバコー・トマス両氏も “Zi-ma-khol est peut-être le Turkestan oriental.” という註を与えている⁽⁴⁶⁾。もしこれらの説が正しいければ、本史料は敦煌編年記中で具体的に西域のことを伝えた最初のものということになる。さらに編年記・670年の条には、

rta'i lo la' / btsan po 'o dang na bzhugs
 馬の年に 王 は 'O-dang に お住まい

shing / ji ma khol du rgya mang po bdungs

になり、Ji-ma-khol では 中国人多数を殺して

phar lo gchig /

この一年〔はすぎた〕。

〈CDT, Pl. 580, l. 50; DTH, p. 14 & p. 33; 『敦歴』 p. 17 & p. 103〉

とある。つまり吐蕃はチェルチェン地方においては668年—670年に至ってもまだ城塞を築いたり、唐と干戈を交えるような状態にあったわけである。ところが一方コータン地方はどうかというと、以下に見るように、670年にはすでに完全に吐蕃の支配下に入っており、吐蕃はこの年于闐の衆をも率いて龜茲を攻撃したのである。即ち670年当時、吐蕃は東トルキスタンの西南部はほぼ完全に制圧していたが、東南部においてはまだその支配権は不安定であったとみてよい。とすれば665年の吐蕃の于闐攻撃は、チェルチェン地方からではなくて、パミール地方からなされたと考える方がはるかに合理的であろう。まして最近の山口氏の研究によれば、Ji-ma-gol (khol) はチェルチェン=ダリアなどではなくして、吐谷渾の本拠に近い大非川であるとされ、且つ吐蕃による吐谷渾完全征圧も670年(または672年)であるとみる方がよいようであるから⁽⁴⁷⁾、私の考えはより一層の支持を得ることになろう。

さて670年という年が唐と吐蕃の西域争奪史上きわめて重要な年であることは序論の記述からも明らかなことと思う。即ちこの年吐蕃は于闐の衆をも引き連れて安西都護府を攻撃した。このことはまた、安西四鎮の一つの于闐が670年以前に既に吐蕃の勢力下に入っていたことをも意味する。

〔咸亨元年〕(670年)夏四月，吐蕃寇陷白州等一十八州，又與于闐合衆，襲龜茲・撥換城⁽⁴⁸⁾，陷之。罷安西四鎮。

〈CTS・巻5・高宗本紀，p. 94〉

咸亨元年，入^{やより}殘羈縻十八州，率于闐，取龜茲・撥換城。於是安西四鎮並廢。

〈HTS・巻216上・吐蕃伝，p. 6076〉

〔咸亨元年〕夏四月，吐蕃陷西域十八州，又與于闐襲龜茲・撥換城，陷之。罷龜茲・于闐・焉耆・疏勒四鎮。

〈TCTC・巻201，p. 6363〉

咸亨元年四月二十二日，吐蕃陷我安西，罷四鎮。

〈THY・巻73・安西都護府の条〉

蘇〔冕〕氏記曰，咸亨元年四月，罷四鎮，是龜茲・于闐・焉耆・疎勒。

〈同上〉

両唐書及び通鑑は具体的に吐蕃が龜茲管轄下の撥換城を攻め取ったことを記し

ているが、それはこの地が龜茲西方の前進基地として重要な位置を占めており、ここが落ちることは即ち龜茲の安西都護府陥落にすぐつながることを意味したからであろう。(この年、吐蕃と唐の間で戦闘が行われたのが龜茲方面だけでなかったことは、前掲の敦煌編年記の示すとおりである。)また、それ故にこそ撥換城の陥落直後、唐は安西都護府を西州に引き戻し、安西四鎮を一時放棄せざるを得なかったのである。ところで伊瀬氏は、先に引用した疎勒に関する記事とここに引用した記事とから、すでに670年以前に疏勒と于闐は唐の支配下より離れており、この年実際に廃止したのは龜茲と焉耆の二鎮だけであるとの結論に達したが、この点は十分に認めてよいと思う⁽⁴⁹⁾。吐蕃が寇陥したのが白州等一十八州というのは、龜茲都督府に9州、疏勒都督府に15州、毗沙都督府(于闐)に5州、焉耆都督府に蕃州なしと伝えられる⁽⁵⁰⁾ところと比較すると、いささか少ないような感じを受けるが、これは、おそらく670年以前に既に吐蕃の手に渡っていたものを除いた残りの数を言ったものであろう。両唐書・地理志は四鎮に隸属した蕃州の名前を全く挙げておらないため、白州がどこにあったのかは明らかでない。ただ、白州が十八州の代表として唯一史乘に名を留めているところから、かなりの重要地点とみられ、あるいは龜茲の王姓白氏に因んだものかとも考えられる⁽⁵¹⁾。ともあれ670年を以って、一時、ロプ地方を除く⁽⁵²⁾タリム盆地一帯がほぼ完全に吐蕃の勢力下に入ったことは疑いない。

一方、天山以北のチュルク族はこの頃どのような動きをみせていただろうか。興昔亡・繼往絶両可汗の間の葛藤については序論に述べた。繼往絶可汗は十姓部落全体を統べる能力には欠けていたが、西突厥遺衆の安撫をめざす唐の傀儡可汗としては十分役に立っていたようである。しかし彼も667年には世を去った。冊府元龜・外臣部・繼襲篇には、

乾封二年(667年)二可汗(興昔亡可汗
繼往絶可汗)既死。餘衆附于吐蕃。

〈TFYK・巻967, p.11372上〉

とある。これは、659年の思結部の反乱、662年の拔塞幹部及び弓月部の動きにみられるように、元来反唐的傾向を有しながらも表面上は繼往絶可汗に従って唐に服属していた五弩失畢部が、彼の死を機会に最終的に唐と袂をわかったことを意味している。そしてこれが吐蕃と結び付いたのは、たまたま吐蕃が南方より勃興しており、反唐という点で両者の利害が一致したからであって、ほかに特別の理由があったからとは思われない。これに対し、東方の五咄陸部のもとにあっても、興昔亡可汗が蘇海政の手にかかって殺害されて以来、俄に反唐的気運が盛り上がったことは既に述べた。ところが繼往絶可汗の死の四年後(671年)に、唐は五咄陸部の首領・阿史那都支を左驍衛大將軍兼匭延都督に任じてい

るのである⁽⁵³⁾。これは一体どういうことか。その理由は、670年の吐蕃による四鎮攻略と、それ以前からのチュルク族(主に五弩失畢)と吐蕃との結び付きに鑑みれば、自ら明らかであろう。即ち安西四鎮奪回を目指す唐は、チュルクと吐蕃が全面的に連合し、協同して唐に当たってくるのを恐れて、逸速く一本の楔を打ち込んだわけである。だがこの思惑も、677年における阿史那都支と吐蕃との連合軍による安西攻撃という事実(これについては後述する)を前に見事に失敗し、それ以後西域に駐留する唐軍は北のチュルクと南の吐蕃という二つの強大な敵を相手にしなければならなくなるのである。

以上のようにチュルク族との軍事的結合を深め、安西四鎮の奪取にも成功した吐蕃であったが、吐蕃はほんの数年間しか四鎮を保つことは出来なかったようである。早くも673年には疏勒が、次いで674年には于闐がそれぞれ唐に來降している。

〔咸亨四年〕(673年)十二月丙午，弓月・疎勒二国王入朝請降。

〈CTS・卷5・高宗本紀，p. 98〉

〔咸亨四年〕十二月丙午，弓月・疏勒二王來降。

〈TCTC・卷202，p. 6371〉

〔上元元年〕(674年)〔十二月〕戊子，于闐王・伏闐雄來朝。

〈CTS・卷5・高宗本紀，p. 99〉

〔上元二年〕(675年)〔正月〕丙寅，以于闐為毗沙都督府。以尉遲伏闐雄為毗沙都督，分其境内為十州，以伏闐雄有擊吐蕃功故也。庚午，龜茲王白素稽獻銀頗羅。

〈CTS・卷5・高宗本紀，pp. 99—100〉

そして松田⁽⁵⁴⁾・伊瀬⁽⁵⁵⁾・佐藤⁽⁵⁶⁾三氏の見解を総合すれば、焉耆および龜茲をも含めて安西四鎮はすべて676年までには復置されていたと結論することが出来る⁽⁵⁷⁾。敦煌文書である「沙州・伊州志」や「寿昌県地鏡」などによれば、タリム盆地でもロプ地方(すなわちまだ吐蕃に没したことの無い地方)にあった典合城(チャルクリク、かつての鄯善)と且末城(チェルチェン)について、前者は上元二年(675年)に石城鎮へ、後者は上元三年(676年)に播仙鎮へとそれぞれ改名され、ともに鎮として沙州(敦煌)の管下に組み込まれたことが知られる⁽⁵⁸⁾。これは恐らく、西域支配におけるロプ地方の戦略的重要さを再認識した唐が、当時ソグド商人が多く居住し⁽⁵⁹⁾、中立的～半独立的地位を保っていたこの地方を直接統治下に置こうとした結果なのであろう。このことと四鎮復活とは、必ずや見えない糸で結ばれていたものと思われる。

ではなぜ吐蕃は、せっかく手に入れた安西四鎮が一つ一つ吐蕃の手を離れて

唐に帰服していくのに対し、積極的な軍事行動を起こさなかったのか。伊瀬氏はこの間の事情を説明して次のように言う⁽⁶⁰⁾。

「思うに吐蕃は、安西四鎮を攻陥せる後、唐の西辺諸州への侵略、いいかえるならば、自国の東辺拓境に主力を集中し、唐軍と絶えず干戈を交えていたのであって、于闐を含む爾他の地方に対しては十分なる軍備をせず、かくて、于闐王伏闍雄はその隙に乗じて吐蕃の勢力を容易に撃攘することができた、とみて差支えないであろう。そして、伏闍雄の場合において見られる都督府設置の事情は、同時に安西都護府および疎勒・龜茲・焉耆の三都督府、従って、安西三鎮の復置せられた事情にも適用されるのであって、畢竟するに、この方面に対する吐蕃の警備の手薄なのに乗じて実現されたものといってよい。」

もし、671—676年に於ける吐蕃と唐との交戦を伝える史料が豊富で、かつこれらの多くが吐蕃の不利を告げているのなら、私は氏の説に従うのにやぶさかでない。しかし、両唐書の本紀及び吐蕃伝、資治通鑑、冊府元龜などによる限り、この間、連年のように大がかりな戦闘が行われていたとは到底思えない⁽⁶¹⁾。まして吐蕃は、670年の安西四鎮攻陥後に唐が派遣した大軍を青海地方に破り、吐谷渾の故地を完全に占領して⁽⁶²⁾、西域への足場を従来より一層固めているのである。にもかかわらず、吐蕃は上元年間には主力部隊を西域から引き揚げ⁽⁶³⁾、四鎮が次々に唐に降参するのを阻止しようとした形跡さえ窺えないのはどうしたわけか。私はこの背後には吐蕃の政局を揺さぶる何らかの大きな動きがあったように思うのであるが、この点はまだ全く推測の域を出ておらず、今後の課題として残しておきたい。

第三章

チ=ドゥーソン Khri 'dus srong 時代 (676—704 年在位)

前ツェンポ末年に安西四鎮が唐の支配下(ただしここでは多分に形式的な支配)に帰したのは、唐が実力で奪い取ったからではなく、吐蕃が一時的に兵を引き揚げた隙に、四鎮の土着政権が自発的に唐に帰服した結果であった。それ故、吐蕃軍があらためて西域に進出してくると、四鎮は再び吐蕃の支配を蒙ることになる。しかも今度の吐蕃の西域進出は先の670年の時とは異なり、チュルク族との全面的な協調関係のうえに遂行されたものであり、両者の間にはあらかじめ周到な連絡がとられていた。敦煌編年記には、

phagi lo la bab ste / / dbyard / blon btsan

豚の年(675年)になって 夏 ロンのツェン

snyas/zhims gyi gu ran du zhang zhung
 ニャは Zhims の Gu-ran で シャンシュン
 gyi mkhos bgyiste / dru gu yul du ltang yor
 の 視察 を し , Dru-gu 国にある Ltang-yo に
 mchis
 行った。

〈CDT, Pl. 581, ll. 11-13; DTH, p. 15 & p. 34; 『敦歴』 p. 18 & p. 104〉
 とある。ロンのツェンニャとは、吐蕃の西域進出を積極的に推し進めた Mgar^{ガル}一^ル家^{いっ}の出身で、当時の吐蕃政局を牛耳っていた大論(宰相) Mgar btsan snya ldom bu(ガル=ツェンニャ=ドムブ)を指す。“drangs(進軍した)⁽⁶⁴⁾”ではなく、単に“mchis(行った)”とあるのだから、これは宰相自らが政治的折衝のために Dru-gu(チュルク)国⁽⁶⁵⁾へ赴いたことを意味する。またこの時彼はシャンシュンを通っているのだから、この Dru-gu(チュルク)国の Ltang-yo とは、パミール地方ないしはその北方の一地点に違いない。673年に疏勒と一緒に唐に帰服した弓月も再び吐蕃に接近していたと思われる。敦煌編年記の676年の条には、

byi ba'i lo la bab ste / / dgun /
 ネズミの年になって 冬
 blon btsan snyas dru gu yul du drangste /
 ロンのツェンニャは Dru-gu 国 に進軍し、
 ldum bu khri bshos khrom 'tsald par
 ドムブは Khri-bshos 軍団⁽⁶⁶⁾を作って (?)
 lo gchig /
 この一年〔はすぎた〕。

〈CDT, Pl. 581, ll. 15-17; DTH, p. 15 & p. 34; 『敦歴』 pp. 18-19 & p. 104〉
 とあり、今回は明らかに宰相のツェンニャ自らが軍を率いたことが知られる。新唐書・西域伝・疏勒之条には、

儀鳳時，吐蕃破其国。

〈HTS・卷221上, p. 6233〉

とあるが、恐らくこの事件と宰相ツェンニャのチュルク国への進軍とは密接な関係があろう。ただしチュルク国への進軍といっても、これがチュルクとの戦争を意味するのではないことはもちろんである。吐蕃軍は、当時のチュルク諸部族中の実力者である阿史那都支および李遮旬と連携し、翌677年の安西(亀兹)一斉攻撃に備えていたわけである。両唐書及び冊府元龜の裴行俊伝にはそれぞれ、

儀鳳二年⁽⁶⁷⁾(677年), 十姓可汗阿史那匭延都支及李遮匭扇動蕃落, 侵逼安西, 連和吐蕃。

〈CTS・卷 84, p. 2802〉

儀鳳二年, 十姓可汗阿史那都支及李遮匭誘蕃落以動安西, 與吐蕃連和, 朝廷欲討之。

〈HTS・卷 108, p. 4086〉

儀鳳二年, 討西突厥, 擒其十姓可汗阿史那都支及別帥李遮匭以歸。初都支・遮匭與吐蕃連和, 侵逼安西。

〈TFYK・卷 366・將帥部・機略六, p. 4355 上〉

とあり, 新唐書・西域伝・龜茲之条には,
始, 儀鳳時, 吐蕃攻焉耆以西, 四鎮皆没。

〈HTS・卷 221 上, p. 6232〉

とある。また旧唐書・吐蕃伝・儀鳳三年(678)之条では,
時吐蕃盡収羊同・党項及諸羌之地。東與涼・松・茂・舊等州相接, 南至婆羅門, 西又攻陷龜茲・疏勒等四鎮, 北抵突厥, 地方萬餘里。自漢魏已來, 西戎之盛, 未之有也。

〈CTS・卷 196 上, p. 5224〉

として, 当時の吐蕃の強盛と, 西域への華々しい進出ぶりを如実に物語っているのである⁽⁶⁸⁾。

以上のような吐蕃とチュルクとの連合は, 唐の西域経営にとっては最も憂うべきことであり, それを恐れたが故にこそ, 先に, 安西四鎮放棄のやむなきに至った咸亨元年の翌年(672年), 唐は十姓可汗の阿史那都支を匭延都督に任命することによって懐柔しようとしたのである⁽⁶⁹⁾。しかし今やその企てが水泡に帰したことは誰の目にも明らかとなった。唐の朝廷では即時出兵の声が高まったが, 結局, 裴行儉の建議に従い, 彼自身を派遣することにした。彼は, 679年, ササン朝ペルシャ王家の末裔ペーローズ(卑路斯)の子ナルセス(泥理師師)⁽⁷⁰⁾を利用するという有名な謀略⁽⁷¹⁾を用いて, 十姓可汗・阿史那都支及びその別帥・李遮匭を捕え, 王方翼に命じて西突厥余衆の重要拠点に唐の駐留軍のための城郭を築かせた。これがいわゆる碎葉鎮であり, かつての焉耆に代わって新たに碎葉が四鎮の一つに数えられるのがこの時からであることは松田氏以来の定説であり⁽⁷²⁾, 私もこれに従う。しかし, この碎葉鎮と焉耆鎮の交代を伝える冊府元龜・外臣部・繼襲篇・西突厥之条の,

調路元年(679), 以碎葉・龜茲・于闐・疏勒為四鎮。

〈TFYK・卷 967, p. 11372 上〉

という記事をもって、直ちに、唐は679年に安西四鎮全部を完全に回復した、とする見方⁽⁷³⁾に対しては、今しばらく諾否をいうのを保留しておきたい⁽⁷⁴⁾。確かに、677年以後は吐蕃とチュルクとが連合して四鎮を押さえていたと推測されるのに、687年にはまたも吐蕃が四鎮を攻略している（後述）のであるから、その間に唐が四鎮を回復したことは確実で、その年次を679年に直結させるのは無理からぬところである。だがこの時期（677-687年）で実際に史料に現われるのは、唐がチュルクの首領を捕えたり、チュルクの余衆の反乱を鎮圧した⁽⁷⁵⁾というような記事ばかりである。西域における唐と吐蕃との確執については、その痕跡さえ見当らないのである。チュルクと吐蕃両方の支配下にあった四鎮地方を、チュルクだけを倒すことによって奪回したとする説に一応の疑問をさしはさむことは正当であろう⁽⁷⁶⁾。

679年以後、吐蕃が唐に対し何の抵抗もせずに西域から手を引いたのがもし事実であるとしたら、その裏には必ずや何らかの深い理由が存在しなければならない。私は先に、670年の四鎮攻陥後の上元年間に吐蕃が西域から軍隊を引き揚げたことを述べて、その背後には吐蕃王国内の混乱があったのではないかと推測しておいた。それゆえ今度の場合も同じような事情が想像されるのであるが、実は今度の場合は単なる想像にとどまらないのである。というのは、佐藤氏によって、676年に幼年のツェンポが即位した後、実力者間に政権争いがあったことが明らかにされているからである。とくにこの政権争いは677年以後に表面化したようで、佐藤氏は敦煌編年記（678年・680年の条）及び漢文史料からMgar一家に対抗した二人の重臣が失脚したことを述べている⁽⁷⁷⁾。682年には阿史那車薄に率いられた西突厥余衆の反乱が勃発したが⁽⁷⁸⁾、この際にチュルクと吐蕃の間には何の連絡もなかったらしい。佐藤氏はこの点についても注意を促している⁽⁷⁹⁾。

685年宰相ツェンニャが死亡し、弟のチンリン（Khri 'bring 欽陵）が大論（宰相）の地位に就くと、吐蕃はまたもや西域に向かって進撃を開始した。敦煌編年記には次のようにチンリン自らの出動を伝えている。

khyi'i lo la bab ste / btsan po nyen kar
 犬の年(686年)になって、王は Nyen-kar
 na bzhugs shing / blon khri 'bring gyis/
 にお住まいになり、ロンのチンリンは
 dru gu yul du drang zhes bgyi bgyi ba las/
 Dru-gu国に 進軍せん としていて、

phyi dalte / dbyar 'dun shong snar 'dus/

(その予定が)遅れ⁽⁸⁰⁾, 夏 国事会議を Shong-sna で開催した。

<CDT, Pl. 582, ll. 43-44; DTH, p. 16 & p. 36; 『敦歴』 p. 20 & p. 105>

pagi lo la babste / btsan po nyen kar

豚の年(687年)になって 王は Nyen-kar

na bzhugs shing / blon khri 'bring gyis/

にお住まいになり, ロンの チンリン は

dru gu gu zan yul du drangs/

Dru-gu の Gu-zan 国に 進軍した。

<CDT, Pl. 582, l. 46; DTH, p. 16 & p. 36; 『敦歴』 p. 21 & p. 106>

687年に安西四鎮(ここでは焉耆を含む旧安西四鎮を指す)がまたもや吐蕃の攻撃を受けて、その支配下に入っていたであろうことは、最初、松田氏によって推定され⁽⁸¹⁾、次いで漢文史料を詳細に検討した伊瀬氏によってほぼ確実視されるまでに至った⁽⁸²⁾。佐藤氏はこうした成果の上にさらに上掲のチベット語史料を加えることによって、このことを確定したわけである⁽⁸³⁾。その際、佐藤氏は Gu-zan (グサン)を龜茲(チュルク話の Kūsān)とみなしたが⁽⁸⁴⁾、結論的には私もこの考えに賛成である。また、伊瀬・佐藤両氏の引用する⁽⁸⁵⁾

垂拱中,〔唐休璟〕遷安西副都護。會吐蕃攻破焉耆。

<CTS・卷93・唐休璟伝, p. 2978>

という記事の後半部は、垂拱三年(687年)のチンリン軍の出動の結果とみて誤りないであろう。

さて687年焉耆以西の四鎮の地を吐蕃に奪われた唐は、この事態にどう対処したであろうか。佐藤氏によれば「(則天)武后はこのような状勢に対して直ちに韋待價を出動せしめようとしたが、韋方質等の奏請があり、遅れて二年後永昌元年(689年)に至って漸く軍を動かすことができたのでであろう。」という⁽⁸⁶⁾。しかしこの戦いは唐軍の大敗に終わったようで、通鑑には、

〔永昌元年〕(689年)五月丙辰,命文昌右相韋待價為安息道行軍大總管,擊吐蕃。(中略)。(秋七月)韋待價軍至寅識迦河挾旧書待價伝,寅與吐蕃戰,大敗。待價既無將領之才,狼狽失據,士卒凍餒,死亡甚衆,乃引軍還。太后大怒。丙子,待價除名,流繡州,斬副大總管安西大都護閻温古。安西副都護唐休璟収其餘衆,撫安西土。太后以休璟為西州都督。

<TCTC・卷204, pp. 6457, 6459>

とある。安西大都護は処刑されたのであるから、当然副都護の唐休璟が昇格してもよいはずであるのに、かえって西州都督に格下げされているのは、佐藤氏

のいうように⁽⁸⁷⁾、単なる左遷ではなく、安西（大・副）都護の統轄すべき対象すなわち安西四鎮が無くなってしまったからであろう。敦煌編年記は単に、

glang gyi lo la bab ste / …………… / blon

牛の年(689年)になって ……………大ロン (宰
che khri 'bring dru gu yul nas slar

相)のチンリンは Dru-gu 国 から 帰
'khorté /

還した。

〈CDT, Pl. 582, ll. 51-52; DTH, p. 17 & p. 37; 『敦歴』 p. 21 & p. 106〉

と記すだけであるが、この記事が、吐蕃軍を率いてトルキスタンへ進出していた宰相チンリンの本国への凱旋を伝えたものであることはまず間違いあるまい。

このように670年以後唐と吐蕃とチュルクは西域をめぐる激しい攻防を展開し、互いに一進一退を繰り返していたわけである。だがこのような状態も692—694年の大戦争を以って一応の終止符を打つことになる。その経過を次にみることにする。

まず資治通鑑、旧唐書西戎伝、新唐書吐蕃伝の

〔長壽元年〕(692年)會西州都督唐休璟請復取龜茲・于闐・疏勒・碎葉四鎮，敕以孝傑為武威軍總管，與武衛大將軍阿史那忠節將兵擊吐蕃。冬十月，丙戌，大破吐蕃，復取四鎮。置安西都護府於龜茲，發兵戍之。

〈TCTC・卷205, pp. 6487—6488〉

長壽元年，武威軍總管王孝傑・阿史那忠節大破吐蕃，克復龜茲・于闐等四鎮。自此復於龜茲置安西都護府，用漢兵三萬人以鎮之。

〈CTS・卷198・西戎伝龜茲条, p. 5304〉

是歲，又詔右鷹揚衛將軍王孝傑為武威道行軍總管，率西州都督唐休璟・左武衛大將軍阿史那忠節擊吐蕃，大破其衆，復取四鎮，更置安西都護府於龜茲，以兵鎮守。

〈HTS・卷216上・吐蕃伝, p. 6078〉

という記事より、唐が王孝傑を首とし、西州都督の唐休璟と突騎施チユルギツシユの部将阿史那忠節⁽⁸⁸⁾とを副として大がかりな四鎮奪取作戦を遂行せしめ、チンリンが心血を注いだ吐蕃の西域支配体制を打ち崩したことが知られる。この事件は、以上の記事のほか、伊瀬氏の指摘によれば、両唐書本紀、両唐書王孝傑伝、旧唐書吐蕃伝、冊府元龜(卷358)将帥部立功十一など多くが長壽元年(692年)にかけているため、氏はこれを692年中に完結した出来事と見⁽⁸⁹⁾、佐藤氏もこれに

従った⁽⁹⁰⁾。しかし伊瀬氏自身が注意するように、これを長寿二年（693年）にかける記事も存在するのである。

至長壽二年，収復安西四鎮，依前於龜茲国置安西都護府。

〈CTS・卷40・地理志安西大都護府条，p.1647〉

長壽二年，収復安西四鎮。

〈HTS・卷40・地理志安西大都護府条，p.1047〉

長壽二年，十一月一日，武威軍總管王孝傑克復四鎮，依前於龜茲置安西都護府。

〈THY・卷73・安西都護府条〉

また近年トゥルファン盆地で発見された「延載元年（694年）汜徳達告身⁽⁹¹⁾」を考証した中村裕一氏によれば、長寿二年にも唐軍が安西四鎮を攻撃した可能性が出てきた⁽⁹²⁾。それ故、上の事件を長寿二年にかける両唐書地理志や唐会要の記事も無下に否定すべきではなかろう。692年に始まった今度の戦争は、すぐにおさまったのではなく、実際には翌年、さらには翌々年にまで及んで、ようやく結着をみたと考える方がよいようである⁽⁹³⁾。とくに我々は通鑑・延載元年之条の、

〔延載元年〕（694年）二月，武威道總管王孝傑破吐蕃敦論賛刃・突厥可汗俊子等於冷泉及大嶺，各三萬餘人。碎葉鎮守使韓思忠破泥熟俟斤等萬餘人。

〈TCTC・卷205，p.6493〉

という記事に注目すべきであろう。また新唐書の吐蕃伝及び西突厥伝にはそれぞれ、

於是首領勃論賛與突厥偽可汗阿史那俊子南侵，與孝傑戰冷泉敗走。碎葉鎮守使韓思忠破泥熟沒斯城⁽⁹⁴⁾。

〈HTS・卷216上，p.6079〉

其明年（694年）西突厥部立阿史那俊子為可汗，與吐蕃寇。武威道大總管王孝傑與戰冷泉・大嶺谷破之。碎葉鎮守使韓思忠又破泥熟俟斤及突厥施質汗・胡祿等，因拔吐蕃泥熟沒斯城。

〈HTS・卷215下，p.6065〉

とあり、吐蕃がチュルクと連合して唐と戦っていることが知られる。これは、本稿でそれまでの歴史的経過を辿ってきた我々には、十分に首肯できる図式である。しかしこの時吐蕃側に立った阿史那俊子の率いた西突厥というのは、旧唐書・郭元振伝の、

往年〔郭〕虔瓘已曾與〔阿史那〕忠節 擅ほしいままに入拔汗那稅甲稅馬，臣在疏勒具訪，不聞得一甲入軍，拔汗那胡不勝侵擾，南勾吐蕃，即將俊子重擾四鎮。又虔

瑾往入之際，拔汗那四面無賊可勾，恣意侵吞，如独行無人之境，猶引倭子為蔽。

〈CTS・卷97, p. 3047〉

という記事より、フェルガーナ（拔汗那）から余り遠くない所（それもフェルガーナの南らしい）にいたチュルク族であることが分る。おそらくこれは、かつての西突厥の遺衆の多くの部分を突騎施が安輯した⁽⁹⁵⁾あとの残りであり⁽⁹⁶⁾、もはやその実力は突騎施に遠く及ばなかったと思われる。吐蕃がいかにかのようなチュルクと手を結んだところで、というよりむしろこのようなチュルクに新可汗を冊立してテコ入れしたところで⁽⁹⁷⁾、四鎮の地を奪い返せるはずはなかったし、事実失敗したのである。

このたびの西域をめぐる戦争は、唐が、天山以北のチュルク諸族の中で急速に勢力を伸ばしてきた突騎施といち早く結んだ時点で、大勢は決していたといっても過言ではなかろう。かつて677年には、吐蕃がチュルクの主勢力（阿史那都支と李遮旬）と協同して安西四鎮の地を奪取したのであるが、今度は逆にチュルクの主勢力（突騎施）と連合した唐によって吐蕃は西域から追い出されたわけである。

こうして692—694年の西域争奪戦は吐蕃の完敗に終わった。敦煌編年記に、

rta'i lo la / / mgar sta gu

馬の年(694年)に ガル=タグは

sog dagis bzung / dgun btsan po ra 'u tsal

ソグダク（ソグド人）⁽⁹⁸⁾に捕まった。冬、^{ツェンポ}王は Ra-'u-tsal

na bzhugs shing / ton ya bgo kha gan pyag

にお住まいになり、トン=ヤブグ可汗が(ツェンポに)臣礼を

'tsald /

取り(に)来た。

〈CDT, Pl. 583, ll. 65-67; DTH, p. 17 & p. 38; 『敦歴』 p. 22 & p. 107〉

とあるうちの、ソグド人に捕えられたガル=タグとは、宰相チンリン（ガル=トンツェンの次男）の弟のガル=タグ=リスン Mgar sta gu ri zung（ガル=トンツェンの四男で漢文史料の悉多干）であり⁽⁹⁹⁾、トン=ヤブグ可汗（明らかにチュルク語の Ton Yabyu Qayan）こそは吐蕃の傀儡となって働いた阿史那倭子その人と推定される⁽¹⁰⁰⁾。ガル=タグは指揮官の一人として遠征中に捕虜になったのであろうし⁽¹⁰¹⁾、トン=ヤブグ可汗の方は、唐軍に破られた後、吐蕃軍ともどもチベット本土へ引き揚げて来てツェンポに謁見したのであろう⁽¹⁰²⁾。また李・佐藤両氏によれば、編年記・羊の年（695年）の条に処刑されたことがみえるガル=ツェンニエ

ン=グントン Mgar btsan nyen gung rton とは、チンリンの末の弟（ガル=トンツェンの五男）で、前掲史料に阿史那倭子と共に現われる勃論賛刃（または勃論賛）と同じ者であり、その処刑は前年の敗戦の責任を取らされたものであるという⁽¹⁰³⁾。この人物はコータン国懸記 (Li yul lung-bstan-pa) にも Mgar blon btsan nyen gung ston として現われ（この名称の中の blon btsan nyen が勃論賛刃に対応）⁽¹⁰⁴⁾、彼がコータンを統治中にある寺院が建立されたことが伝えられているので⁽¹⁰⁵⁾、兄チンリンによって推進された西域支配政策に極めて重要な役割を担っていたのであろう⁽¹⁰⁶⁾。

さて、宰相チンリンは、以上のような大敗にもかかわらず、西域支配の企てを決して諦めなかった。696年、彼は、三十年もの長きにわたって東部国境地帯防衛の任にあたっていた弟の賛婆（ガル=トンツェンの三男）と共に、軍を率いて青海地方に出動し、素羅汗山で唐の王孝傑及び婁師徳の軍を破り、次いで涼州にまで入寇した⁽¹⁰⁷⁾。しかし彼の真意は河西攻陥にあったのではなく、あくまで西域奪取にあったようである。彼は青海～河西地方で唐軍を破り自己の立場を有利にしておいてから、唐に対し「安西四鎮の戍兵を罷めんことを請い、並びに十姓突厥の地を分たんことを求めた」〈TCTC・巻205・萬歲通天元年九月之条, p. 6508〉。このような求めに応じられるはずのない唐は一時その対策に苦慮したが、吐蕃の内部事情に通じた郭元振の見事な政略により無事この場を切り抜け、かつこれ以後のチンリンの動きをも完全に封じ込めることが出来た⁽¹⁰⁸⁾。そしてこのような膠着状態のさなか、チンリン及びその与党は漸く長ずるに及んだツェンポ自身のクーデターによって悉く息の根を止められてしまった（698年）⁽¹⁰⁸⁾。7世紀後半を通じ、吐蕃はガル一家の指導により積極的な中央アジア進出政策を推進したわけであるが、このガル一家の滅亡はそのまま吐蕃の西域経営の頓挫を意味した。チンリンを倒して政治の実権を握ったチ=ドゥーソン王は、西域よりもむしろ河西～青海～四川の唐との国境地帯の経略に全力を傾けていったようである。敦煌年代記 (P. t. 1287) には彼の業績を讃えて、

dru-gu la stsogs ste nyi ngog gzhan 'bangs

Dru-gu など 他の諸国を臣
su bkug cing/dpya' phab pa dang/

属せしめ、貢納を義務づけ、

mkhar sra ba phab/ yul pyug po

堅い砦を破り、豊かな国を

bcom ste chab srid legs pa mang po

征服したが、多くの友好的な国々

ni 'di'i nang du ma gthogs //

はこの中には含まれなかった。

〈CDT, Pl. 569, ll. 333-334; DTH, p. 112 & p. 149; 『敦歴』 p. 68 & p. 141〉

と述べている。吐蕃がチュルク (Dru-gu) を一方的に従えたような書き方をしているが、これは文書の性格上からは当然のことであるけれども、事実とは異なる。もちろん阿史那倭子擁立の場合のように明らかに吐蕃が上位に立ったこともあったが、だいたい対等の立場で行動していたのである。しかしいずれにせよチュルクと連携しつつ、西域支配に辣腕をふるったのは大論^{ロン} (宰相) のツェンニャやチンリンに代表されるガル一族であって、決して年代記にいうようなチドゥーソン王ではなかった。このことは注意すべきである。

だがガル一家の滅亡によって吐蕃の対外進出活動が完全に止んだわけではない。両唐書・吐蕃伝及び通鑑によれば、700年に吐蕃軍は涼州地方を攻撃している。一方、敦煌編年記には、

byi ba'i lo la bab ste / btsan po dbyard

ネズミの年(700年)になって、王は夏に

mong kar nas chab srid la sha gu

Mong-kar から 国政(をとる)ために Sha-gu

nying sum khol du gshegs shing / ton

nying-sum khol にいらっしゃって、トン=

ya bgo kha gan dru gu yul du btang /

ヤブグ可汗を Dru-gu 国へ派遣した。

ston btsan pho gshegste ga chur drangs /

秋、王はおでかけになり河州⁽¹⁰⁹⁾に進軍した。

dgun btsan poe pho brang rma bya tsal

冬、王は Rma-bya-tsal 宮殿

na bzhugs /

にお住まいになった。

〈CDT, Pl. 584, ll. 81-83; DTH, p. 18 & p. 39; 『敦歴』 p. 23 & p. 108〉

とある。

694年以降、おそらく吐蕃の勢力圏内に留まっていたと思われる⁽¹¹⁰⁾トン=ヤブグ可汗(阿史那倭子)を、今頃になってチュルク国へ「進軍させた(drangs)」のではなく単に「派遣した、送り返した(btang)」意図は一体何であろうか。またこの時のチュルク国とは具体的にどこを指しているのであろうか⁽¹¹¹⁾。可能性は二つある。

まず第一は、ツェンポ自身が軍を率いて河西に侵入するのを助けるために、阿史那倭子の名望がまだ残っていたであろう西部天山～フェルガーナ地方へ行って兵を挙げ、唐の安西四鎮守備兵を西方に釘付けにしておくことである。たまたま冊府元龜・外臣部には

〔久視元年〕(700年)九月，左金吾將軍田揚名・左台殿中侍御史封思業斬吐蕃阿悉吉薄露，傳首神都。初薄露將叛也，令揚名率兵討之。軍至碎葉城，薄露夜伏兵於城傍，掠官駝馬而去。思業率輕騎追擊之，翻為所敗。俄而揚名與阿史那斛瑟羅忠節率衆大至，薄露據城拒守，揚名拔之。積十餘日，薄露詐請降，思業誘而斬焉，遂虜其部落。

〈TFYK・卷986・外臣部・征討五，p.11582〉

とあり、通鑑には同事件を伝えて、

阿悉吉薄露叛阿悉吉，即西突厥弩失畢五俟斤之阿悉結也。薄露，其名。遣左金吾將軍田揚名・殿中侍御史封思業討之。軍至碎葉，薄露夜於城傍剽掠而去，思業將騎追之，反為所敗。揚名引西突厥斛瑟羅之衆攻其城，旬餘，不克。九月，薄露詐降，思業誘而斬之，遂俘其衆。

〈TCTC・卷207・久視元年之条，p.6550〉

とある。とくに冊府元龜の方が、かつての西突厥十姓の一部を統べるチュルク人の首領の一人であることの明らかな阿悉吉薄露⁽¹¹²⁾を「吐蕃」とみているのは注目に値する⁽¹¹³⁾。この阿悉吉薄露の反乱の裏に阿史那倭子がいたと考えるのも、あながち無理ではない。

当時、天山北路一帯のチュルク族間で最も勢力があったのは突騎施であるが、これは692年以来唐と友好関係を保っていた。それ故、吐蕃側に立つトン=ヤブグ可汗の行ったチュルク国はここではありえない。しかるに突騎施の東方、モンゴリアの地には、かつて唐に滅ぼされた東突厥(突厥第一可汗国)が復興し、いまや突騎施を凌ぐ勢いで(突厥第二可汗国)、唐に対しても優位に立ち、以前の第一可汗国時代の領土と人民を急速に回復しつつあった。もちろんその中には、主にオルドス～山西以北に居住していたいわゆる突厥降戸⁽¹¹⁴⁾や、かつての突厥内部にいたソグド人を中心とする六州胡⁽¹¹⁵⁾も含まれている。また河西には九姓鉄勒の降戸もいた⁽¹¹⁶⁾。かつ河西は交通の要地として経済的に重要な地点であり、さらに馬の産地としても有名であった。それゆえ突厥がこの地方に触手を伸ばさないはずはなかろう。通鑑には、

〔久視元年〕(700年)十二月甲寅，突厥掠隴右諸監馬萬餘匹而去。

〈TCTC・卷207，p.6553〉

〔長安元年〕(701年)〔十一月〕以主客郎中郭元振為涼州都督・隴右諸軍大使。

先是，涼州南北境不過四百餘里，突厥・吐蕃頻歲奄至城下，百姓苦之。元振始於南境硤口置和戎城，北境磧中置白亭軍。

〈TCTC・卷 207, pp. 6557-6558〉

とある。後者の記事（CTS・卷 97・郭元振伝，p. 3044 及びTFYK・卷 429・将帥部・拓土，p. 5117 上にも同内容の記載あり）によれば，突厥と吐蕃が南北から河西を挾撃する形で涼州に侵入してきていることが窺える。これは単に偶然の一致であったのだろうか。そうとも考えられる。しかし張説（後の睿宗・玄宗時代の宰相）作の「兵部尚書代国公贈少保郭公（郭震，郭元振）行状」には，

（701年）⁽¹¹⁷⁾吐蕃與突厥連和，大入河西^{原作西河}，破數十城，困逼涼州，節度出城戰歿，蹂禾稼，米斗萬錢。則天方御洛城門酺宴，涼州使至，因輟樂。拜公為涼州都督，兼隴右諸軍大使，調秦中五萬人，號二十萬，以赴河西。

〈文苑英華・卷 972・行状〉

とあり，吐蕃と突厥とが河西入寇にあたって事前に連絡を取り合っていたことが窺える。ここに第二の推測が成り立つ。すなわち，吐蕃王チ=ドゥーソンは，唐の西域経営の橋頭堡たる河西を北方の突厥と協力して陥し入れ，西域を唐の手から切り離すべく，突厥可汗と同じ血を引く阿史那倭子（トン=ヤブグ可汗）を同盟の密使として送り込んだのではなかったか⁽¹¹⁸⁾。

トン=ヤブグ可汗の使いしたチュルク国がいずれであったか，今となっては知る由もない⁽¹¹⁹⁾。しかし，いずれにせよ，チ=ドゥーソン王はガル一族の敷いた対外路線をある程度は受け継ごうとしていたのではなかろうか。ただ，その後もない704年の王自身の死によって，吐蕃の中央アジア政策は振り出しにもどったようである。

第四章

チデ=ツクツェン Khri lde gtsug brtsan 時代（704—754 年在位）

ツェンポの交代及び金城公主入蔵の背後事情については佐藤氏に詳しい考証がある⁽¹²⁰⁾。金城公主が実際にチベットに入ったのは710年のことであるが，704年以降この頃まで吐蕃には種々の内憂外患が山積していたらしい。公主降嫁にみられるように，唐と吐蕃が，前代に比してはるかに友好的な関係を保持し得た裏には，このような吐蕃側の内部事情が働いていたのである。郭元振は流石にこのことを看破していた。それ故彼は，708年，宰相・宗楚客および右威衛將軍・周以悌らが突騎施内部の娑葛（可汗，706年に死んだ父の烏質勒をついで即位）と闕啜（阿史那忠節，烏質勒の有力な部下だった）との不和を利用し，吐蕃を味方に引き入れて突騎施を攻撃しようとした時，直ちに上疏してその非なることを説い

た⁽¹²¹⁾。旧唐書・郭元振伝にはその時の彼の言葉を伝えて⁽¹²²⁾、

往者吐蕃所争，唯論十姓・四鎮，國家不能捨與，所以不得通和。今吐蕃不相侵擾者，不是顧國家和信不來，直是其國中諸豪及泥婆羅門等屬國自有攜貳。故贊普躬往南征，身殞寇庭。國中大亂，嫡庶競立，將相爭權，自相屠滅。兼以人畜疲癘，財力困窮。人事天時，俱未稱愜。所以屈志且共漢和，非是本心能忘情於十姓・四鎮也。如國力殷足之後，則必爭小事，方便絕和。縱其醜徒，來相吞擾，此必然之計也。今忠節乃不論國家大計，直欲為吐蕃作鄉導主人，四鎮危機恐從此啓。頃緣默啜憑陵，所應處兼四鎮兵士，歲久貧羸，其勢未能得為忠節經略，非是憐突騎施也。忠節不體國家中外之意，而別求吐蕃，吐蕃得志，忠節則在其掌握，若為復得事漢？往年吐蕃於國非有恩有力，猶欲爭十姓・四鎮。今若効力樹恩之後，或請分于闐・疏勒，不知欲以何理抑之。又其國中諸蛮及婆羅門等國見今攜背，忽請漢兵助其除討，亦不知欲以何詞拒之。是以古之賢人，皆不願夷狄妄惠，非是不欲其力，懼後求請無厭，益生中國之事。故臣愚以為用吐蕃之力，實為非便。

〈CTS・卷 97, pp. 3045—3046〉

とある。しかし結局この建議は容れられず、同年中に突騎施討伐軍は派遣された。チデ=ツクツェン時代に入ってこの方、表面上は唐と通和していた吐蕃も、初めの予定通り唐側に立って参戦した。かつてチュルク(西突厥遺衆)と連携して唐の西域経営を脅かし、次いで唐とチュルク(突騎施)の連合によって西域から追い出された吐蕃が、今度は唐と結んでチュルク(突騎施)を討つことになったわけである。だがこの戦いは唐・吐蕃側の大敗であった。通鑑は、先の郭元振の上疏を宰相・宗楚客が受け入れなかったことをいい、次のように続ける⁽¹²³⁾。

〔景龍二年〕(708年)楚客等不從，建議「遣馮嘉賓持節安撫忠節，侍御史呂守素處置四鎮，以將軍牛師獎為安西副都護，發甘・涼以西兵，兼徵吐蕃，以討娑葛。」沙葛遣使娑臘獻馬在京師，聞其謀，馳還報娑葛。於是娑葛發五千騎出安西，五千騎出撥換，五千騎出焉耆，五千騎出疏勒，入寇。元振在疏勒，柵於河口，不敢出。忠節逆嘉賓於計舒河口。娑葛遣兵襲之，生擒忠節，殺嘉賓。擒呂守素於僻城，縛於馭柱，呂而殺之。

〈TCTC・卷 209, pp. 6627—6628〉

〔景龍二年〕(708年)〔十一月〕癸未，牛師獎與突騎施娑葛戰于火燒城。師獎兵敗沒。娑葛遂陷安西安西都護府時在龜茲，斷四鎮路。

〈TCTC・卷 209, p. 6629〉

この事件は郭元振の奔走により、翌709年娑葛が「遣使請降」〈TCTC・卷 209, p. 6636〉という形をとったことによって漸く落着した。そしてこの時、娑葛は十四

姓(十姓)可汗⁽¹²⁴⁾に冊立された。

唐と突騎施の関係が好転するや、唐と吐蕃はまたも干戈を交えている。通鑑・景雲元年之条の末尾には、

〔景雲元年〕(710年) 安西都護張玄表侵掠吐蕃北境。吐蕃雖怨，而未絶和親。
 〈TCTC・卷210, p.6661〉

とあり、旧唐書・吐蕃伝には、

睿宗即位(710年)、(中略)。時、張玄表為安西都護，又與吐蕃比境，互相攻掠。吐蕃内雖怨怒，外敦和好。

〈CTS・卷196上, p.5228〉

とある。佐藤氏はこの交戦時期を707年頃とみているが⁽¹²⁵⁾、私は史料をそのまま信じて709—710年頃のこととみてよいのではないかと思う。ところで安西都護府の管轄区域と吐蕃の領土が境を接している地方とはどこのことか。当然考えられるのは、今世紀はじめスタイン探検隊などによって多くのチベット語文書が発掘将来されたコートン～ロプ地方、即ち西域南道地域である。しかし八世紀初頭この地方は吐蕃よりもむしろ唐の支配下にあったと思われる。先に引用した郭元振の上表文の中には、「今もし吐蕃の援助を受けて突騎施を討ったら、吐蕃はその功を恃んで于闐・疏勒の割譲を求めらるであろう。」という内容の言葉があった。これはコートンやカシュガルが吐蕃の支配下になかったことを物語る。一方ロプ地方に関しては同じく郭元振伝に、闕啜(阿史那忠節)が播仙城で経略使の周以悌に会ったという記事がある。この播仙城が且末城即ちチェルチェンであることは既に学界の定説である⁽¹²⁶⁾。ここに唐の経略使⁽¹²⁷⁾が駐屯していたのであるから、ロプ地方も唐の勢力下に入っていたと見てよかろう。西域南道が問題の接壤地帯でなかったとすると、次に考えられるのは西ではパミール地方、東では吐谷渾の旧領(とくにアルティン=ターク～ツァイダム西辺)である。パミール地方では少くとも勃律あたりまで吐蕃の勢力が及んでいたことは確実だが(cf.本論第二章)、東のアルティン=ターク地方についても同様のことが言えそうである。敦煌出土の唐光啓元年書写沙州・伊州地志残卷(S.367)には⁽¹²⁸⁾、
薩毗城，西北去石城鎮四百八十里。康艷典所築。其城近薩毗沢，山險阻。恒有吐蕃及土谷渾来往不絶。

とあり、晋天福十年写本寿昌県地鏡にも⁽¹²⁹⁾、

薩毗城，在鎮城(石城鎮をさす)東南四百八十里。其城康艷典置築。近薩毗城沢，險。恒有土蕃土谷賊往来。

とある。薩毗城には常に吐蕃人や吐谷渾人がやってくるが、そこは石城鎮(チャルクリク、若羌)の東南480里(約210km)で、周囲には沼沢や険しい山々がある

要害の地であるという。また、この城を築いた康艷典とは、貞観中にロブ地方にソグド商人の植民地を作ったサマルカンド出身の大首領であることが分っているから⁽¹³⁰⁾、薩毗城も商業に有利な交通の要地であらねばならない。これらの条件を全て満たす所といえ、それは現在の茫崖鎮⁽¹³¹⁾ないしはその周辺において他にはない⁽¹³²⁾。ところで、沙州・伊州志、寿昌県地鏡はいずれも後代のものであるが、その原本は沙州図経であり、それは高宗治世末年～則天武后治世前半(676—695年)にまで溯ることが、最近池田氏によって明らかにされた⁽¹³³⁾。そして現存する沙州図経の残巻中には、石城鎮の「位置・沿革」をいう部分に上とほぼ同内容の薩毗城に関する記事があり、さらに石城鎮の「現状」を述べるくだりに、

道、南去山八十里，已南山險，即是吐谷渾及吐蕃境。

とある⁽¹³⁴⁾。この「現状」がいつの時点をさすのかが問題であるが、本残巻には則天武后時代や玄宗の開元時代の加筆・訂正がみられるものの⁽¹³⁵⁾、やはり大部分は原本をうけついでいるのであるから、7世紀末～8世紀初葉とみて大過ないであろう。吐蕃(及びこれに併呑された吐谷渾)と唐との境界をなしていた石城鎮のすぐ南の険しい山とは、いうまでもなくアルティン=ターク(アル金山)の連山をさす。

以上みてきたところを総合すれば、チデ=ツクツェン即位後まもない頃の吐蕃の北方領域は、西はパミールで、そして東はアルティン=ターク連峰を以って唐にさえぎられ、その向こうのタリム盆地までは一步も足を踏み入れていなかった、ということになろう。このことは、逆にみれば、当時の唐のタリム盆地に重心を置く西域経営が相当順調にいったことを示す。

然るにこの頃、突厥第二可汗国(本拠はモンゴリア)が中央アジア(とくに天山以北)において活発な動きを見せ始めた。710年にはまずキルギスの叛乱を鎮定、次いで突騎施の内訌に乗じて進撃、娑葛の軍を打倒すると、突厥軍はそのまま西進してシル河を越え、ソグディアナにまで至り、この地を攻略して凱旋した⁽¹³⁶⁾。さらに713年には北庭を攻囲し、唐軍に打撃を与えたが、ある事情が発生して一旦兵を引いた。そして翌714年、再び北庭に攻撃をしかけたが、今度は北庭都護・郭虔瓘や伊吾軍使・郭知運らの働きによって退けられた⁽¹³⁷⁾。

このように唐が暫くの間突厥の活動に目を奪われている間に、吐蕃は新たに大食と結ぶ動きを見せ、一旦は滅亡の危機に瀕した突騎施も新可汗・蘇祿のもとでほぼ完全に復興してしまっていた。通鑑は、

〔開元三年〕(715年)〔十一月〕，初，監察御史張孝嵩奉使廓州，還，陳磧西利害，請往察其形勢。上許之。聽以便宜從事。拔汗那者，古烏孫也，內附歲

久。吐蕃與大食共立阿了達⁽¹³⁸⁾為王，發兵攻之。拔汗那王兵敗，奔安西，求救。孝嵩謂都護呂休璟曰，不救則無以號令西域。遂帥旁側戎落兵萬餘人，出龜茲西數千里，下數百城，長驅而進。是月，攻阿了達于連城。孝嵩自擐甲督士卒急攻。自巳至酉，屠其三城。俘斬千餘級。阿了達與數騎逃入山谷。孝嵩傳檄諸國。威振西域。大食・康居・大宛・罽賓等八國，皆遣使請降。

〈TCTC・卷211, p.6713〉

として、拔汗那 (Ferghāna)⁽¹³⁹⁾をめぐって吐蕃と大食⁽¹⁴⁰⁾が手を結んだことを告げているが、このことは裏返せば、吐蕃の勢力がパミールを北上してフェルガーナにまで達し得たことの証拠でもある⁽¹⁴¹⁾。先にコータンは唐の支配下にあつて吐蕃の勢力は及んでいなかったことを述べたが、少なくともバルチスタン(大勃律)～ギルギット(小勃律)～ワッハーン(護密)地方では唐よりむしろ吐蕃の方が優勢であったと推測することが出来よう。冊府元龜には、

〔開元〕三年(715年)二月，郭虔瓘為北庭都護，累破吐蕃及突厥默啜。斬獲不可勝計。以其俘來獻。

〈TFYK・卷133・帝王部・褒功二, p.1607上〉

とあつて、安西都護・呂休璟だけでなく北庭都護の郭虔瓘も吐蕃と戦っていることを伝えている。ガル一家の滅亡以来久しく絶えていた吐蕃の積極的な西域進出が再開されたのは、恐らくこの頃のこととみて間違いないだろう。吐蕃の政策変更の直接の動機を明らかにし得ないのは残念であるが、このような吐蕃の動きは、復興成った突騎施の動きと一致するところとなった。717年、両者は大食をも引き入れて、共に安西四鎮奪取を目指す軍事行動に出たのである。

〔開元五年〕(717年)〔七月〕安西副大都護湯嘉惠奏，突騎施引大食・吐蕃，謀取四鎮，罽鉢換及大石城⁽¹⁴²⁾。已發三姓葛邏祿⁽¹⁴³⁾兵，與阿史那獻擊之。

〈TCTC・卷211, p.6728〉

攻撃目標がタリム盆地西北辺だったのであるから、この時の吐蕃軍もパミール地方から出撃したに違いない。先程私は715年に吐蕃の勢力がバルチスタン～ギルギット～ワッハーン地方に及んでいたと推測したが、これはこの717年にもあてはまる。さらに、716年に入唐した沙門・善無畏がパミール地方で吐蕃の領域を通過していること⁽¹⁴⁴⁾、及び新唐書・西域伝に、

〔護密〕地當四鎮入吐火羅道，故役屬吐蕃。開元八年，冊其王羅旅伊陀骨咄祿多毗勒莫賀達摩薩爾為王。

〈HTS・卷221下・護密之条, p.6255〉

とあるところをみると、この推測に誤りはなさそうである。恐らく720年(開元八年)頃までは吐蕃の勢力がパミール地方(とくに南パミール)にかなり食い込ん

でいたのであろう。ただし勢力範囲とは言っても、パミール地方に分立する数多くの小国はそれぞれ独立を保っていたのであり、吐蕃の直接統治を受けていたわけでないことは勿論である。最後に掲げた史料によれば、720年に護密^{ワッハーン} (Wakhan⁽¹⁴⁵⁾) 王が唐の冊立を受けているし、通鑑・卷212・開元八年夏四月之条 (p. 6740) や冊府元龜・卷964・外臣部・封冊二 (p. 11343) の記事からはやはり720年、勃律・護密以外に烏菴^{ウッディヤーナ} (Uddiyāna⁽¹⁴⁶⁾) ・骨咄^{コッタール} (Khottal⁽¹⁴⁷⁾) ・俱位^{マストゥジ} (Mastuj⁽¹⁴⁸⁾) ・箇失密^{カシミール} (Kashmir⁽¹⁴⁹⁾) 等の王が唐の冊立を受けていることが分る。一方、敦煌編年記には、

bya gagi lo la / / stod
鳥の年(721年)に 上部
phyogs gyi pho nya mang po phyag
地方の多くの使者たちが(ツェンポに)臣礼を
'tshald/
取り(に)来)た。

〈CDT, Pl. 587, ll. 168—169; DTH, p. 22 & p. 46; 『敦歴』 p. 30 & p. 113〉

とある。DTHはこの“stod phyogs (上部地方=西方の国々)”に「サラット=チャンドラ=ダスはこの上部地方をカイラーサ付近に比定する」——カイラーサというのはラサからパミール地方に至る途中にある有名な聖山——と注記しているが、私はむしろ山口氏に従って⁽¹⁵⁰⁾、さらに西方のパミール地方(中でも南パミール地方)そのものを指していると考え。というのは敦煌年代記のチソン=デツェンの条に、

rgyal po 'di'i ring la / 'bro khri gzu'
この王の御代に、'BroのKhri-gzu'
ram shags kyis/stod pyogs su drangste/
ram-shagsは 上部地方へ進軍し、
li 'bangs su bkug nas dpya' phab bo//
Li国を臣属せしめ、税(貢納)を義務づけた。

〈CDT, Pl. 571, ll. 391-392; DTH, p. 115 & p. 153; 『敦歴』 p. 73 & p. 144〉

とあり、同編年記・756年の条に、

ban 'jag nag po dang gog dang/shig nig
黒 Ban-'jag と Gog と Shig-nig
las stsogste/stod pyogs gyi pho nya pyag
などの 上部地方の使者が(ツェンポに)臣礼

'tsald/

を取り(に來)た。

〈CDT, Pl. 592, l. 20; DTH, p. 56 & p. 63; 『敦歴』 p. 38 & p. 119〉

とある。Li 国が于闐であることは定説であり、Shig-nig が識匿 (尸棄尼, Shighnan⁽¹⁵¹⁾) であることも疑いない⁽¹⁵²⁾。Ban-'jag は、全く論証なしではあるが Pandj と結び付ける山口氏の推定⁽¹⁵³⁾が当たっていよう。アム河上流のパンジャ川 (パンジ川) Ab-i-Panja はシグナン〜ワッハーン地方に沿って流れており、その流域にはバル=パンジャとかカライ=パンジャ⁽¹⁵⁴⁾の地名が存在している。一方 Gog は、後にみるように (cf. p. 42), パンジャ川上流 (ワッハーン=ダリア) 流域である可能性が高い。いずれにせよ、以上より、パミール地方の諸国が唐と吐蕃の二大勢力の接壤地帯として双方から軍事的圧力を受けながらも独立を保っていたことだけは明らかであろう。さらに視野を西トルキスタン全体に広げるならば、この地方が東の唐、南の吐蕃、西の大食、北の突騎施という四大勢力の係争地帯となっており、次いで政治的にはイスラーム勢力が、人口的にはチュルク民族が優勢になっていき、インド=ヨーロッパ系民族の小国家分立時代が終わるという、歴史上の一大転換点に立っていることが知られるのであるが、本稿ではそこまで触れる余裕はない。

チ=ドゥーソンの末年に吐蕃が突厥と手を握って河西に侵攻したらしいことについては前章で述べた。それは 700—701 年頃のことであった。その後両者の間でどの程度頻繁に直接的交渉が行われていたかは不明であるが、718 年をあまりさかのぼらない時期になってまた両者の間には使節の交換が行われたらしい。新唐書・吐蕃伝では 714 年の条と 722 年の条との中間に、吐蕃が唐に和議を求めたことを記しているが、その時のツェンポの言葉を伝えて、

又疑與突厥骨咄祿善者，舊與通聘。即日舅甥如初，不與交矣。

〈HTS・卷 216 上, p. 6082〉

といている。この部分をバシエル氏は⁽¹⁵⁵⁾,

“He is also suspicious of our friendship with the T'uchüeh Kuch'olu. Our intercourse is of long standing, and our houses were once allied, but now there is no communication.”

と訳し、ペリオ氏は⁽¹⁵⁶⁾,

“En outre, pour ce qui est des doutes au sujet de nos bons rapports avec le T'ou-kiue 骨咄祿 Kou-tou-lou (Qutluq), nous avons voilà longtemps conclu une union matrimoniale avec lui; mais du jour où nous serons [avec vous] oncle, neveu comme précédemment, nous n'aurons plus de

relations avec lui.”

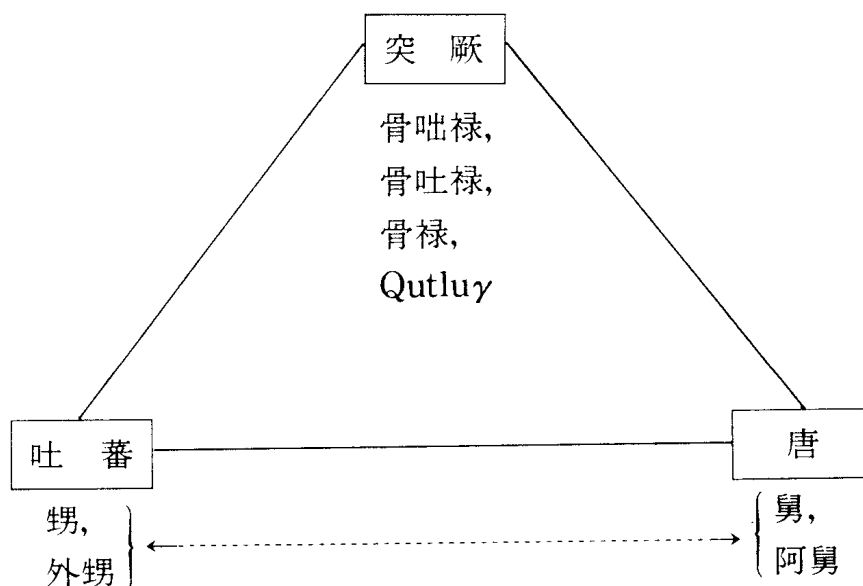
と訳し、佐藤氏は、次のように訳した⁽¹⁵⁷⁾。

「また突厥の骨咄祿と親しいのを疑っておられますが、〔吐蕃と唐とは〕旧く親善の使者を交換し、互いに舅・甥と呼びあっておりました。それでその関係が初めの通りになれば、〔突厥とは〕ともに交わらないであります。」この部分の解釈はこのままでは非常に困難で、バシエル訳はともかく、ペリオ訳と佐藤訳とのいずれが正しいのか判断に苦しむ。しかし幸いなことにこの時のツェンボから皇帝への書簡のほぼ全文が冊府元龜の中に残されている。そこには、

〔開元〕六年（718年）十一月、吐蕃遣使奉表曰、「（中略）。又以北突厥骨吐祿共吐蕃交通者，舊時使命實亦交通。中間舅甥和睦已來，准舊平章。其骨吐祿，阿舅亦莫與交通，外甥亦不與交。今聞，阿舅使人頻與骨祿交通，在此亦知為不和。中間有突厥使到外甥處，既為國王，不可久留外國使人，遂却送歸。即日兩國和好，依舊斷當，吐蕃不共突厥交通。如舅不和，自外諸使命何入蕃，任伊去來。阿舅所附信物，並悉領。外甥今奉金胡瓶一・瑪瑙盃一，伏惟受納。」

〈TFYK・卷981・外臣部・盟誓，pp.11526—11527〉

とある。問題になっている三者間の関係を図示すれば次の通りである。



新唐書吐蕃伝でははっきりしなかった日付が、ここでは開元六年(718年)十一月と明記されている。それゆえ文中の突厥・骨咄祿は、その字面だけから一般的に考えられるような第二可汗国の建国者 Iltäriš 可汗(在位 682—691年)自身を指すのではなく、ここでは第二代の默啜(Qapyan 可汗, 在位 691? → 716年)か第三代

の毗伽可汗(在位716?—734年)を指していると考えるべきであろう⁽¹⁵⁸⁾。ところが王忠氏は初代骨咄祿の在位年代とこの日付との不一致を解決するため、突厥・骨咄祿を突厥ではなく突騎施の可汗であろう、とした⁽¹⁵⁹⁾。「突厥」がチュルク族の総称として使われ、ために西突厥の後継者たる突騎施を指す場合も確かにある。しかし「北突厥」とあって突騎施を指した例は皆無と言ってよかろう。それに、吐蕃と突騎施とが深い関係にあったことは、前年の安西四鎮攻撃によって唐側へも十分知られていたはずであって、上掲史料に見るように唐と吐蕃の双方が「突騎施」との結びつきを云々しているとしたら、これは奇妙なことである。それゆえやはり、ここに見える突厥・骨咄祿とは突厥の默啜または毗伽可汗のこととみてよく、王忠氏のように突騎施の可汗とみなす必然性はない。

冊府元龜の記載に依れば、吐蕃と突厥はもともと使者を交換していたという。それゆえ吐蕃伝の「舊與通聘」の主語は吐蕃と突厥であり、この部分に関しては佐藤訥よりもペリオ訥の方があたっている。冊府元龜の「舅甥和睦」とは、718年に最も近い時点に於ける唐と吐蕃の和睦のことであろうから、これは706年の盟約⁽¹⁶⁰⁾から710年の金城公主降嫁及びこれらに前後する両者間の友好状態を言ったものとみてよい。とすると、これ以前(史料中の「舊」・「舊時」)に吐蕃と突厥は「與通聘」或いは「使命実亦交通」する間柄であったわけで、このことは、先に700—701年頃吐蕃と突厥が手を結んでいたと推測したこととうまく対応する。そしてもう一度書簡の文意にたち戻れば、718年の少し前にも吐蕃と突厥との間に使節の交換があったことが、隠れなき事実として浮び上がってこよう⁽¹⁶¹⁾。前述したように、吐蕃は717年には突騎施および大食と結んで安西四鎮を攻撃したが、突厥との間にはこのような軍事同盟が結ばれた形跡はない。しかし両者は共に唐と拮抗して勢力を拡大しようとしていたのであるから、対唐牽制の意味あいを含めて接近することは十分にあり得る。それゆえ我々は、717年の吐蕃と突騎施・大食とが連合した四鎮攻撃と相前後して、吐蕃は突厥ともまた交渉を持った、と推測してよかろう⁽¹⁶²⁾。因みに敦煌編年記には、

spre'u lo la / btsan po dungs gyi stag
 猿の年(720年)に、王はDungsのStag-
 tsal na bzhugs shing / 'bug cor gyi pho
 tsalにお住まいになり、'Bug-corの使
 nya phyag 'tsald/

者が(ツェンポに)敬意を表し(に来)た。

〈CDT, Pl. 587, l. 164; DTH, p. 22 & p. 45; 『敦歴』 p. 29 & p. 113〉

という記載がある。'Bug-corという名前は敦煌編年記・年代記を通じてここだ

けにしか現われないが、同じく敦煌藏経洞出土の P. t. 1283 文書に現われていることは周知の通りである。私は P. t. 1283 文書の内容を検討して、この 'Bug-cor ('Bug-chor) を狭義の突厥 (第二可汗国) に比定したが⁽¹⁶³⁾、それが 720 年という時点で吐蕃と接触したことが、吐蕃側の証言として残されていることは注目に値しよう。この 720 年の突厥から吐蕃への使者派遣は、同年の突厥の北庭・河西攻撃⁽¹⁶⁴⁾と何らかの関連を持つものと思われる。

以上みてきたように、吐蕃は 715 年以降再び西域進出の機会をうかがっていたのであるが、722 年には遂に小勃律国 (ギルギット) に本格的な攻撃を加えるに至った。

〔開元十年〕(722 年)〔九月〕癸未、吐蕃困小勃律王没謹忙。謹忙求救于北庭節度使張嵩曰、「勃律，唐之西門。勃律亡，則西域皆為吐蕃矣。」嵩乃遣疏勒副使張思禮，將蕃漢步騎四千救之。昼夜倍道，與謹忙合擊吐蕃，大破之，斬獲數萬。自是累歲，吐蕃不敢犯邊。

〈TCTC・卷 212, p. 6752〉

ギルギット地方は吐蕃がパミール地方から西域に進出するためにはどうしても通らなければならない関門である。それゆえ 722 年以前にも吐蕃は幾度となくこの地方を通過しており、この地の土着政府もそれを黙認していた筈である。それが今ごろになって戦いを交えたとは、如何なる理由によるのだろうか。この点について明らかにしてくれるのが、慧超往五天竺国伝にある次のような記事 (726—727 年頃の情報) である。(第二章で引用した同伝の大勃律国之条も参照せよ。)

又迦葉彌羅国西北，隔山七日程，至小勃律国。此属漢国所管。衣著人風，飲食言音，與大勃律相似。(中略)。其大勃律，元是小勃律王所住之處。為吐蕃来逼，走入小勃律国坐。首領百姓，在彼大勃律不来。

〈慧超往五天竺国伝・小勃律国之条〉⁽¹⁶⁵⁾

吐蕃に服属しつつける故国 (大) 勃律の「首領百姓」たちと袂をわかち、今やギルギットに親唐的な小勃律国を建てるに至った王とは、おそらく没謹忙その人を指すのであろう⁽¹⁶⁶⁾。かつて彼は唐に入朝したことがあり、その時玄宗に子として扱われた経験がある⁽¹⁶⁷⁾。それ故にこそ彼は吐蕃に反逆して、独立を試みたと考えられる。そしてこの独立、すなわち大・小勃律への分裂は、伊瀬氏によれば 720—722 年のことである⁽¹⁶⁸⁾。もし親唐的な小勃律国がこのまま定着してしまえば、吐蕃は以前のようにこの地を通過して西域へ出る道を塞がれてしまうことになる。これは吐蕃にとっては絶対に看過できないことであった。722 年の小勃律攻撃はこうして行われたのである。しかし吐蕃は、小勃律国を舞台にした唐との決戦に敗れ、またも西域進出の道を断たれたわけである。先に引用し

た通鑑に「自是累歲，吐蕃不敢犯邊」とあり，冊府元龜に
自嵩此征之後，〔吐蕃〕不敢西向。

〈TFYK・卷358・將帥部・立功十一，p.4245上〉

と伝えている通り，これ以後数年の間はパミール地方において吐蕃は逼塞を余儀なくされた。

だが吐蕃は小勃律争奪戦の敗北によって西域進出を断念したわけではない。727年にまたも突騎施と連合して安西に迫ったことは史乘に明らかであるが(後出)，これ以前にも吐蕃が西域に政治的工作を仕掛けていたと思われるふしがある。旧唐書・杜暹伝によれば，西域の半独立国・于闐が唐に謀叛を企てたことを伝えて，

明年(開元十三年=725年)于闐王尉遲眺陰結突厥及諸蕃国，凶為叛乱。暹密知其謀，發兵捕而斬之，并誅其党與五十餘人。更立君長。于闐遂安。

〈CTS・卷98・杜暹伝，p.3076〉

と記している。伊瀬氏は，この于闐の叛乱企図の裏には必ずや吐蕃の使嗾があったに違いないと述べているが⁽¹⁶⁹⁾，これは決してありえないことではない。尚，前嶋氏はここにみえる突厥を突騎施と関係づけているが⁽¹⁷⁰⁾，私もこの見方に賛成である。因みに，引用した記事の直前では，突騎施をいうのに「突厥施」という書き方をしている。

次いで726—727年になると，吐蕃は以前とは鋒先を変えて河西に侵攻するようになった⁽¹⁷¹⁾。そして従来からの同盟国であった突騎施だけでなく，新たに突厥やウイグルの一部とも結んで唐に対抗しようとした。

〔開元十五年〕(727年)閏月(閏九月)庚子，吐蕃贊普與突騎施蘇祿困安西城，安西副大都護趙頤貞擊破之⁽¹⁷²⁾。回紇承宗族子瀚海司馬護輸，糾合党衆，為承宗報仇。會吐蕃遣使間道詣突厥，王君奭帥精騎邀之於肅州。還，至甘州南鞏筆駞。護輸伏兵突起，奪君奭旌節。先殺其判官宋貞，剖其心曰，「始謀者汝也。」君奭帥左右数十人力戰，自朝至晡，左右盡死。護輸殺君奭，載其尸奔吐蕃。涼州兵追及之，護輸棄尸而走。

〈TCTC・卷213，pp.6779—6780〉

当時ウイグルの一部は漠北を追われて南走し，河西に拠っていたが，河西節度使・王君奭の圧政に苦しんでいた⁽¹⁷³⁾。この点で吐蕃とウイグルの利害が一致し，ウイグルが王君奭殺害に先立って吐蕃と通じていたことは，ウイグルが君奭殺害後彼の死体を吐蕃に運びこもうとした事実からも十分に推測される⁽¹⁷⁴⁾。一方，突騎施は，726年に蘇祿の妻である交河(金河)公主が磧西節度使・杜暹のもとに遣った使者が笞打たれたことから唐に恨みを抱いていた⁽¹⁷⁵⁾。そして蘇祿

は翌727年、ひそかに吐蕃と連絡をとって安西城を包囲したのである。

蘇祿怒，陰結吐蕃，拳兵掠四鎮，圍安西城。

〈HTS・巻215下・西突厥伝，p.6067〉

もちろんこの時の安西攻撃は、佐藤氏の言うように⁽¹⁷⁶⁾、突騎施のイニシャティブで行われたのであろうが、吐蕃がこの誘いに喜んで応じたことは当時の状況から判断して間違いない。従来、吐蕃が突騎施と連合して安西(亀茲，クチャ)方面を攻める時は、パミール方面から出撃していたのであるが、今回はパミール地方でもロプ地方でもなく、河西を攻撃していた吐蕃軍がそこから直接西に向かってタリム盆地に入り、タクラマカンを越え、安西方面に至った。

未幾，悉諾邏恭祿⁽¹⁷⁷⁾・燭龍莽布支入陷瓜州，毀其城，執刺史田元猷及君龔父。遂攻玉門軍，圍常樂。不能拔。回寇安西，副都護趙頤貞擊却之⁽¹⁷⁸⁾。

〈HTS・巻216上・吐蕃伝，p.6083〉

このことはとりもなおさず、吐蕃が突騎施の誘いに応じて俄かに方向転換したことを推測させるし、また唐の西域支配なるものが面の支配ではなく、畢竟点と線の支配にすぎなかったことをも思わしめるのである。吐蕃が間道を通して突厥に使者を派遣することが出来たのも、裏を返せばこのような河西の状況に由来しているのである。

しかしこの吐蕃の使者は到達したが、突厥と連携して南北から同時に唐を攻撃しようとの吐蕃の企ては、突厥側の拒否にあって成功しなかった。逆に突厥の毗伽可汗は、吐蕃からの密書をそのまま唐に献上し、唐の歡心を買ったのである。

〔開元十五年〕(727年)〔九月〕丙戌，突厥毗伽可汗遣其大臣梅録啜^{よみす}入貢。吐蕃之寇瓜州也，遣毗伽書，欲與之俱入寇。毗伽并獻其書。上嘉之。聽於西受降城為互市。

〈TCTC・巻213，p.6779〉

時吐蕃與小殺(=毗伽可汗)書，將計議同時入寇。小殺并獻其書。上嘉其誠。

〈CTS・巻194上・突厥伝，p.5177〉

吐蕃の突騎施・ウィグル・突厥と結んで唐に対抗しようとの企図は、最初はかなりの成功をみせたが、突厥を味方につけることが出来なかったことによって、結局失敗せざるを得なかったのである。河西をめぐる唐と吐蕃との確執はこれ以後も続けられたが、戦況は吐蕃に不利で、730年に至り遂に吐蕃の方から唐に和を求めることとなった⁽¹⁷⁹⁾。そして少くとも735年まで、唐と吐蕃との関係は平静を保ち続けた。

しかるに一方、727年に連合した突騎施との関係は、それ以後どうなったので

あろうか。敦煌編年記には次のようにある。

㉔sbrul gyi lo la / / dmag

蛇の年(729年)に 軍隊を

dru gu yul du drangs pha slar 'khord

Dru-gu 国に進撃させたのを かえして

par lo gchig /

この一年〔はすぎた〕。

〈CDT, Pl. 589, ll. 201-204; DTH, p. 24 & p. 48; 『敦歴』 p. 32 & p. 115〉

㉕spre'u lo la / dbyard btsan po ba chos

猿の年(732年)に, 夏, 王は Ba-chos

gyi ding ding tang na bzhugs/shing/ btsan

の Ding-ding-tang に お住まいになり, 王

yul du rgya'i pho nya li kheng dang / ta

国に 中国の 使者・李卿 (=李行緯⁽¹⁸⁰⁾) と 大

chig dang dur gyis gyi pho nya phyag

食 及び 突騎施 の 使者が (ツェンポに) 敬意

'tsald /

を表し(に来)た。

〈CDT, Pl. 589, ll. 211-212; DTH, p. 24 & p. 50; 『敦歴』 p. 33 & p. 115〉

㉖khyi'i lo la / / je ba 'dron

犬の年(734年)に, 王女の 'Dron-

ma lod dur gyis kha gan la bag mar btang /

-ma-lod を 突騎施の可汗のもとに 嫁に やった。

〈CDT, Pl. 589, ll. 217-218; DTH, p. 25 & p. 50; 『敦歴』 p. 33 & p. 116〉

㉗byi ba'i lo la / btsan po pho brang dron

ネズミの年(736年)に, 王は Dron の

gyi mang ste lung na bzhugs / cog ro mang

Mang-ste-lung 宮殿にお住まいになった。Cog-ro の

po rje khyi chung gyis / dru gu yul du drangs /

Mang-po-rje khyi-chung は Dru-gu 国に進軍した。

〈CDT, Pl. 590, ll. 223-224; DTH, p. 25 & p. 50; 『敦歴』 p. 34 & p. 116〉

史料㉔・㉕によれば、吐蕃は大食及び突騎施と使者を交換していることが知られる。地理的關係から見て、これらの使者はパミール地方を通過したに相違ない。ということは恐らくギルギット(小勃律)をも通過したのであろう。この地

で722年に吐蕃と唐が一大決戦をくりひろげ、吐蕃が敗れ去ったことは前述した所であるが、勝利した唐軍もまもなく引き揚げたのであろう。唐の守備隊が常時駐留した軍鎮で最西端にあったのは、タシュクルガンに置かれた葱嶺守捉であり⁽¹⁸¹⁾、唐もギルギットにまで軍隊を常駐させる余裕はなかったといえる。唐軍がいなければ小勃律国の軍事力などは吐蕃にとってはものの数ではない。といっても、もし小勃律国自体に攻撃をかければ、またも唐軍が出動してくることは必定である。ここにおいて吐蕃と小勃律との関係は、722年以前のそれと同じ様な状態に落ち着いたのであろう。即ち、吐蕃は小勃律の独立を認めながらも、これに道を假りて突騎施や大食と往来するという状態である⁽¹⁸²⁾。また、こう解釈して初めて、史料④・⑤も理解しやすくなる。もし吐蕃が東方のロブ地方や河西から Dru-gu yul(チュルク国)に軍隊を進めたのであれば、間道を通っての使者派遣とは異り、必ずや唐側に発見されたであろう。しかるに漢文史料からはそのような形跡は全く窺えず、やはりこの兩年の Dru-gu yul への進軍は西のパミール地方を経由して行われたものと考えられるからである。

さて史料⑥によれば、吐蕃が突騎施に公主を送ったことが知られるが、このことは中国側の史料にも伝えられている。

〔蘇祿〕潜又遣使，南通吐蕃，東附突厥。突厥及吐蕃亦嫁女與蘇祿。既以三国女為可敦。又分立数子為葉護。

〈CTS・卷194下・西突厥伝，p.5192〉

また突騎施と突厥との通婚関係も突厥碑文によって証明されている⁽¹⁸³⁾。蘇祿が吐蕃・突厥そして唐の三国より公主を娶っていたことは、東西交通の要地に位置した突騎施の和戦両様の政策を端的に物語って極めて興味深いものであるが、結局は領土を接することの少なかった吐蕃と最も友好的であった。吐蕃と突騎施との間の交戦を伝える史料は現在までのところ絶無である。突騎施は吐蕃と通婚関係を結んだ翌735年には単独で北庭・安西に入寇した。

〔開元二十三年〕(735年)冬十月，戊申，突騎施寇北庭及安西撥換城。

〈TCTC・卷214，p.6812〉

一方吐蕃もその翌年には Dru-gu yul に進軍し(史料⑥)，さらにその翌年(737年)には懸案の小勃律攻撃を断行した。

glang gi lo la / btsan poe pho brang dron

牛の年(737年)に，王は Dron の

gyi mang ste lung na bzhugs / blon skyes

Mang-ste-lung 宮殿にお住まいになった。ロンの Skyes-

bzang ldong tsab gyis / bru zha yul du drangs /

bzang ldong-tsab は ブルシャ(=小勃律)国に 進軍した。

dgun pho brang brag mar na bzhugste/
 冬, Brag-mar 宮 殿 に お住まいになり,
 bru zha'i rgyal po phab ste phyag 'tshald/

ブルシャの王は打ち破られて、(ツェンポに)臣礼を取り(に来)た。

〈CDT, Pl. 590, ll. 225-226; DTH, p. 25 & p. 50; 『敦歴』 p. 34 & 116〉

736年の吐蕃軍の出動が、両唐書・玄宗本紀や通鑑の伝える

〔開元二十四年〕(736年)〔春正月〕北庭都護蓋嘉運擊突騎施，大破之。

〈TCTC・卷214, p. 6813〉

という事件と関係を持つもの(即ちこの時も突騎施と吐蕃が結託している)であろうことは、佐藤氏が別の根拠を挙げて言うように⁽¹⁸⁴⁾、疑いないところである。ただ氏は、敦煌編年記が吐蕃の小勃律攻撃を737年としているにもかかわらず、旧唐書・吐蕃伝の記載に従ってこれを736年のこととしている⁽¹⁸⁵⁾。しかし実は吐蕃伝には

其年，吐蕃西擊勃律，遣使来告急。上使報吐蕃，令其罷兵。吐蕃不受詔，遂攻破勃律国。上甚怒之。

〈CTS・卷196上・吐蕃伝, p. 5233〉

とあるだけで、年号が明記されているわけではない。開元二十四年(736年)の条の次にこの条があり、次に現われる年号は開元二十六年となっている。だから「其年」を開元二十四年とするのは吐蕃伝だけを見る限りでは正当であるが、一方旧唐書・西戎伝・罽賓之条には、

又有勃律国，在罽賓・吐蕃之間，開元中頻遣使朝獻。八年，冊立其王蘇麟陀逸之為勃律国王，朝貢不絶。二十二年，為吐蕃所破。

〈CTS・卷198, p. 5310〉

と七て吐蕃の勃律攻撃を開元二十二年(734年)のこととし、さらに通鑑では、時吐蕃西擊勃律，勃律来告急。上命吐蕃罷兵。吐蕃不奉詔，遂破勃律。上甚怒。

〈TCTC・卷214, p. 6827〉

としてこれを開元二十五年(737年)二月之条に入れている。このように唐側の史料には混乱があるのだから⁽¹⁸⁶⁾、とくに吐蕃伝の「其年」という最も不確かな紀年を採用する必要はあるまい。私は敦煌編年記に信を置いて、これを737年のこととみる⁽¹⁸⁷⁾。

吐蕃が突如として小勃律を攻撃する挙に出た裏には、それなりの読みがあったに違いない。722年の苦い経験からして、もし吐蕃が当時の唐の西域駐留軍に小勃律にまで遠征して吐蕃と戦う余裕があると判断していたなら、決して小勃

律攻撃を断行しはしなかったであろう。しかし当時の西域情勢は、735年冬の突騎施の北庭・安西攻撃以来非常に流動的で、唐は西域軍の主力を遠くパミール地方まで派遣することは不可能であった。通鑑には、

〔開元二十四年〕(736年)〔春正月〕、北庭都護蓋嘉運擊突騎施，大破之。

〔秋八月〕甲寅，突騎施遣其大臣胡祿達干來請降。許之。

〈TCTC・卷214, pp. 6813, 6821〉

とあり、あたかも突騎施が蓋嘉運に撃破されて入朝請和したような印象を与えるが、突騎施が唐との和を願った真意は実は別のところにあったのである。前嶋氏の研究によれば、当時の突騎施は、ソグディアナ～ホラサン方面で宿敵・大食との一大決戦を前にしていた時期にあたる⁽¹⁸⁸⁾。蓋嘉運が突騎施軍を破ったといってもそれは一部であり、その主力はまだほとんど無傷のまま温存されていたのであろう。それ故唐も突騎施の動きから目を離すことは出来なかった。吐蕃は736年におけるDru-gu yulへの出兵の際にこのような情勢を見て取り、翌737年、唐の干渉はないものとみて小勃律攻撃に踏み切ったのであろう。そしてそれは見事に成功した。次いでその三年後、敦煌編年記に、

'brugi lo la / btsan poe po brang / dbyard

龍の年(740年)に、王の宮居(として) 夏には

mtshar bu sna'i ngang mo gling na bzhugste /

Mtshar-bu-sna の雁の島にお住まいになり、

je ba khri ma lod / bru zha rje la bag mar

王女のKhri-ma-lodをブルシャ王のもとに嫁に

btang /

やった。

〈CDT, Pl. 590, ll. 232-233; DTH, pp. 25-26 & p. 51; 『敦歴』 p. 34 & pp. 116-117〉

とあるように吐蕃は小勃律^{ブルシャ}国王のもとに公主を送り込み、両者の結びつきを一層強化した。新唐書・西域伝・勃律之条には、722年小勃律が唐の援軍を受けて吐蕃を撃退したとする記事に続けて、

詔冊為小勃律王。遣大首領察卓那斯摩没勝入謝。没謹忙死。子難泥立。死，兄麻来兮立。死，蘇失利之立，為吐蕃陰誘，妻以女。故西北二十餘国皆臣吐蕃，貢獻不入。安西都護^{みたび}三討之，無功。

〈HTS・卷221下, p. 6251〉

とある。冊府元龜・卷964・外臣部・封冊二(p. 11347)には開元二十九年(741年)に麻號来(=麻来兮)を小勃律王に冊立した記事があるけれども、それはあくまで名目的なものであり、実質的には737年以後小勃律も含めた南パミール諸国

の多くは吐蕃の支配下に入っていたとみてよいであろう。だがこのような吐蕃の西部領域の拡大とは裏腹に、東部国境地帯では、同じく737年の河西節度使・崔希逸の背信的な吐蕃攻撃以来、吐蕃軍は苦戦を強いられ続けていた⁽¹⁸⁹⁾。それゆえ、パミール地方制覇によって吐蕃軍の大々的な西域進出が予想されるにもかかわらず、実際には吐蕃にそのような余裕は全くなかったのである。一方突騎施も、737年ソグディアナ～ホラサンをめぐって大食と雌雄を決すべく行われた大会戦に敗れ、以後の内訌と可汗・蘇祿の暗殺とによって自滅の様相を呈しつつあった⁽¹⁹⁰⁾。こうして唐は突騎施と吐蕃という南北よりする二大強国の脅威にさらされることなく、パミール以東の西域経営を全うすることが出来たのである。ただ唐京兆大興善寺不空伝や、不空訳「毘沙門儀軌」によれば⁽¹⁹¹⁾、天宝元載(742年)西蕃・大石(=大食)⁽¹⁹²⁾・康等五国が安西城あるいは西涼府を攻囲したと記されているが、この事件を伝えるこれらの記事全体は余りに仏教的虚飾に満ちており、つとにペリオ氏が指摘したように⁽¹⁹³⁾、これをそのまま信ずることは出来ない。

737年以降吐蕃が南パミール地方の二十余国を制圧していたことは前述の通りであるが、742年にはその支配にもいささか亀裂が生じたようである。通鑑及び冊府元龜にはそれぞれ、

(天宝元年)(742年)(九月)護密先附吐蕃。戊午、其王頡吉里匄、遣使請降。

〈TCTC・巻215, p.6856〉

天宝元年，九月，以護密国王子頡吉里匄遣使上表，請北吐蕃来属，賜鉄券。

〈TFYK・巻981・外臣部・盟誓, p.11527下〉

とあり、護密即ちワッハーンの来降を伝えている。しかしこれは極めて例外的あるいは一時的な現象であり(即ち護密は南パミール諸国の中では唐の葱嶺守捉に最も近かった)、小勃律をはじめとする南パミール諸国の多くが747年までは吐蕃の勢力下にあったことは、以下にみる通りである。

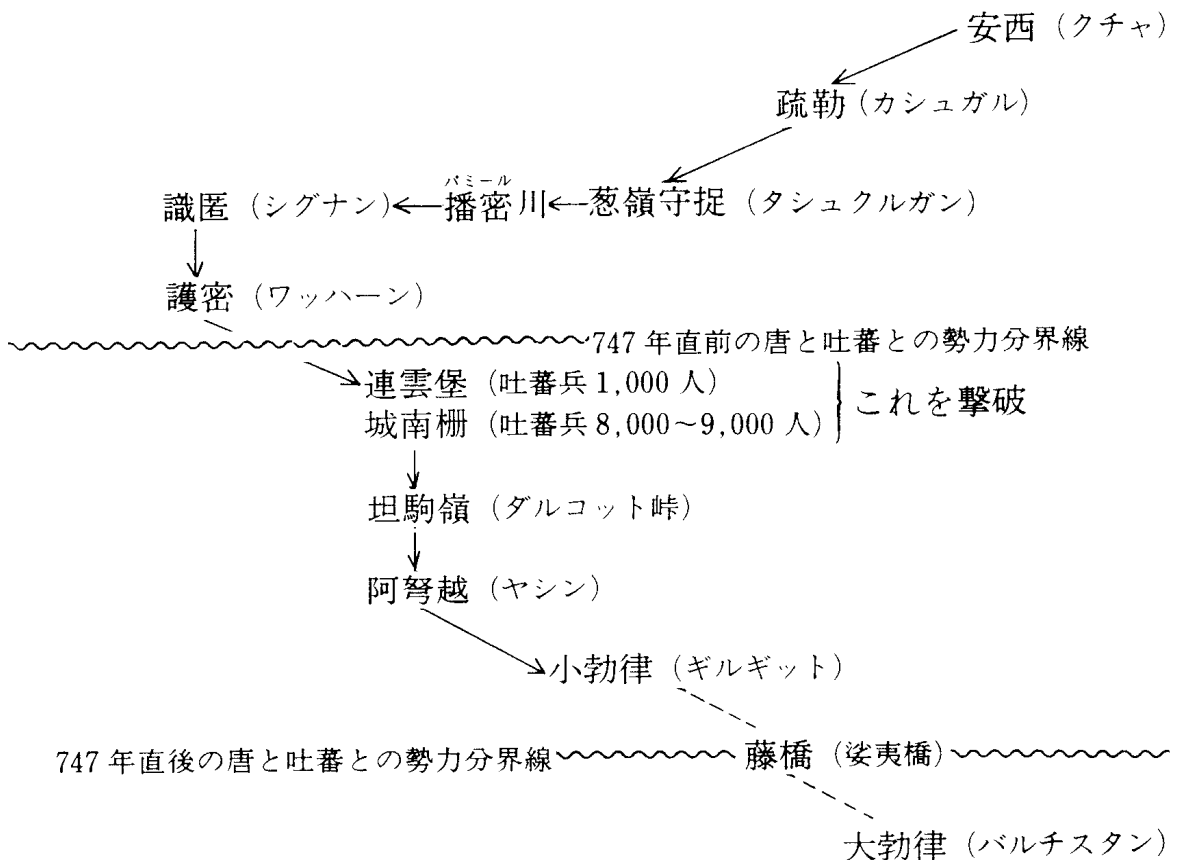
唐は吐蕃のパミール進出をただ手を拱いて見過ごしていたわけではない。737年から747年までの間に安西都護府に命じて三度ここを攻撃させている(cf.前掲の新唐書西域伝)。しかしこれらはいずれも失敗に終わった。そこで玄宗は747年特に勅を發し、当時安西副都護・四鎮都知兵馬使として活躍していた高仙芝をしてこの経略にあたらしめることにした。旧唐書・巻104・高仙芝伝(Chavannes, *Doc. Turcs*, pp.152-153に仏訳あり)、新唐書・巻135・同伝および通鑑・巻215はこの高仙芝の小勃律攻撃の様態を細かく描写しているが、新唐書・西域伝・勃律之条にはこれを要約して、

天宝六載(747年)、詔副都護高仙芝伐之。前遣將軍席元慶馳千騎，見蘇失利

之曰，「請假道趨大勃律。」城中大酋五六，皆吐蕃腹心。仙芝約元慶，「吾兵到，必走山。出詔書召慰，賜繒綵。縛酋領待我。」元慶如約。蘇失利之挾妻走，不得其處。仙芝至，斬為吐蕃者，斷娑夷橋。是暮，吐蕃至，不能救。仙芝約王降，遂平其國。於是拂菻・大食諸胡七十二國皆震恐，咸歸附。執小勃律王及妻歸京師。詔改其國號歸仁，置歸仁軍，募千人鎮之。

〈HTS・卷 221 下， pp. 6251—6252〉

としている。この記事を両唐書高仙芝伝と比較すれば、747 年当時、小勃律国は独自の王(名は蘇失利之)を戴いて一応独立の形をとってはいたものの、王妃は吐蕃の公主であり、かつ国内の大酋五～六人は皆吐蕃の為にする者であったこと、そして藤(の吊り)橋一本によって結ばれた隣国・(大)勃律には多数の吐蕃兵が駐屯していたこと等が知られるのである。結果的にはこの高仙芝の小勃律攻撃は大成功を収め、彼は小勃律国内の親吐蕃派を斬り、国王夫妻を捕えて凱旋した。参考のために安西都護府より出発した高仙芝軍の進撃経路(帰路もほぼ同じ)を図示すると、次のようになろう(出典は旧唐書高仙芝伝)。(194)



吐蕃側はこの大敗を極めて簡単に、

phagi lo la babste / dbyar btsan (p)o

豚の年(747年)になって、夏、王は

na mar na bzhugs / kog⁽¹⁹⁵⁾ yul du rgya'i
 Na-mar にお住まいになった。Gog 国 に 中国の
 byim po byungste / bru sha dang gog⁽¹⁹⁵⁾stord/
 兵 (?)⁽¹⁹⁶⁾ がやってきて、ブルシャ と Gog が失われた。

<CDT, Pl. 592, ll. 9-10; DTH, p. 55 & pp. 62-63; 『敦歴』 p. 37 & p. 119>
 と記すのみである。ブルシャは小勃律であるから、Gog(Kog)とは恐らく連雲
 堡⁽¹⁹⁷⁾のあった一帯、すなわちパンジャ川(ワッハーン=タリア)流域をさすのであ
 ろう⁽¹⁹⁸⁾。

ところで唐はこの747年の遠征によって、パミール地方における吐蕃の脅威
 を完全に拭い去ったかというとは実はそうではない。小勃律と吐火羅(トカリス
 タン)との中間に羯師という国があり、これが吐蕃の賄賂を受け、国内に吐蕃の城
 堡を置き、吐蕃が小勃律の主要交通路をおさえるのを助けようとしたからであ
 る。吐火羅国の葉護・夫里嘗伽羅(または失里忙伽羅)は、749年玄宗に奉った上
 表文の中で⁽¹⁹⁹⁾、この間の事情を次のように伝えている。

臣隣境有一胡，號曰羯師^{原作帥，以下同}，居在深山，恃其險阻，違背聖化，親輔吐
 蕃。知⁽²⁰⁰⁾勃律地狹人稠，無多田種，鎮軍^{あるも}在彼，糧食不充，於箇失密市易塩
 米⁽²⁰¹⁾，然得支濟，商旅來往皆著羯師國過。其王遂受吐蕃貨求，於國內置吐
 蕃城堡，捉勃律要路。自高仙芝開勃律之後，更益兵二千人，勃律困^{原作之}。
 羯師王與吐蕃乘此虛危，將兵擬入。臣每憂恩，一破兇徒，若開得大勃律已
 東，直至于闐^{原本失于}・焉耆・臥・涼・瓜・肅已來⁽²⁰²⁾，吐蕃更不敢停住。望安
 西兵馬，來載五月至小勃律，六月至大勃律。伏乞天恩，允^{ゆるされよ}臣所奏。若不
 成，請斬臣為七段。緣箇失密王向漢忠赤，兵馬復多，土廣人稠，糧食豐足，
 特望天恩，賜箇失密王勅書，宣慰賜衣物并宝鈿腰帶，使感荷聖恩，更加忠
 赤。

<TFYK・卷999・外臣部・請求，p. 11724上>

羯師の位置については従来いくつもの説(マストウジ Mastuj, チトラル Chitral, カ
 フィリスタン Kafiristan, etc. に比定⁽²⁰³⁾)が出されているが、この引用文の内容の地
 理的考察の結果と、チトラルが「小カシュガル」という別名(因みに本来のカシュ
 ガル疏勒は法沙・迦師とも書かれる)を持つこととから、これをチトラルに当てるス
 タイン氏らの説がもっとも妥当であろう⁽²⁰⁴⁾と考える。また新唐書・西域伝・吐
 火羅之条には、

其後，鄰胡羯師謀引吐蕃攻吐火羅。於是，葉護失里忙伽羅^{こゝ}丐安西兵助討。
 帝為出師破之。

<HTS・卷221下，p. 6252>

とあるから、吐蕃はトカリスタン(Tokharestan)への進出さえ企図していたらしい。吐火羅葉護が前掲のような上表文を奉って唐軍の派遣を請うた理由は、唐のために吐蕃の中央アジアへの進出を懸念していたからではなく、実は自分自身に迫る身の危険を察したからに他なるまい。しかし唐にとっても彼の言う所はもっともであり、そこで玄宗は再び高仙芝に命じて羯師を討伐させた。通鑑は、

〔天宝九載〕(750年)〔二月〕安西節度使高仙芝，破羯師，虜其王勃特没。三月庚子，立勃特没之兄素迦，為羯師王。

〈TCTC・巻216, p. 6898〉

として、この遠征の成功を伝えている。また同じく通鑑には、

〔天宝十載〕(751年)〔正月〕安西節度使高仙芝入朝，獻所擒突騎施可汗・吐蕃酋長・石国王・羯師王。

〈TCTC・巻216, p. 6904〉

とあり、高仙芝が吐蕃の酋長を羯師王と共に献上しているが、これは恐らく羯師に派遣されていた吐蕃軍の将軍であり、羯師陥落の時に捕えられたものであろう。こうして唐はパミール地方における吐蕃の勢力を次々に駆逐し、753年には遂に大勃律にまで経略の手を進めた。旧唐書・段秀実伝には、

〔天宝〕十二載(753年)封常清代仙芝，討大勃律。師次賀薩勞城，一戰而勝。常清逐之，秀実進曰，「賊兵羸，餌我也。請備左右，搜其山林。」遂殲其伏。

〈CTS・巻128, p. 3583〉

とあり、通鑑・巻216・天宝十二載之条(pp. 6920—6921)にも同内容の記事がある。大勃律の地、即ちバルチスタンは小勃律(ギルギット)と異り、少くとも670年代より終始一貫して吐蕃の支配下にあった地域である(cf. 第二章)。その大勃律が唐の遠征を初めて受け、吐蕃軍はこれを死守することが出来なかったのである。唐軍の士気は非常に高かったといわねばならない。もし、751年に行われたタラス河畔の戦いが東の唐と西の大食が中央アジアの命運を賭けて戦った天王山とも言ふべき性格のものだったとしたら、753年という時点におけるこの唐軍の活躍はいささか納得のいかないものになろう。だが前嶋氏によって明らかにされた如く、タラス河畔の戦いには、製紙法の西伝と並んで従来喧伝されてきた程の深い意味はなかったのである⁽²⁰⁵⁾。即ち唐はこの戦いに敗れたことによって従来西域に有していた權益を失ったわけではないし、勝者である大食がこれ以後東進して安西四鎮の地を侵略するというようなことも全くなかった。むしろこの戦いは、747年以後西域の地に益々支配力を固めつつあった唐が勢い余って勇み足をし、パミール以西は自己の勢力範囲とみなしていた大食を刺

激したがために、その手痛い反撃をくらったものとみなすべきであろう。

さて、ここで50年の長きにわたったチデ=ツクツェン王時代の吐蕃の西域進出の過程を今一度振り返ってみよう。この間における吐蕃の基本的政策は、突騎施や大食、そして時には突厥やウイグルのような諸勢力と結び、中央アジアから唐の勢力を一掃することにあつた。唐とは時に和約を結ぶことがあつても、その裏では常に虎視眈眈として隙を窺っていたのである。だが当時の唐は、開元の治と謳われた英主・玄宗の治世にあたり、その西域経営に対しても並々ならぬ努力がはらわれた時代である。吐蕃が一時的に安西四鎮や河西に侵入することは幾度もあつたが、結局は唐の底力に圧倒されてきたのである。吐蕃がやや長期にわたって保ち得たのはわずかにパミール地方の一部とロプ地方だけだつたと思われる。前者については既に述べて来た所なので、以下にロプ地方の情勢について触れてみたい。

かつて南道地帯には楼蘭・鄯善・且末・精絶・于闐などの西域屈指のオアシス都市国家が存在し、東西交通の要地として栄えていた。それが唐代になると于闐以外は極めて稀にしか史乘に姿を見せなくなる。東西交通の幹線は、コータン（于闐）あるいはカルガリク（朱俱波）・ヤルカンド（莎車）・カシュガル（疏勒）からアクス（姑墨）→クチャ（亀茲）→コルラ（尉犁）→カラシャール（焉耆）→トゥルファン盆地（交河・西州その他）を通る北道に完全に移行してしまっていた。いわゆる安西四鎮も于闐・疏勒・亀茲・焉耆——この際、碎葉は問題にしない——であつたことを思い起して戴きたい。これは如何なる理由によるのだろうか。その最大の原因は従来漠然とタリム盆地の乾燥化にあるといわれてきた。この説に対し地理学者の方からは細部に関し種々の批判が提出されているが、結論的には、漢代以後唐以前の時期においてタリム盆地内の河川の流量が減少し、とくに東南部においてその現象が著しかったことは認めてよいようである⁽²⁰⁶⁾。それゆえ後漢以後、南道の東半部のオアシス国家がさびれていったわけであるが、また唐代に入るとこの地域の河川の流量も増加し、居住～耕作可能面積も拡大したという。ペリオ氏の紹介以来有名になったこの地方のソグド人聚落⁽²⁰⁷⁾もこの時代に形成されたものである。しかしこの頃までには既に、その重要性という点ではロプ地方と他の四鎮地方とでは大きな差がついてしまっていた。隋代及び唐初にそれぞれこの地方の経略が行われているが、これはツァイダム地方より進出していた吐谷渾の勢力を撃破するためであつて、決してこの地方自体に重要性が感じられたからではなかつた。安西四鎮の一つにロプ地方のオアシス都市が加えられなかつたのは、以上のような歴史的背景に照らすならば当然といえよう。だがこの地方が西域経営を目指す唐から全く

見棄てられていたわけでもないこと、勿論である。とくに吐谷渾に代って吐蕃がツァイダム地方を領有してからは、その軍事的重要性が再認識されたことであろう。既に述べたように、7世紀末頃の事実を基にして書かれたこの地方の地志によれば、チェルチェンからミーランにかけてのロプ=ノール西南辺地帯は吐蕃ではなく唐の支配下にあり、吐蕃はまだその南に位置するアルティン=ターク地帯を保持していたにすぎなかった。さらに旧唐書郭元振伝及び通鑑・巻209により、708—709年頃にもこの地方一帯はやはり唐軍の勢力下にあったことが明らかとなった (cf. pp. 26—27)。少なくとも7世紀末から8世紀初頭にかけて吐蕃は、パミール地方だけでなく、ロプ地方においてもその西域進出を封じられていたことが知られるわけである⁽²⁰⁸⁾。しかしこれ以後のこの地方の情勢については具体的史料が皆無に近くなり、従来唐の西域経営や吐蕃の西域進出について書かれた書物や論文も、この点については全く沈黙している。私の知る限りではわずかにスタイン氏が、彼自身の発見した一つの史料によって意見を述べているだけである⁽²⁰⁹⁾。だがこのエンデレ (Endere) で発見された史料 (寺院の壁の落書き) の紀年及び内容解釈については問題があり、私はスタイン氏の説をそのまま受け容れることは出来ない (これについては後述する)。また、やはりスタイン氏がミーラン (Miran) のチベット要塞址で発見した多数のチベット語文書の中に、一つだけルーン文字・チュルク語で書かれた文書 (M. I. xxxii, 006) が混じっていた。トムセン氏はこれを8世紀前半のものとし⁽²¹⁰⁾、スタイン氏もこれに同調したが⁽²¹¹⁾、これまた私には疑問である。本文書には多数のチュルク人の人名・官称名・部族名や肅州 (Suyčü)・高昌 (Qočo) などの地名が現われる。この文書がトムセン・スタイン両氏が認めるようにチベット支配時代 (8世紀中葉～9世紀中葉) のものでないことは内容を検討すれば明らかであるが、だからといってこれを8世紀前半に比定すべき理由はない⁽²¹²⁾。9世紀後半以後とみても条件は同じはずである。一体氏らはこのチュルク文書の中に現われる人物が Tigin, Tudun, Ögä, Čigši, Sangun, Tutug, Ičräki, Tiräk などの官称号を持っている事実をどう解釈したのだろうか。これらはすべてチュルク族が形成した「国家」の高位高官の称号である。もしこの文書を8世紀前半のものとするならば、その時代の河西 (肅州 Suyčü) ～ロプ地方～トゥルファン盆地 (高昌 Qočo) にチュルク族の一国家ないし少なくともそれに準ずるものが存在していなくてはならない。だが史上にそのような事実は全くない。一方これを9世紀後半以後のものとするなら、この地方には新たに西ウイグル王国ないし河西ウイグル王国が形成されていたのだから矛盾はなくなる⁽²¹³⁾。西ウイグル王国の官称号はいわゆるウイグル文棒杭文書に⁽²¹⁴⁾、河西ウイグル王国のそれはコータン語文書に

よって⁽²¹⁵⁾それぞれある程度知られるが、これらと今問題にしている文書中にみえる官称号とは実によく一致することも見逃してはならない。私はトムセン・スタイン両氏の説が成立する余地は、残念ながら全く残されていないと考える。

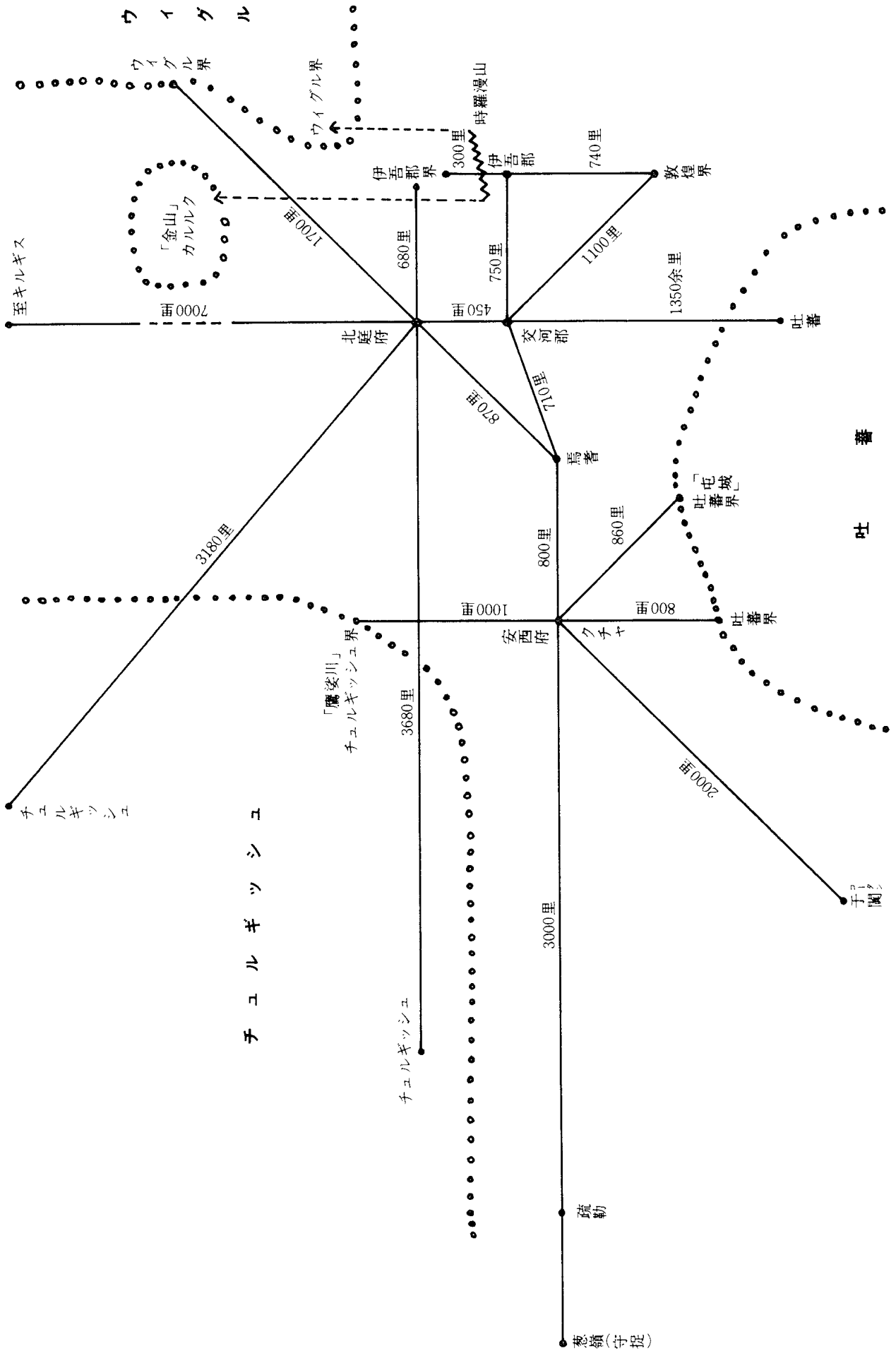
だがこれで710年以後安史の乱勃発以前のタリム盆地東南部の情勢を示す史料が全くなくなったわけではない。8世紀後半に編纂された通典の巻174・州郡・四によれば次のような概略地図が作成できるからである(次ページ参照)。まず最初に問題になるのは、この地図の基礎になった年代であるが、交河郡(トゥルファン地方)とか伊吾郡(ハミ地方)とかいう呼称に注目したい。池田温氏のご教示によれば、唐代に州という呼称に代って郡が使われたのは742—758年のことであるという⁽²¹⁶⁾。これは一応、通典は主に天宝年間(742—756年)までのことを記しているとする通説と合致する。さらに地図をみると、突厥の姿が見えずにウイグルが現われていることに気が付く。天宝以前の漠北の覇者は決してウイグルではなく明らかに突厥(第二可汗国)であった。通典の本文自体も突厥については上・中・下に分けて記すほどの多くのスペースを割いているのに、ウイグルについてはごくわずか、それも744年の建国以前のことを記しているにすぎない。にもかかわらずこの地図では突厥が全く現われないのである。(ただし通典・巻174の本文には一ヶ所「安西都護府、(中略)、南隣吐蕃、北拒突厥。」としてあらわれる)。それゆえこの地図が744年の突厥滅亡以後の情勢を伝えていることは最早疑いがない。次にこの地図で目をひくのは、突騎施が依然として広大な領域を占めていることである。突騎施は738年の蘇祿の死後、黒姓と黄姓の対立が表面化して国内が乱れ、衰退期に入っていくが、まだ暫くの間は勢力を保っていた。しかしそれも750年代前半までのことである。これ以後は東方から移動してきたカルルク Qarluq の台頭が目覚しくなってくるからである⁽²¹⁷⁾。カルルクは740年代にウイグルに撃破されて西進を余儀なくされたが、タラス河畔の戦いの時には唐を裏切って大食に味方し、大食に勝利をもたらす大きな原因となった。この頃からカルルクは次第に突騎施を圧倒し、新天地に覇権を確立していったらしい⁽²¹⁸⁾。

以上を総合すれば、この地図の基礎となった年代を740年代後半～750年代前半とみることはほぼ承認されると思う。

そこで今度はこの地図上に現われている吐蕃の領域に注目しよう。通典の原文には、

交河郡中略。南至三百五十里過荒山
千餘里至吐蕃。後略。

安西府中略。南至吐蕃界八百里。中略。東南至吐蕃界
屯城八百六十里。西南至于闐二千里。後略。



とある。相対的距離関係から、吐蕃の国境がタリム盆地東南部にまで及んでいたことは容易にみてとれる。まして現在のミーランを示す「屯城」⁽²¹⁹⁾という具体的地名が明記されているのであるからして、このことに間違いはない。交河郡の南 1350 余里の地点は吐蕃界ではなく単に吐蕃となっているが、ここは勿論ラサ地方などではなくして、やはりロプ地方か⁽²²⁰⁾、あるいはツアイダム西北辺を指しているのであろう。この通典の記事に誤りがなければ、710 年頃までは明らかに唐の勢力が及んでいたロプ地方は、740 年代には既に吐蕃の支配下に入っていたことになる。安史の乱勃発以後ならいざ知らず、それ以前のまだ唐が西域に対する制御力を十分持ち、安西四鎮をも確保していた時代に、果してこのようなことがあり得たであろうか。いささか疑問なしとしない。しかし私は、次のような二つの史料の存在を知るに及んで、やはり安史の乱以前にまたしても吐蕃の勢力はタリム盆地の一角に進出していたとみたいのである。その史料の一つは旧唐書・尉遲勝伝の

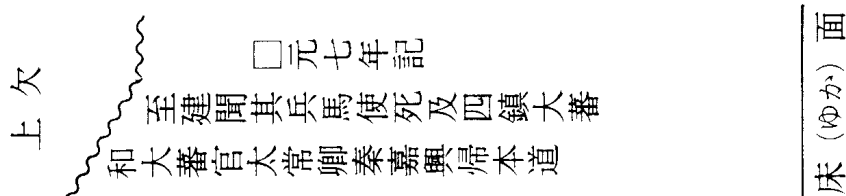
尉遲勝，本于闐王珪之長子，少嗣位。天寶中來朝，獻名馬美玉。玄宗嘉之。妻以宗室女，授右威衛將軍・毗沙府都督，還國。與安西節度使高仙芝同擊破薩毗・播仙。以功加銀青光祿大夫・鴻臚卿，改光祿卿，皆同正。至德初，聞安祿山反。勝乃命弟曜行國事，自率兵五千赴難。

〈CTS・卷 144, p. 3924〉

という記事である⁽²²¹⁾。尉遲勝の即位年代は不明であるが、高仙芝が実質的に安西節度使の地位にあったのは、小勃律攻撃(747年)からタラス河畔の戦い(751年)までのことである。とすると于闐王・尉遲勝が高仙芝と共に薩毗・播仙を撃ち破ったのは747—751年内のある時点のこととなる。もう一つの史料は岑参の「獻封大夫破播仙凱歌六章」⁽²²²⁾という詩である。封大夫とは、高仙芝の後(752—755年)に安西四鎮の事をつかさどった封常清(CTS・卷 104 に伝あり)を指す。またこの詩は、聞一多氏の研究によれば⁽²²³⁾、当時封常清に従って西域の地にあった岑参が、天寶十三載(754年)冬の遠征の成功を祝って封常清に献呈した凱旋の歌である。詩の中には楼蘭や蒲海(すなわちロプ=ノールの漢名・蒲昌海の略)の地名も見え、戦いの相手は「蕃軍」となっている。播仙城がチェルチェンであり、薩毗城がチャルクリク東南の茫崖鎮ないしその周辺であることについては既に述べた(cf. pp. 26—27)。では747—754年に、この地方にいて唐の安西節度使が単独で、あるいはその隷属下にあった于闐の王と共同して討たねばならなかった敵とは一体何であろうか。これまで見てきたような吐蕃の西域進出の過程を振り返る時、我々はこれを吐蕃以外のものにあてはめることは不可能である。

尉遲勝伝には「撃破」したとあるが、これはあくまで一時的な勝利を指すの

であり、彼らは吐蕃を追い払ってこの地方を占領するまでには至らなかったの
 であろう。だがこのように考える時、当然浮んでくるのは、では吐蕃はいつ頃
 からこの地方に進出していたのかという疑問である。もしスタイン氏がエンデ
 レの寺院址で発見した落書きの紀年が、719年(開元七年)のものであるなら問題
 はない。この落書きは壁に鉄の棒か何かで刻まれたものであるが、壁が崩れて
 いるために不完全な形でしか残らなかった⁽²²⁴⁾。



シャヴァンヌ氏は「元七年」の上の字を「開」と読み、

Note écrite la septième année k'ai-yuan (719 p. C).

... tche kien. Il apprit que son commissaire des troupes et de la cavalerie était mort ;
 puis les Quatre Garnisons et les grands Tibétains...

... avec les officiers des grands Tibétains. Le haut dignitaire du t'ai-tch'ang, Ts'in
 Kia-hing, revint dans le district placé sous ses ordres.

と訳した⁽²²⁵⁾。スタイン氏はこれをさらに発展させて、719年に唐の役人が、そ
 れまでこのエンデレ地方を占領していた「吐蕃」を駆逐して再びこの地に戻っ
 て来た、と解釈した⁽²²⁶⁾。「本道」を秦嘉興の任地とみ、且つこれをエンデレ地方
 とみたわけである。だがこの解釈はおかしい。なぜならその写真(図版I参照)⁽²²⁷⁾
 を見れば分るように、この三行の銘文はあくまで落書きであり、およそ唐の高
 官が自分の管轄区域内にある仏教寺院に常態で参詣した時に書かせたものとは
 思われなからである。もしスタイン氏の推測するような晴れがましい状況
 下で書かれたなら、敦煌やトゥルファンに無数に例があるように、きちんとし
 た石碑に刻まれるか、あるいは壁面に枠を描いて、その中に墨と筆で堂々と書
 かれてしかるべきである。そうではなくて、壁面に直接、釘状のもので引っか
 いて書かれていること自体、これが何かの事情でここを引き上げる際、倉卒の
 間に書かれたことを推測させる。さらに「歸本道」の「道」とは軍事区画ある
 いは地方行政区画の単位であるか⁽²²⁸⁾、もし719年として考えるなら、ここに関
 係ある軍事区画は安西道(治所は龜茲)である。地方行政区画としての道は中国本
 土内に置かれたもので、西域には置かれていない。とすれば和大蕃官太常卿と
 して吐蕃との交渉に当たったと思われる秦嘉興の帰るべき本道とは、龜茲か中
 国本土(河西を含む)内であって、決してエンデレなどではない。だから「歸本道」
 を「任地に帰る」あるいは「(本来の)任務に戻る」としたシャヴァンヌ氏の訳自

体は決して誤っていないが、これをエンデレへの赴任とみたスタイン氏の解釈は誤りというべきである。ではこの史料の第一行目を「開元七年記」としたシャヴァンヌ氏の判読の方は、本当に正しいのであろうか。スタイン氏は、シャヴァンヌ氏の他にバシエル氏及び三人の中国人学者にも写真を見せて判読を依頼したところ、彼らも全て「開元」と読んだと報告している⁽²²⁹⁾。それ故、もしこれが正しければ、719年以後「吐蕃が」唐の勢力を押しよけてエンデレ地方にまで進出し、天宝年間にもこの地を保持していたとすることが出来て、私には甚だ都合がよいのである。にもかかわらず私はまだこの「開元七年」説に無条件に賛成することが出来ない。なぜなら写真を見る限り、「元」の上の字は「貞」にも見え、スタイン氏自身もそのことを認めているからである⁽²³⁰⁾。もし「貞元七年」とすればこれは791年を指す。スタイン氏はこのような遅い時点で唐が新たにエンデレに進出してくる筈はないとして、「貞元七年」の可能性を全く無視している⁽²³¹⁾。だが氏の読みは不正確で、実際には唐が吐蕃に追われたとみるべきこと前述の通りである。こうなると実は「貞元七年」説も無視できなくなってくる。後でみるように、ちょうど791年(貞元七年)ころに吐蕃の勢力はロプ地方の北の焉耆・北庭地方だけでなく、西の于闐地方にも伸張しているからである。結局私は今のところ、本史料の紀年を「開元」とも「貞元」とも決定することは出来ず、秦嘉興なる人物について記した新史料の発見を待つしかない。

以上のように、天宝以前における吐蕃のロプ～エンデレ地方への進出年代を719年(開元七年)とすることについては一応これを保留する。しかし通典及び旧唐書・尉遲勝伝の記事は十分信頼に値するものであるから、玄宗治世中において、エンデレまではともかく、少なくともミーランからチェルチェンまでは吐蕃が一時的にせよ支配した、という事実のあったことだけは認めてよいと思う。

第五章

チソン=デツェン Khri srong lde btsan 時代 (755—796 年在位)

前章の最後で、吐蕃がチデ=ツクツェン王の末年にロプ地方に進出していたことを述べた。だが安西四鎮を中心とする西域のほとんどは依然として唐の勢力下にあったことも事実である。タラス河畔の戦いで唐を破ったとはいえ、もともと大食には東進の意志はなく、一方唐の安西節度使は753年という時点で、それまで長く吐蕃に隷属していた大勃律を討つ余裕さえ有していた。こうして唐は751年以後も大食の脅威を受けることなく、また吐蕃の進出に悩まされることもなく、その西域に於ける支配力を益々揺ぎなきものにしていくかにみえた。だがその実、敵は国内にあった。755年、范陽から叛旗を翻した安祿山の軍

はたちまちにして洛陽を、次いで長安を陥れ、唐本国は以後8年の長年月にわたる混乱の中へと引きずり込まれていったからである。然るに、本国の援助を失った安西四鎮も、すぐさま他国の侵略を受け、その支配下に置かれたかという、そうではなかった。それは一つには当時の中央アジア情勢が大きく幸いている。即ち、先にみたようにイスラム勢力(大食)ははじめからパミールを越える意志はなく、突騎施は蘇祿の死後、国内の黒姓と黄姓とが内訌を続け、突厥第二可汗国を滅ぼしたウイグルもまだ遠くモンゴルの地にあつて西域に手を伸ばすまでには至っていなかったからである。そして問題の吐蕃は、唐の国内情勢をみてまず河西から侵略の手を拡めていったので、安西四鎮は暫くの間そのまま残されることになったのである。だが大国間に狭まれてその動向には非常に敏感であったパミール地方の諸国の目には、唐の退潮はもはや覆うべくもないものとして映じたのであろう。敦煌編年記は756年と760年の二度にわたつてパミール諸国からツェンポのもとへ使節派遣があつたことを伝えている。

spr(e)'u lo la babste / /

猿の年(756年)になって、.....

ban 'jag nag po dang gog dang / shig

黒 Ban-'jag と Gog と Shig-

nig las stsogste / stod pyogs gyi

nig などの 上部 地方の

pho nya pyag 'tsald /

使者が(ツェンポに)臣礼を取り(に来)た。

<CDT, Pl. 592, 11. 16—20; DTH, p. 56 & p. 63; 『敦歴』 p. 38 & p. 119>

{ byi ba'i lo la babste } /

{ ネズミの年(760年)になって }

stod pyogs po nya pyag 'tshald /

上部地方の使者が(ツェンポに)臣礼を取り(に来)た。

<CDT, Pl. 593, 11. 38—40; DTH, p. 58 & p. 65; 『敦歴』 p. 39 & p. 120>

黒 Ban-'jag, Gog, Shig-nig がいずれもアム河上流のパンジャ川ないしワッハーン川流域に沿う国々であることは既に述べた(cf. pp. 30, 42)。すなわち開元初期に置かれた⁽²³²⁾唐軍の最西端の根拠地・葱嶺守捉(タシュクルガン)と吐蕃軍の西方基地・大勃律(バルチスタン)との中間にあり、しばしば両者の係争の的となっていた所で、747年の高仙芝の遠征以降は唐の勢力下に入っていた国々である。吐蕃側史料は、このような国々が吐蕃に臣属してきたというのである。本国と

の連絡を断たれた唐の西域駐留軍はこれを抑止できなかったわけで、その力はおそらく安西四鎮をはじめとする主要都市に拠って、その周辺の守りを固めるくらいが精一杯であったろう。それでも前述したような中央アジア情勢に幸いされて、結果的には790年頃までその命脈を保つことが出来たのである。この間の事情は、河西が吐蕃に占領されてしまったので⁽²³³⁾、中国側史料からはほとんど知ることが出来ない。しかし幸いなことにスタイン探検隊の将来品の中にはその欠を補う文書がわずかではあるが含まれている。そこでまずこれから見ていくことにしよう。

コータンの東方ダンダン=ウィリク (Dandān-uiliq) 遺址から出土した文書の中に次のようなものがある (図版II参照) ⁽²³⁴⁾。

- 1 牒^ニ傑謝百姓并⁽²³⁶⁾
- 2 傑謝百姓状^ニ訴雜差科等^一。
- 3 被^ニ鎮守軍牒^一、稱^レ得^ニ傑謝百姓胡書^一、翻^{スルニ}稱^レ「上件百
- 4 姓 深憂養^ニ蒼生^一。頻年^ニ被^レ賊^ノ損^{スルヲ}莫^レ知^ニ
- 5 計^一近日^ニ蒙^{コウモル}差使移^ニ到^{シテ}六城^一。去載所^レ着差科、並^ニ納^ミ。
- 6 足。 慈流、今年有^ニ小小差科^一、放^下至^ニ秋熟^一依^レ限輸
- 7 納^上其^レ人^ニ粮並在^ニ傑謝^一、未敢就取。伏望^ニ商量^一者^{トイヘリ}。」
- 8 使判^{ジテ}一切並放^{ミナゆるスといヘリ}者。其人粮状^{ニテ}稱^レ並傑謝、未^レ有處
- 9 分 百姓胡書^{ニテ}状^ニ訴雜差科^一、准^ニ使判^ノ牒^{シテ}所
- 10 由^{ゆるス}放^ス。其人粮並在^ニ傑謝^一、欲^{スルモ}往使^下人就^中取^上粮、未敢
- 11 擅執^レ案諮^{ハカリ}、取^ニ處分^一、訖^レ各牒^ニ所由^一者^{トイヘリ}。使又
- 12 判^{ジテ}、任^ニ自般運^一者^{トイヘリ}。故牒[。]
- 13 大曆三年三月廿三日典成銃牒
- 14 六城質邏刺史阿摩支尉遲 **信**

シャヴァンヌ氏はこれを以下のように仏訳している⁽²³⁵⁾。

Lettre officielle. La population de Li-sie⁽²³⁶⁾ (Li-hsieh) ainsi que...

Requête de la population de Li-sie (Li-hsieh) se plaignant de diverses corvées et réquisitions en grains.

Une lettre officielle émanant du général gouverneur de la place s'exprime ainsi: 'J'ai reçu de la population de Li-sie (Li-hsieh) une lettre en écriture barbare; je l'ai fait traduire; elle disait: "La population énumérée ci-dessus... la profonde sollicitude avec laquelle vous subvenez aux besoins de la multitude du peuple. Pendant plusieurs années de suite nous avons souffert des brigands et nos pertes ont été incalculables; dans ces derniers temps, nous avons reçu la faveur qu'on nous fit nous transporter dans les Six Cités. L'année dernière, toutes les corvées et les réquisitions en grains que nous devons payer... grâce à votre bonté. Cette année, il y a quelques petites corvées et réquisitions en grains pour lesquelles on nous a accordé d'attendre jusqu'à la moisson d'automne, afin qu'à cette date nous nous en acquittions... et le grain, tout cela est à Li-sie (Li-hsieh) et nous n'osons point aller l'y prendre. Nous espérons humblement que vous discuterez à ce sujet, de manière à décider de nous libérer de tout cela."

--Ce qui est dit dans cette lettre au sujet des hommes (pour les corvées) et du grain (pour les réquisitions) qui sont tous à Li-sie (Li-hsieh), ne donne pas lieu... que la requête écrite en écriture barbare par la population se plaigne de diverses corvées et réquisitions, afin qu'on prenne la décision de lui délivrer une lettre officielle par laquelle elle soit libérée. Les hommes (pour les corvées) et le grain (pour les réquisitions), tout cela étant à Li-sie (Li-hsieh), je désire qu'on y envoie des hommes pour aller prendre le grain; mais que nul ne se permette de le faire de son autorité privée; pour que, quand on aura demandé une autorisation, dans chaque cas une lettre officielle soit le moyen par lequel (on sera autorisé à le faire), et pour que je vous invite à décider en outre que ces gens auront eux-mêmes la charge d'opérer ce transport, je fais cette lettre officielle.'

Lettre officielle de l'officier Tch'eng Sien (Ch'eng Hsien), datée du 23e jour du 3e mois de la 3e année ta-li (768).
Adressée à Wei-tch'e (Wei-ch'ih), tche-lo (chih-lo) préfet des Six Cités et a-mo-tche (a-mo-chih).

だが残念ながらこの仏訳には余りにも問題点が多い。本文書は実は次のように解釈すべきものである⁽²³⁷⁾。今それを箇条書きにして示せば、

I. 宛先 (受取人) = 傑謝鎮の百姓等。

II. (唐の于闐方面) 鎮守軍⁽²³⁸⁾の役所から次のような内容の牒を (六城の刺史は) 受け取った。

1. 傑謝鎮の百姓が鎮守軍に訴状を差し出した。

2. この訴状は胡語 (恐らくコータン語) で書かれていたのでこれを漢訳してみると、次のような内容であった。

a. 傑謝鎮の百姓は連年「賊」の侵入を受けて、損害が甚大である。

b. そこで最近この地の百姓は、お上 (おそらく六城の刺史) の許しと助力を得て、六城へ移った。

c. 去年の年貢はみな納めた。

d. 今年は上のような事情なので、年貢を減らし、かつ納入の時期も秋まで延ばしてもらいたい。

e. 傑謝鎮に残してきた人糧 (人間の食糧すなわち穀物のこと) については、まだそのままになっているので、なんとかしてもらいたい。

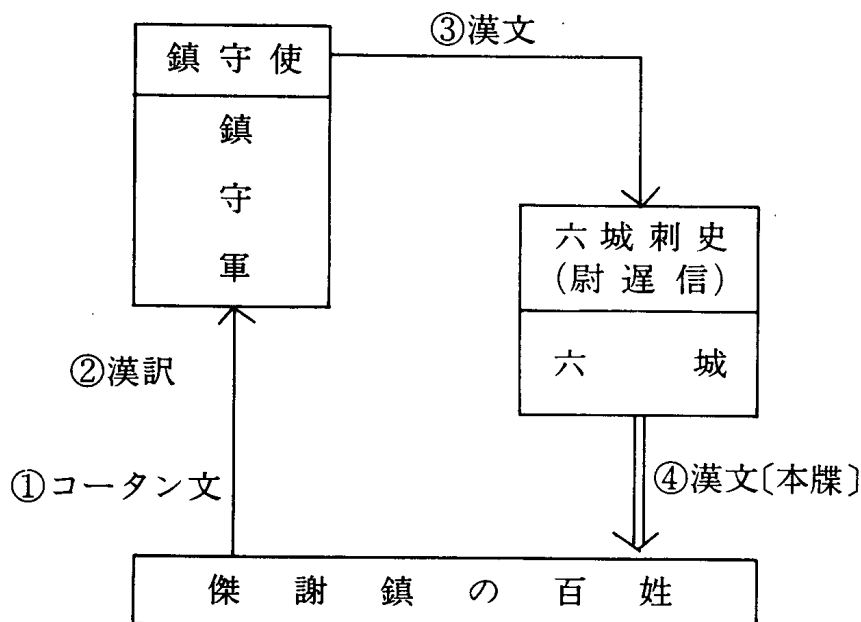
III. この申し立てはお上 (おそらくコータン地方を管轄する唐の最高責任者たる鎮守使を指す⁽²³⁹⁾) のききいれるところとなり、傑謝鎮に在る人糧についても、自分たちで勝手に持って来てよいとお許しが出た。

IV. そこでこの意を私（六城の刺史）は傑謝鎮の百姓に伝える。

V. 日付と書記名。

VI. 差出人とその署名。

となり，その間の関係を図示すれば次のようになる。



シャヴァンヌ氏はヘルンレ氏と同じく⁽²⁴⁰⁾，成銃を本牒の差出人，刺史で阿摩支の尉遲を受取人とみたが，この点は認められない。成銃は典という一介の小役人にすぎず，このような人物が牒を差し出すことはまず考えられない。また最後の行の尉遲までが同筆で，その下に別筆で一字「信」と記されているが，尉遲はあくまで姓なのだから，この「信」はシャヴァンヌ氏の言うような'digne de foi'の意⁽²⁴¹⁾で書かれたものでは決してなく，本人が名を自署したものと考えるべきである⁽²⁴²⁾。このような公式文書に姓だけを記して名を記さないような非常識なことは考えられないし，また皇帝や王や高位高官等が差出人である場合は，このように最後にだけ本人が署名するという形式は，漢文文書にはよくみられるからである⁽²⁴³⁾。それゆえ私は，成銃は単に本牒を起草ないし清書しただけの書記官，そして阿摩支「尉遲信」をこの差し出し人と考える。受取人が傑謝鎮の百姓であることは書式からいっても間違いない。

さて，本文にみえる大暦三年は768年にあたるわけであるが，中国の年号を使用し，かつ胡語を漢語に訳す手順を踏んでいる点から考えても，当時のダンダン=ウィリクにはまだ唐の勢力が残存していたことが知られる。ヘルンレ氏は六城をクチャ・アクス・ウッチ=トゥルフアン・カシュガル・ヤルカンド・コータンとみたが⁽²⁴⁴⁾，これは全くの誤解で，六城はあくまでダンダン=ウィリク地区そのものを指すとみるべきであろう⁽²⁴⁵⁾。質邏の意は不明であるが，阿摩支は

コータン及びカシュガルで王の次に位する人物に与えられる官称号である。シャヴァンヌ氏は新唐書・西域伝・疏勒之条⁽²⁴⁶⁾や冊府元龜・卷964・外臣部・封冊篇⁽²⁴⁷⁾などの漢文史料だけを見て阿摩支を王 (le roi) とみたが、これも誤りである。チベット語で書かれた Li'i-yul gyi lo-rgyus⁽²⁴⁸⁾ (コータン国年代記) あるいは Li-yul lung-bstan-pa⁽²⁴⁹⁾ (コータン国懸記) は、王が中国へ行って留守の間 'A-ma-cha の Khe-meg という「大臣」が摂政となっていた、という話を伝えている。'A-ma-cha は明らかに阿摩支であり、この語はサンスクリット語の amātya 「大臣、輔相」と語原を同じくするものと考えられる⁽²⁵⁰⁾。ただ冊府元龜を参看すると、阿摩支を王に冊立しているから、これは単なる「大臣」ではなく、「王の次に位する者」・「次に王となる資格を持つ者」の意に理解した方がよからう。阿摩支には王族・尉遲家の者が任ぜられることが一般的だったらしく思われ、本文書の阿摩支が尉遲姓を有しているのはそれを裏付けている。ところでシャヴァンヌ氏は本文書中にみえる尉遲 (信) を、当時の于闐王であった尉遲曜⁽²⁵¹⁾にあてているが、これまた疑問である。唐は異民族の地に府州を置く時には、府には都督を、州には刺史を任命するのが普通であった⁽²⁵²⁾。安西四鎮の一つである于闐には毗沙都督府が置かれていたのだから、当然于闐王は毗沙都督に任命されているはずであり、現に上元年間には伏闐雄 (伏闐は尉遲と同じ) が都督に任ぜられた実例がある⁽²⁵³⁾。これに対し本文書にみえる阿摩支尉遲 (信) なる人物は刺史の称号を持っているにすぎない。唐が羈縻州の首領には刺史の号を授けたこと、毗沙都督府は「領州十」を有していたと伝えられている⁽²⁵⁴⁾ことから考えて、この阿摩支尉遲信はコータン治下の十州の中の一部を統治する刺史であったのだろう。王族・尉遲家の出身たる彼は阿摩支として王に次ぐ位にありながら、同時にコータン地方内の一州あるいは数州を統治する刺史として六城に滞在していたものと思われる⁽²⁵⁵⁾。

ところで、この牒式文書からは当時のコータン地方の政治機構、即ち土着政権と漢人駐留軍による二重の支配体制の一環が窺われるのであるが、今はこの点に立ち入らない。私がここで最も問題にしたいのは、768年という時点でコータン地方にはまだ唐の勢力が十分及んでいたこと、しかし一方ではコータンの東部国境付近で毎年のように「賊」の侵入を受けその地の百姓が移住を余儀なくされていること、この二点である。この「賊」が、ミーランを中心にロプ地方に進出していた吐蕃の軍隊であることは、前章にみたような情勢からしてほぼ間違いあるまい⁽²⁵⁶⁾。当時の吐蕃軍は河西に於いて鄯州(762年)・涼州(764年)・甘州(766年)・肅州(766年)を東から順に攻め落とし⁽²⁵⁷⁾、残る瓜州と沙州の攻陥に全力を傾けていた時期にあたる。それゆえロプ地方に駐留していた吐蕃軍

は少数であり、これが単独でコータンを攻撃することは不可能であったと思われる。吐蕃軍の攻撃が、コータンの東部国境地方に対する単発的な侵入・掠奪にとどまった最大の理由は実にここにあったと思われるのである。

このことは逆にみれば、吐蕃が河西を完全に制圧するまではコータンは安全だったということでもある。事実、ダンダン=ウィリク出土文書には前掲の768年以後、781・782・786・787・789・790年の紀年のある漢文文書がそれぞれ1～2通ずつ含まれているし⁽²⁵⁸⁾、ダンダン=ウィリクの南方のバラワスト Balawaste (ドモコ Domoko の東南約10マイル) からは772年及び789年の日付をもつ文書が⁽²⁵⁹⁾、そしてマザール=ターク Mazār-tāgh からも790年の紀年の入った文書⁽²⁶⁰⁾がそれぞれ1通ずつ出土している。以上のような紀年のある文書の他に、同時に出土した漢文文書はかなりの数にのぼる。これらをも含む文書全体の性格を大別すれば官文書・民間の経済(貸借・契約etc.)文書・寺院関係文書に分けられるが、兵馬使・都尉・倉典・監館・善政坊等の語が散見するところから、唐の駐留軍の勢力がいまだに存続していることが推測される。そしてインドから帰唐する途中の沙門悟空が780年代半ば頃に于闐を訪れた時、ここにはまだ尉遲曜(尉遲勝の次の王で唐から冊封を受けている⁽²⁵¹⁾)が于闐王として健在であったし、かつまた鄭據なる漢人の鎮守使がいた⁽²⁶¹⁾ことは、この推測の正しいことを十二分に裏付けてくれよう。この悟空入竺記の記事は、于闐以外の他の三鎮即ち疏勒・龜茲・焉耆にもそれぞれ土着の王と唐の鎮守使がおり、また鉢浣国(撥換城)や北庭にも唐の鎮守使ないし節度使がいたことを伝えている。それゆえ少なくとも780年代半ば頃までは安西四鎮は吐蕃の侵入を受けることなくその命脈を保っていたことが明白となる。しかし本国との連絡を絶たれたこの地の駐留軍及び原地軍の武力はしれたもので、吐蕃が本格的に攻撃の手を加えてきたならば、ひとたまりもなくやられてしまったであろう。だが現実には、先に述べたように、吐蕃の攻撃の鋒先はまだ河西の方に向いていたのである。

では吐蕃が河西攻略を完成し、新たな攻撃の鋒先を西域に向けたのはいつのことであろうか。河西で最後まで吐蕃に抵抗したのは沙州であり、この陥落年代についてかつては諸説があったが、結局淘汰されて781年説と787年説の二つだけが残った⁽²⁶²⁾。さらにこれら二つの中では後者の方が有力であり、最近もまた山口氏によって、一年繰り上げて786年とすべきだという修正意見付きではあるが、基本的には後者が確認された⁽²⁶³⁾。実は私もここで、この786/787年説を支持したい。その理由としては、吐蕃がウィグルとの全面衝突の可能性を十分認識しつつも敢えて北庭攻撃を開始したのが789年冬であること⁽²⁶⁴⁾、及び791年以後はコータン地方の情勢を伝える中国史料も原地の漢文文書も共に完

全に途絶えていること、この二つを挙げたい。とくに後者は、河西に手のかからなくなった吐蕃がそれまで放置していたコータン地方に遂に軍隊を投入し、これを悉く占領した結果であると考えられるからである。チソン=デツェン王の治世は796年までであるが、彼の時代の業績として敦煌年代記が、

rgyal po 'di'i ring la / 'bro khri gzu'

この王の御代に、'BroのKhri-gzu'

ram shags kyis / stod pyogs su drangste /

ram-shags は 上部地方に 進軍し、

li 'bangs su bkug nas dpya' phab bo //

コータンを臣属せしめ、税(貢納)を義務づけた。

〈CDT, Pl. 571, ll. 391-392; DTH, p. 115 & p. 154; 『敦歴』 p. 73 & p. 144〉

という記事を書いているのを見る時、この考えは一層揺ぎなきものとなる。もちろん上部地方とはパミール地方(とくに南パミール)をさすこと既述の通りであるから、ここにいう「上部地方への進軍」とは、785?—786年に吐蕃がパミール〜トカリストン地方で大食と戦った事実⁽²⁶⁵⁾をさすのであろう。しかしコータン地方の占領は、悟空入竺記と唐の年号による紀年を持つ漢文文書の出土状況とから恐らく790年頃のことと考えられるから、この時の進軍とは直接結び付かない。吐蕃の最終的なコータン攻撃はもう一度改めて行なわれたものであり、その時の進撃路としては、東のロプ地方から西域南道を西進する道と、西のパミール地方から東進する道との両方が考えられる。

貞元六年(790年)十月四日の日付を持つ漢文文書(Mr. tagh. 0634)⁽²⁶⁰⁾が出土したコータン北方のマザール=タークでは多量のチベット語文書も発見されているが⁽²⁶⁶⁾、それらの大部分は790年以降のものともみなしてよからう⁽²⁶⁷⁾。吐蕃はコータンを攻略するやすぐさま、この地方全体を統治する駐留軍の本拠として、北道のクチャ方面からの敵を防ぐ要衝の地であるマザール=タークに城塞を築いたのであろう。ここから出土したチベット語文書には軍政関係のものが特に顕著である。トマス氏はこれらの文書を詳細に検討し、ここがチベット人からはシンシャン Shing-shan と呼ばれた吐蕃のコータン地方支配の中心地であったことを明らかにしている⁽²⁶⁸⁾。

さてここでもう一度、先に紹介したエンデレの寺院址に残された落書きのことを振り返ってみよう。そうすると、この紀年が「開元七年」ではなくて「貞元七年(791年)」であっても、その内容をさほど無理なく解釈できることに気が付こう。即ち、エンデレ地方に駐屯していた唐軍(及び原地軍)が、ロプ地方から西進、もしくはコータン地方から東進してきた吐蕃軍の攻撃を受け、唐軍の兵

馬使が死亡するほどの敗北を喫した。そこで和大蕃官太常卿としてエンデレに滞在していた秦嘉興は本来の任地(おそらくは安西道⁽²⁶⁹⁾の本拠である龜茲)へ引き揚げることになった、と解釈すれば、年代的にも大きな矛盾はなくなるからである。前註(256)に述べたような理由からもこの可能性は十分に存するのである。しかし私は、秦嘉興なる人物の経歴が明らかになって年代が確定するまでは、やはり慎重な態度を取っておきたい⁽²⁷⁰⁾。

本論で筆者は、初代ソンツェン=ガムボ王の時代から、第五代チソン=デツェン王の時代にわたる吐蕃の中央アジア進出の過程をみてきた。それゆえチソン=デツェン以後のことについても当然言及すべきであるが、9世紀前半の情勢はほぼ8世紀末のそれを受け南道地帯を支配し続けていたのであって、他勢力との確執はなかった。この時代に属する原地出土のチベット語文書は相当の数にのぼり、これらは吐蕃の官制・軍制・税制・駅伝制などの支配機構を研究する上には多大の寄与をなすが、本稿の主題とは直接関係がない。それゆえチソン=デツェン王以後の西域南道の情勢は、吐蕃の支配が継続していたということを述べる他に言い得ることはない。これに対し、西域北道地方においては情勢は全く異なる。吐蕃の勢力は790年頃に北庭～西州にまで及んだことさえあったが、これは当時この地方に間接的な支配権を及ぼし、さらに全面的な中央アジア進出を狙っていたウィグルの猛反撃を受けることになった。このチソン=デツェン王の末年に起ったウィグルとの北庭～西州争奪戦とその結果については、すでに別稿で詳しく論じたので⁽²⁷¹⁾、就いて参照されたい。

終章

今ここで吐蕃の中央アジア進出を振り返ってみると、これが大きく三つの時代に分けられることに気がつく。即ち(1)7世紀後半、(2)8世紀前半、(3)8世紀後半～9世紀前半である。まず7世紀後半における吐蕃の中央アジア進出は、代々宰相として専権をふるった^{ガル}Mgar^{いっか}一家の指導によるものであり、主にパミール地方を通して中央アジアに出ようとするものであった。そしてこの時代には一時的にせよ吐蕃の勢力が中央アジアを支配したことがあった。次いで8世紀前半になると、勿論パミール地方が重視されているのであるが、一方ロブ地方へも経略の手が伸び、東西両面から中央アジアに迫っている。しかしこの時代は唐の方でも西域経営の一大躍進期にあたり、吐蕃はそれほど目覚ましい活動をみせることが出来なかった。それが8世紀後半に入ると、安史の乱による唐の退潮に乘じ、第1期にもまさる華々しい中央アジア進出を展開し、とくに8世紀末からは天山南道地帯全域を完全に支配することとなった。しかもこの

時の中央アジア支配は、東の河西～ロプ地方も西のパミール地方も共に押さえていた⁽²⁷²⁾ために、極めて安定したものであった。吐蕃が名実ともに東西南北の物資や文化の交流・融合の中心となり、自分たちも発展し、周囲にも多大の影響を与えて世界史上に大きな役割を演じたのは、まさしくこの時代のことであったのである。

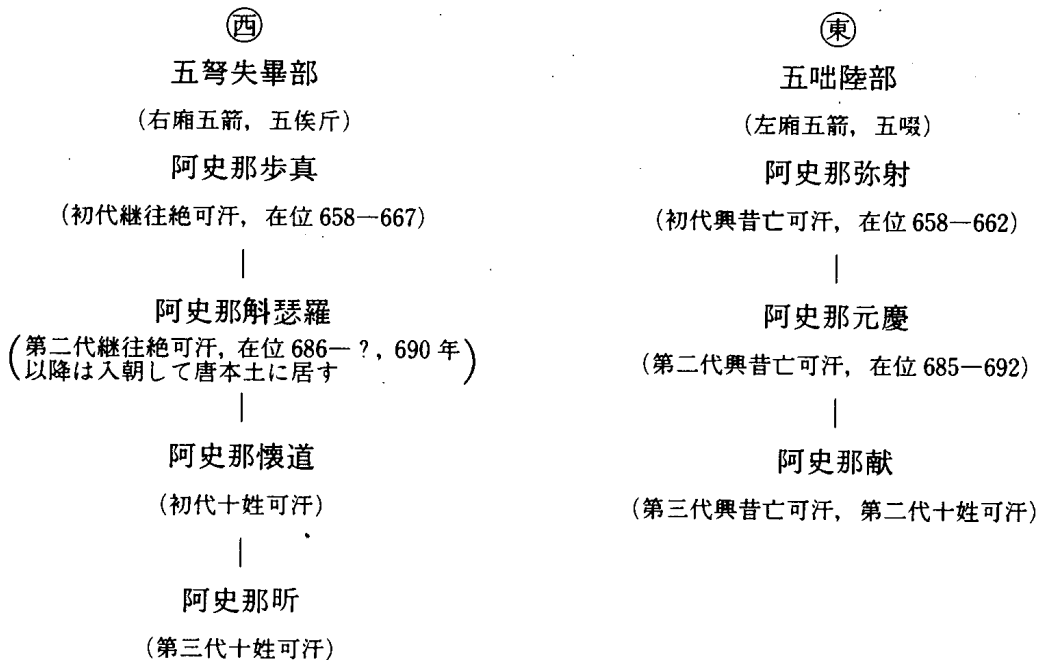
チベットは決して「秘境」などではない。否、むしろ造船術や羅針盤等の進歩によって海上交通が飛躍的な発達を遂げる「近代」以前においては、ユーラシア大陸の両端に浮かぶ日本やイギリスなどよりはるかに、はるかに開かれた国であった。またそれ故にこそ、「力」さえあればチベットは「四方」にその勢力・領土を拡大しようとしたのである⁽²⁷³⁾。本稿はその「四方」のうちの一部を扱ったにすぎない。吐蕃王国時代のチベットといえは、これまで東の中国、南のインドとの関係ばかりが重視されてきたが、今後は西のイラン・シリア・アラビア、北のソグディアナ・タリム盆地・天山地方・モンゴリアとの関係にも常に目を注ぎながら、その歴史・経済(貿易)・言語・文化・宗教等々を根本から理解するように務めることが、ますます要求されてくるであろう。そうしてこそはじめて、我々のチベットに対する認識は確かなものとなり、ひいては世界史への洞察がいつそう深まることになるのである。

註

- (1) 関係史料の多くは Chavannes, *Doc. Turcs* 及び佐口透・山田信夫・護雅夫(訳註)『騎馬民族史 2 正史北狄伝』(東京, 1972)に翻訳されているので、具体的なことは省略するが、例えば隋書西突厥伝には「東拒都斤(オチュケン山), 西越金山(アルタイ山), 龜茲・鉄勒・伊吾及西域諸胡悉附之。」とあり、旧唐書西突厥伝には「鉄勒・龜茲及西域諸胡国, 皆帰附之。」とか「自玉門已西諸国皆役属之。」とか「其西域諸国王悉授頡利発(イルテベル, 被支配国の君長にチュルクの可汗から与えられた称号), 并遣吐屯(トドン, 監察官の称号)一人監統之, 督其征賦。」などとある。cf. 松田・小林『中央アジア史』pp. 91—99; 鳴崎『東トウルキスタン』pp. 495—499, 563—572.
- (2) 森安「Dru-gu と Hor」p. 21 & n. 76; 山口『吐蕃王国』p. 650.
- (3) 松田「吐谷渾(下)」pp. 49—60.
- (4) 松田「吐谷渾(下)」pp. 56—59.
- (5) 大谷「安西四鎮」pp. 274—276, 286—290; 曾問吾『支那西域』pp. 216—226; 伊瀬『西域』pp. 178—204; 松田『天山』pp. 360—366, 390—391. 尚, 碎葉鎮が(焉耆鎮にかわって)初めから安西四鎮の一つに入っていたかどうかについては議論があるが、私は入っていなかったとする大谷・松田説に従う。最近では中国の衛江氏や呉震氏が、入っていたと

する説を唱えるが、いずれもその論拠は説得的でない (cf. 衛江「碎葉」p. 8；吳震「告身」pp. 15—16)。

- (6) 唐側から見た阿史那賀魯の反乱と安西都護府の西州退却の経緯については、cf. 大谷「安西四鎮」pp. 277—284；曾問吾『支那西域』pp. 236—240；伊瀬『西域』pp. 201—204；松田『天山』pp. 301—308, 331—333, 341—351, 360. ただし大谷氏は、後の伊瀬氏や松田氏とちがいで、永徽二年(651年)にあったのは安西都護府の「西州への退却」ではなく、すでに一度廃絶していたものの「復置」であるとするが、今は採らない。
- (7) 曾問吾『支那西域』pp. 238—240, 258—264；伊瀬『西域』pp. 207—212, 231. 尚、参考のため、「唐朝保護下の西突厥十姓可汗の系譜」を掲げておく (cf. 松田『天山』pp. 372, 380, etc.；伊瀬『西域』pp. 258—259, 541, etc.)。



- (8) 大谷「安西四鎮」pp. 284—285；曾問吾『支那西域』p. 274.
- (9) 曾問吾『支那西域』pp. 285—287；伊瀬『西域』pp. 232—233.
- (10) 曾問吾『支那西域』pp. 266—272；伊瀬『西域』pp. 231—233.
- (11) 曾問吾『支那西域』pp. 286—287；伊瀬『西域』pp. 233—234.
- (12) 伊瀬『西域』pp. 225—226, 234.
- (13) 松田『天山』pp. 327—328.
- (14) 佐藤『古チ』p. 321. 本稿の本論も参照。
- (15) 松田『天山』p. 364；伊瀬『西域』pp. 247—250, 254.
- (16) 松田『天山』pp. 362—366, 390. ただしこの松田説には種々の異論や饒氏のような慎重論もある。cf. 饒宗頤「碎葉」pp. 628—629, 642.
- (17) cf. Beckwith, "Empire in W.", p. 31.
- (18) 実際にはこの二つの大道は、先の方ではそれぞれ幾つにも分岐する。しかし本稿の行論

には差し支えないので、大まかにとらえておく。ただし一つだけどうしても註記しておかねばならないのは、西廻りルート of 早道ともいべき東カラコルム=ルート (ラダック地方~コータン地方) のことである。これはチベットと西域とを結ぶ最短ルートではあるが、きわめて高地 (峠は 5,000 m 級) を通るため高山病にかかりやすく (死に至る者も多い)、馬は荷を積んだままでは峠を越えられず (その時はヤクに頼るしかない)、その他の地理的条件、気象条件、食糧・飼料・燃料の補給などいずれをとっても、バルチスタン~ギルギットを通るパミール=ルート (峠は 4,000 m 級) にははるかに劣る。それゆえ、急を要する伝令や逃亡者、あるいは平時の小人数の交通には利用されたであろうが、これから戦争をしようとする軍隊の派遣ルートになったとは考えられない。このようなルートを通して送られた兵士や軍馬は、体力の消耗が激しく、すぐには使いものにならなかった筈だからである。従って、本稿で吐蕃軍の西域進出を考察するにあたって、このルートは一応考慮の外に置くことにする。尚、この東カラコルム=ルートとその厳しさについては、次のものを参照せよ。cf. Roerich, George de, *Sur les pistes de l'Asie centrale*, Paris, 1933, pp. 19—26; Minorsky, *HA*, pp. 24—25, 255—256; 酒井「パミールをめぐる交通路」pp. 80—81, 82; Klimburg, “Crossroads”, p. 36.

- (19) Hoffmann, H., “Žaň-žuň, the Holy Language of the Tibetan Bon-po”, *Proceedings of the Twenty-Seventh International Congress of Orientalists*, ed. by D. Sinor, Wiesbaden, 1971, p. 586; 山口「蘇毗」p. 39, n. 39; 山口『吐蕃王国』pp. 247, 264, 358.
- (20) 佐藤『古チ』pp. 122—157; 水谷『西域記』p. 156; Petech, *KL*, pp. 7—9; 山口『吐蕃王国』pp. 227—234, 240. ただしこれら諸氏の説にはかなりの異同があり、女国の正確な位置は未だに決定しない。私のおおよその考えは付録の地図の上に示しておいた。
- (21) Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 149—154; Thomas, *TLTD*, I, pp. 61(n.5), 151, 175—177; 諏訪「漢訳攷」p. 87, n. 10; 榎「難兜国」pp. 182, 185—186, 194; 佐藤『古チ』p. 203, n. 46; Chang Kun, “An Analysis”, p. 149; Bailey, H. W., *Saka Documents. Text Volume*, London, 1968, p. 72; Uray, “A Survey”, p. 283; Jettmar, “Bolor”, 1977, pp. 413, 415, 421, 426, 427, 430—431; Jettmar, “Bolor”, 1980, pp. 120—122. ただしイエットマー氏は、1977 年の論文では大勃律をバルチスタンとする定説を受けていたが、1980 年の論文ではこれに従わず、大勃律の中心はバルチスタンよりむしろアストル Astor 峡谷~チラス地方とみなすべきであると主張する。しかしこの新説は未だ評価が定まっていないし、本稿の行論上にもさして支障はないので、私は従来の説に従っておく。後註 (168) 参照。
- (22) 吐蕃のシャンシェン占領 (併合) の年代を、佐藤氏はソンツェン=ガムポ即位後まもなくのこととするが、ウライ氏は詳細に史料を検討した末に 644 年頃との結論に達した。一方スタン氏は独自に 645 年のこととする。以上に対し、山口氏は 643 年とする新しい考えを示している。cf. 佐藤『古チ』pp. 244—247; Uray, “Notes on a Chronological Problem”, pp. 292—297; スタン『チベット』p. 49; 山口「羊同」p. 88; 山口『吐蕃王国』pp. 388—410. なお Petech, *KL*, p. 9 も参照せよ。

- (23) 本文に引用した記事の後半部分は、シャヴァンヌ・護両氏に従って、「太宗はこれをきき入れたが、その代償として、龜茲以下の五国を西突厥から唐への聘礼として割譲するよう命じた。」と解釈すべきである (cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 32, 59; 護「訳註」pp. 232—233, 272)。こう解釈してはじめて、本文で次に引用する翌年の記事に、「龜茲が(唐に対する)臣礼を浸失し、隣国を侵漁したから、太宗が怒って龜茲討伐軍を送ったのだ」とあるのと脈絡がとれるのである。この点、伊瀬氏の解釈(伊瀬「西域」pp. 192—195)は全く誤っている。
- (24) 山口「蘇毗」pp. 28, 37 (n. 24), 58 (n. 119), 66—67 (n. 132, n. 133); 山口『吐蕃王国』pp. 228, 895—896 (n. 90).
- (25) 山口「白蘭」p. 12; 山口『吐蕃王国』p. 895 (n. 88).
- (26) 山口氏は「蘇毗 = $\overset{\text{ス}}{\text{Sum}}\text{-}\overset{\text{パ}}{\text{pa}}$ 」としてきた従来の定説を全く覆し、白蘭(とくにその中のラン氏 rLangs の国)こそ Sum-pa であり、且つその位置はツアイダムではなく松州(松播)と茂州を結ぶ線の西側であるという新説を立てた。私はこれに従いたい。cf. 山口「白蘭」pp. 1—12; 山口「羊同」p. 86; 山口『吐蕃王国』pp. 345, 714 (n. 114), 868, 912.
- (27) cf. 前註(2).
- (28) 山口『吐蕃王国』pp. 344—347. ただし白蘭の完全征圧は、吐蕃が吐谷渾に本格的な攻撃を加える前の656年のことである(山口『吐蕃王国』p. 686).
- (29) 佐藤『古チ』pp. 247—261.
- (30) 山口「古代チベット史考異」(上)pp. 18, 34—35, (下)pp. 41—47, 60—61, 81—83; 山口『吐蕃王国』pp. 649—685.
- (31) このことは既に後藤勝氏によって指摘されていた。cf. 後藤「南道経営」p. 146.
- (32) 山口『吐蕃王国』pp. 576—618.
- (33) この事件は実際には龍朔二年十二月のことなので、正確に言えば西暦663年の1—2月にあたる。しかし本稿では混乱を避けるため、一貫して中国暦の一年を西暦の一年に機械的に対応させる方針を取っている。また十二支のみで示されたチベットの紀年を西暦に直す場合も同様である。
- (34) *TCTC*・巻201, p. 6333にもほぼ同文あり。*TFYK*の方に「遂以軍資略吐蕃」とあるうちの「略」は、これによって「賂」と訂正した。またシャヴァンヌ氏は*TCTC*の方を引用して、その「以師老」を「將軍(蘇海政)が年老いていたので」と解釈しているが(Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 122), これは全くの誤りで、正しくは「軍隊が疲れていたので」の意である。
- (35) 松田『天山』pp. 324—331.
- (36) 佐藤『古チ』pp. 311—312.
- (37) 山口『吐蕃王国』pp. 686—694; 鈴木「吐谷渾と吐蕃の河西九曲」pp. 49—51.
- (38) 『大正蔵』巻51, p. 976中; 定方「慧超伝」p. 13下。尚、筆者は未見であるが慧超の往五天竺国伝には独訳がある。Fuchs, W., “Huei-ch’ao’s Pilgerreise durch Nordwest-Indien und Zentral-Asien um 726”, *SPAW*, 1938, pp. 426—469.
- (39) 『大正蔵』巻51, p. 977上; 定方「慧超伝」p. 16下.
- (40) 彼がインドからの帰路、パミール地方を越えてクチャに到達したのは727年のことである。cf. 定方「慧超伝」p. 3.

- (41) 榎氏は藤田豊八説をさらに発展させて、勃律(ボロル Bolor)のうちでもより吐蕃に近いバルチスタン(のちの大勃律)が吐蕃に「征服」された時期を、次のツェンポ器弩悉弄(チドゥーソン)の治世初年の頃(670年代後半)とみる。cf. 榎「難兜国」pp. 186—191. ただし「征服」とまでいえるかどうかは疑問である。
- (42) 足立喜六(訳註)『大唐西域求法高僧伝』pp. 12—13, 18, 34; 桑山正進「迦畢試国編年史料稿(下)」, 『仏教芸術』140, 1982, p. 86.
- (43) 岑『質疑』p. 98.
- (44) あるいは先の龍朔二年にすでにコータンへ侵入していた可能性もある。cf. 郭平梁「阿史那忠在西域」p. 187 & n. 1.
- (45) 佐藤『古チ』pp. 316—318.
- (46) *DTH*, p. 33.
- (47) 山口『吐蕃王国』pp. 686—694, 733—737(n. 208, n. 211, n. 212, n. 214)。ただし Ji-ma-gol(khol)を大非川とみる考えを最初に示したのはペテック氏である(cf. Petech, “Glosse”, pp. 250—251)。また *CTS*・巻5, p. 94には「(咸亨元年)(670年)(秋七月)薛仁貴・郭待封至大非川, 為吐蕃大将論欽陵所襲, 大敗, 仁貴等並坐除名。吐谷渾全国盡没。」という表現がある。さらに後註(62)を参照せよ。
- (48) 撥換・鉢換・鉢浣城については、これをヤカ=アリク Yaka-Aryk とみる説, カラ=ユルグン Kara-Yulghun とみる説, アクス Aksu とみる説などがあって、一定しない。cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 8, 353; Pelliot, “La ville de Bakhouân”, pp. 554—556; Pelliot, “Note sur les anciens noms de Kučā”, pp. 128—130; 水谷『西域記』pp. 17—18.
- (49) 伊瀬『西域』pp. 244—245. さらに伊瀬説を敷衍すれば、疏勒が吐蕃と弓月との手に落ちたのは665年以前のこととなるはずである。
- (50) *CTS*・巻40・地理志, p. 1648; *HTS*・巻43下・地理志, p. 1134.
- (51) *CTS*・巻40・地理志・龜茲都督府之条, p. 1648に「本龜茲国, 其王姓白, 理白山之南。」とある。
- (52) 黄文弼氏は「吐蕃之由于闐取龜茲, 陷安西四鎮, 亦必經過鄯善・且末, 方能至于闐, 是鄯善・且末在咸亨中, 已一度陷入吐蕃。」(黄文弼『西北史地論叢』p. 189)というが、これは先程トマス氏の説を批判したのと全く同じ理由から受け入れられない。
- (53) 伊瀬『西域』p. 235; 佐藤『古チ』pp. 326—327.
- (54) 松田『天山』p. 364.
- (55) 伊瀬『西域』pp. 247—250, 254.
- (56) 佐藤『古チ』pp. 327—328.
- (57) これに関連して、675年に書かれた「阿史那忠墓志」が四鎮放棄について一言も触れていないという郭氏の指摘は興味深い。cf. 郭平梁「阿史那忠在西域」p. 190.
- (58) 羽田「沙州・伊州志」pp. 587—588; 森「寿昌地鏡」pp. 313—314; 池田「沙州図経」pp. 45—46, 91, 97. 尚、後藤氏はこれらの改名の理由を、それ以前にすでに吐蕃領となっていたロプ地方を唐が奮回した戦勝記念であるとする(後藤「南道経営」pp. 148—149, 152)が、納得できない。

- (59) Pelliot, "Cha tcheou t'ou king", pp. 115—123; 羽田「沙州・伊州志」 pp. 587—588, 593, 601; 池田「沙州図経」 pp. 53, 81, 91—93, 96.
- (60) 伊瀬『西域』 p. 254.
- (61) 伊瀬氏が上に引用したような結論を引出す根拠となった「是れより吐蕃連歳辺に寇し」〈CTS・吐蕃伝, p. 5223〉の一文は、吐蕃伝の他の箇所と比較すれば、せいぜい小ぜり合い程度の戦闘が続いていたことを示すものとしか受け取れない。そしてこの小ぜり合いでは吐蕃が優位に立っていたのである。
- (62) 前註(47)に引く史料及び以下の諸史料を参照せよ。「〔咸亨元年〕(670年), 師凡十餘萬, 至大非川, 為欽陵所拒, 王師敗績, 遂滅吐谷渾而盡有其地。』〈HTS・卷216上・吐蕃伝, p. 6076〉; 「〔咸亨三年〕(672年)〔二月〕, 吐谷渾故地皆入於吐蕃。』〈TCTC・卷202, p. 6368〉; 「〔咸亨三年二月〕, 其吐谷渾故地, 並没于吐蕃。』〈TFYK・卷170, p. 2052下〉; 「咸亨三年二月, 徙吐谷渾於靈州。其故地皆入於吐蕃。』〈THY・卷94・吐谷渾之条〉
- (63) 本文に引用した上元二年の史料より、于闐王・伏闐雄は吐蕃を破って唐に來降したことが知られる。しかし当時の吐蕃が于闐という一オアシス国家の軍隊に破られる筈はないから、この時の吐蕃軍とは駐留部隊のことであり、主力は既に撤兵していたに違いない。
- (64) Uray, G., "Old Tibetan dra-ma drains", *AOH*, XIV—2, 1962, pp. 219—230.
- (65) 森安「Dru-gu と Hor」 pp. 14—16; Uray, "A Survey", p. 281.
- (66) Khrom について従来さまざまな解釈が行なわれてきたが、最近ウライ氏によって "military government" とする新説が出された。cf. Uray, G., "Khrom: Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7th—9th Centuries", *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson*, Warminster, 1980, pp. 310—318.
- (67) 中華書局本(標点本)の p. 2802 では「儀鳳四年」となっており、p. 2808 の校勘記には「各本で二年となっている原文を旧唐書・卷5・高宗本紀と通鑑・卷202によって改める。」とある。しかし旧唐書・卷5・高宗本紀および通鑑・卷202の当該箇所は、裴行儉がある計略を以って阿史那都支と李遮旬とを捕えたのを儀鳳四年にかけているだけで、この二人が西突厥の衆を率い、吐蕃と連和して安西(四鎮)を犯したのが儀鳳四年であるとはどこにもいっていない。むしろ通鑑の「初」という発語を使つての書き出しは、西突厥と吐蕃の安西への侵入事件が儀鳳四年より前であったことを暗示しているし、まして本文に並べて引用した新唐書と冊府元龜の裴行儉伝には明らかに「儀鳳二年」とあり、また新唐書・卷3・高宗本紀・儀鳳二年之条にも「是歳, 西突厥及吐蕃寇安西。」とあるのであるから、原文に「二年」とあるのをわざわざ「四年」に改める必要は全くない。伊瀬氏や佐藤氏もこの「儀鳳二年」には全然疑いを抱いていない(cf. 伊瀬『西域』 pp. 254—255; 佐藤『古チ』 pp. 330—331)。標点本には珍しい杜撰というべきである。
- (68) この頃までに吐蕃がバルチスタン地方を「征服」していたことについては、前註(41)を見よ。
- (69) 伊瀬『西域』 pp. 246—247.
- (70) 岑『質疑』 p. 104.
- (71) *TFYK*・卷366・将帥部・機略六・裴行儉之条, p. 4355; *CTS*・卷84・裴行儉伝, pp.

- 2802—2803 ; HTS・巻 108・裴行儉伝, pp. 4086—4087 ; Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 74—75 (n. 3) ; 曾問吾『支那西域』 pp. 287—289 ; 護「訳註」 pp. 284—285.
- (72) 松田「碎葉と焉耆」(松田『天山』 pp. 357—391)。
- (73) 例えば、伊瀬『西域』 p. 256 や佐藤『古チ』 p. 333 など。
- (74) ベックウィズ氏は、679年に安西四鎮が吐蕃から唐の手に移ったとする説は根拠がない (nowhere attested in any Chinese source), という。この説には一理ある。しかし同氏はまた、670—692年の22年間安西四鎮はずっと吐蕃側にあったとするシャヴァンヌ氏やトマス氏の説 (cf. Thomas, *TLTD*, I, p. 160) を踏襲しているものであり、それが到底容認できないことは、本論をみれば自ら明らかとなろう。cf. Beckwith, Ch. I., “Review”, *The Tibet Society Bulletin*, 15, 1980, p. 70.
- (75) 「〔永淳元年〕(682年)〔二月〕, 西突厥阿史那車薄帥十姓反。夏四月, (中略), 阿史那車薄困弓月城。安西都護王方翼引軍救之, 破虜衆於伊麗水。斬首千餘級。俄而三姓咽麴與車薄合兵拒方翼。方翼與戰於熱海。(中略)。既而分遣裨將襲車薄・咽麴, 大破之, 擒其酋長三百人, 西突厥遂平。」〈*TCTC*・巻 203, pp. 6407—6409〉。
- (76) もしかしたら唐が安西四鎮すべてを完全に回復するのは、垂拱二年(686年)頃までなかったのかもしれない。饒・衛・呉・中村四氏は垂拱二年(またはその少し前?)に唐軍が安西四鎮を抜いた事実のあったことを指摘する (cf. 饒宗頤「碎葉」 pp. 623—624, 642 ; 衛江「碎葉」 pp. 8—9 ; 呉震「告身」 pp. 13—14 ; 中村「唐公式令(三)」 pp. 103, 106—107)。また伊瀬氏によれば、すでに死去していた初代の興昔亡可汗と継往絶可汗の二代目が唐から冊立されるのは、それぞれ垂拱元年(685年)と垂拱二年(686年)であるという (cf. 伊瀬『西域』 pp. 258—259, 541)。我々はこのことの持つ意味をもう一度考え直す必要があるだろう。
- (77) 佐藤『古チ』 pp. 333—341.
- (78) cf. 前註(75).
- (79) 佐藤『古チ』 p. 333.
- (80) この部分の解釈は山口『吐蕃王国』 p. 881による。尚、ウライ氏はここを“(he) stayed outside (Tibet)”と訳しているが、おそらく“*phyi dalte*”を“*phyi thalte*”と読みかえたのであろう (cf. Uray, “A Survey”, p. 281)。このウライ氏の解釈も十分考慮に値いする。
- (81) 松田『天山』 p. 366.
- (82) 伊瀬『西域』 pp. 256—260.
- (83) 佐藤『古チ』 pp. 345—352.
- (84) 佐藤『古チ』 pp. 346—348. ただし“*Gu-zan = Kūsān = Kuci, Kuča* (亀茲, クチャ)”を証明するには、氏が挙げている史料の他に、なお多くのウイグル文書やイスラム史料などの比較検討を要し、且つまた中央アジア史研究者の間で永年の懸案となっているトカラ語名称問題や焉耆・*Argi-ārši* 同定問題なども絡み、それほど単純なものではない。だが今ここでこの問題に立ち入る余裕はない。これについては後日を期したい。cf. Uray, “A Survey”, p. 281 ; Beckwith, “Empire in W.”, p. 36, n. 23.
- (85) 伊瀬『西域』 pp. 259, 261 ; 佐藤『古チ』 p. 350.
- (86) 佐藤『古チ』 p. 352.

- (87) 佐藤『古チ』p. 352.
- (88) チュルギッシュ可汗・烏質勒の下にいた有力な部将。本名は阿史那キョルナヨル闕 啜。のち烏質勒の死後、その子の娑葛が可汗位を嗣ぐと、これに服せず、謀叛を企てることになる。
- (89) 伊瀬『西域』p. 245.
- (90) 佐藤『古チ』p. 353.
- (91) 『文物』1972—1, 図四九；吳震「告身」図版八。
- (92) 中村「唐公式令(三)」pp. 103, 107.
- (93) cf. Petech, "Tibet", p. 318.
- (94) 岑『質疑』pp. 119—120.
- (95) 突騎施の部長烏質勒が、唐により第二代繼往絶可汗に冊立されていた阿史那斛瑟羅を唐本土に追いやって、実質的にかつての西突厥可汗にとって代わった年代を、松田氏は690年(天授元年)とする(松田『天山』pp. 339, 367—369, 372)。その根拠は示されていないが、おそらくTCTC・巻204・天授元年之条の「西突厥十姓、自垂拱(685—688年)以来為東突厥所侵掠、散亡略盡。濛池都護繼往絶可汗斛瑟羅収其餘衆六七萬人入居内地。」(p. 6469)とか、CTS・巻194下・西突厥伝の「斛瑟羅以部衆削弱、自則天時入朝、不敢還蕃。其地並為烏質勒所併。」(p. 5190)などに拠っているのであろう。結論的には私も氏と同じ見解である。
- (96) 即ちこれらは西突厥の遺衆のうちで最も西方(西南方)にいたもの達だろう。突騎施の勢力もまだここまでは及ばなかったらしい。これに対し、同じ西突厥の遺衆であるが、東北方に位置した処木昆らのグループは新興の突厥第二可汗国(本拠はモンゴリア)の支配下に入っていた。「(聖曆)二年(699年)、默啜立其弟咄悉匐為左廂察、骨咄禄子默矩為右廂察、各主兵馬二萬餘人。又立其子匐俱為小可汗、位在兩察之上、仍主処木昆等十姓兵馬四萬餘人、又號為拓西可汗。」〈CTS・巻194上・突厥伝、pp. 5169—5170〉
- (97) 旧唐書に「又、吐蕃頃年亦冊倭子及僕羅并拔布相次為可汗、亦不能招得十姓、皆自磨滅。」〈CTS・巻97・郭元振伝、p. 3046〉とある。またこれと対応する文がTCTC・巻209, p. 6627にあり、そこに胡三省は「僕羅・倭子、蓋皆吐蕃所立。」と註している。
- (98) チュルク=ウィグル語のソグダク Soydaq 同様、チベット語のソグダク Sog-dag, Sog-gdag をソグド人とみるのは今や定説である。cf. 佐藤『古チ』pp. 355—356; Emmerick, TTK, p. 106; Uray, "A Survey", p. 282.
- (99) Li, "Notes on Tibetan Sog", pp. 139, 141; 佐藤『古チ』pp. 355—356.
- (100) この比定はペテック氏によって提唱され、ウライ氏がこれに従った。Petech, "Glosse", p. 270; Uray, "A Survey", p. 281.
- (101) ガル=タグを捕えたソグド人勢力が、ソグディアナ本国のそれを指すのか、現在のセミレチエや東トルキスタンに散在したそれを指すのか、はたまた唐側に立って戦ったチュルク軍中にいたそれを指すのか、あれこれ推定は出来るが、実際のところは全く不明である。沙州図経によれば、大周天授二年(691年)の時点でもロブ地方のソグド人勢力は、吐蕃ではなくやはり唐の側に立っていたことが窺えるから(cf. Pelliot, "Cha tcheou t'ou king", p. 115; 羽田「沙州・伊州志」p. 601; 池田「沙州図経」p. 81), 694年にガル=タグを捕えたソグド

人がこれである可能性も勿論ある。しかし本稿の流れから見る限りは、この事件が起きた場所はロプ地方よりむしろパミール地方であると考えられる。

(102) Petech, "Glosse", p. 270.

(103) Li, "Notes on Tibetan Sog", pp. 141—142.; 佐藤『古チ』 pp. 354, 358—359; 佐藤「訳註」 p. 115, n. 28.

(104) また恐らく同一人物を指すと思われる「賊頭跋論」がトゥルファン盆地出土の張懷寂墓誌銘の第17行目に現われる。因みにこの墓誌銘からは、張懷寂が王孝傑の軍に従って戦績をあげたこと、その死が長寿二年(693年)五月十一日であることなどが知られる。cf. 黄文弼『吐魯番考古記』(考古学特刊, 3)上海, 1954, pp. 54—55の間の折り込み; 饒宗頤「碎葉」 p. 624.

(105) Thomas, *TLTD*, I, p. 125 & n. 6; 佐藤『古チ』 pp. 321—322; Emmerick, *TTK*, pp. 58—59.

(106) 佐藤氏はガル=ツェンニェン=グントンがコータンを統治し、そこに寺院を建てたりしたのは、次兄チンリンではなく長兄ツェンニャが宰相であった時で、その期間は670—675年の六年間であるという(佐藤『古チ』 p. 322)。しかしこの見解には再考の余地がある。ウライ氏の発表レジュメ(cf. 本稿「はじめに」)では、?マーク付きではあるが、これを686—689年の事件と692年の事件との間に置いている。おそらくその方が正しいであろう。

(107) *TCTC*・巻205・萬歲通天元年一月～三月之条, p. 6504; *CTS*・巻93・婁師徳伝, P. 2976; *TFYK*・巻443・将帥部・敗劔三, p. 5256上; 佐藤『古チ』 pp. 359—362.

(108) 佐藤『古チ』 pp. 362—366. 尚, トマス氏は敦煌編年記に,

bya gagi lo la bab ste /……………/

鳥の年(697年)になって……………

ce dog pan gyi po nya phyag 'tsald /

Ce-dog-panの使者が臣礼を取り(に)来た。

〈*DTH*, p. 18 & p. 38〉

とあるCe-dog-panをカルガリク(朱俱波)に比定したが、大勢からいってこの考えには賛成できない。(cf. Thomas, *TLTD*, II, pp. 256—257). 音韻上からもこの比定には無理があると思われる(cf. 水谷『西域記』 p. 391, n. 1).

(109) Stein, "Mi-ñag", p. 226, n. 4; Stein, *Recherches sur l'épopée et le barde*, p. 213.

(110) 編年記によれば前年(699年)にもツェンポに謁見している。

(111) 700年以降のDru-gu国はフェルガーナに比定してよかろうというウライ説(Uray, "A Survey", p. 281)は全く恣意的で、従うことはできない。

(112) Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 282, n. 2.

(113) 蘇晋仁・蕭鍊子『〈冊府元龜〉吐蕃史料校証』 p. 76はこの「吐蕃」を単に誤りと片付けてしまっているが、それはあまりに皮相的な見方である。

(114) 岩佐『遺稿』 pp. 79—91, 100—106.

(115) コシヨ=ツァイグム碑文(Köl Tegin碑文, 東面, 1. 31; Bilgä Qayan碑文, 東面, II, 24—25) (cf. 小野川「訳註」 pp. 299, 302; Tekin, *GOT*, pp. 235, 243)には,

altī čub soγdaq tapa sülādim(iz), (bodunuy
altī čub soγdaq に向けて我(等)遠征せり、(その民を
anta) buzdum(uz).

そこにて) 我(等)打ち破りたり。

とある。これが701年のことを伝えていることは間違いない (cf. 岩佐『遺稿』 pp. 185—188)。問題は“altī čub soγdaq”であるが、マルクワルト氏はこれを遠くソグディアナの住民(六姓昭武ソグド)と考え、バルトリド・岩佐両氏もこれに従った (cf. 岩佐『遺稿』 pp. 185—187)。しかし近年ソ連のクリヤシトルヌイ氏はこれを唐本土の西北辺にいた「六州胡」の逐語訳であるとみる新説を発表した (cf. S. G. Kljaštornyj, “Sur les colonies sogdiennes de la Haute Asie”, *Ural-Altäische Jahrbücher*, XXXIII, 1—2, 1961, pp. 95—97; 護『古代トルコ』 pp. 569—572)。突厥は701年には唐の西北辺で唐と戦い、703年にはバスマル Basmīl と戦っており、キルギス Qırqız 及びチュルギッシュを攻略したのは漸く710年になってからのことである。そしてこの年にはソグディアナにも侵入した。このような突厥軍の動き、及びコショ=ツアイダム碑文・710年の条のソグディアナは単に“soγdaq”となっていて“altī čub soγdaq”とはなっていないことなどを考え合わせ、私はクリヤシトルヌイ氏の新説に全面的に賛成する。尚、六州胡(六胡州)については、小野川秀美「河曲六州胡の沿革」、『東亜人文学報』1—4, 1942, pp. 193—226; Pulleyblank, E. G., “A Sogdian Colony in Inner Mongolia”, *TP*, XLI, 1952, pp. 317—356; 岑『質疑』 pp. 123—124 をも参照せよ。

(116) 岩佐『遺稿』 pp. 126—128, 165—166.

(117) 岩佐『遺稿』 pp. 187—188.

(118) もしそうだとしたら、この時トン=ヤブグ可汗が通過したルートはパミール方面ではなく河西であったであろう。やや後のことだが、「會吐蕃使間道往突厥，君^{たまたま}率精騎往肅州^{おおう}掩之。」〈CTS・卷103・王君^{たまたま}傳，p. 3191〉、「會吐蕃遣使間道詣突厥，王君^{たまたま}帥精騎^{さえざる}邀之於肅州。」〈TCTC・卷213・開元十五年之条，p. 6780〉とあり、吐蕃の使者が間道を通して突厥に行こうとするのを河西節度使・涼州都督の王君^{たまたま}が防ぎ遮らんとしたことが知られる。河西が全体としては唐の支配下にあったといっても、この地方には砂漠・草原や山岳地帯が多く、少数の使者が騎馬で唐軍の眼をかすめて通過することはそれ程むずかしいことではなかったと思われる。

(119) 尚、これ以後の阿史那倭子(トン=ヤブグ可汗)の動静はつかめない。バルトリド氏は、テルメズに拠ったアラブの叛将ムサー Mūsā の軍が702年 (Barthold, “Tibet”, p. 742a 及び Dunlop, “Arab Relations”, p. 304 では704年となっている)、ハイタル(エフタル)・チベット・チュルクの連合軍七万に攻撃されたというタバリー al-Ṭabarī の記事を引いて、「おそらくこのチュルクの指導者はチベットと同盟した阿史那倭子であろう。」と解釈した (Barthold, “Die alttürkischen Inschriften”, p. 17 = Бартольд, “Древнетюркские надписи”, p. 300)。確かにその可能性はあるが、まだ断定はできない。他方、ベックウィズ氏は“The Tibetan-supported Western Turk Khaghan, A-shi-na T’ui-tzū, was still in or near Ferghāna in 708.” (Beckwith, “Empire in W.”, p. 33 & n. 33) というが、こちらはいささか不可解である。あるいは単なる漢文の誤読に基くものなのか。それにしてもこの箇所に対して氏が註記す

- るのは *TCTC*・巻209, pp. 6625—6628 と *CTS*・巻 97・郭元振伝だけであり、後者の仏訳 (Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 188) には「往年」を“dans ces dernières années”と訳してあるのだから、これを見落としたとも思えない。あるいは何か別の考えがあるのだろうか。
- (120) 佐藤『古チ』pp. 389—413.
- (121) 佐藤『古チ』pp. 398—399.
- (122) Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 179—192 に郭元振伝の全訳あり。本文引用箇所は pp. 185—187 に該当する。
- (123) ただし *CTS*・巻 97・郭元振伝, pp. 3047—3048 及び *TFYK*・巻 366・将帥部・機略六, pp. 4356—4357 にも同内容の記事がある。通鑑を引いたのは日付をはっきりさせるためである。
- (124) 松田『天山』pp. 370—371；岑『質疑』p. 147.
- (125) 佐藤『古チ』pp. 430—431.
- (126) Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 354；戸田「吐谷渾の西藏名」p. 83；佐藤『古チ』p. 253；Hamilton, “Čungul”, p. 359, n. 17. さらに本稿 p. 12 も参照せよ。
- (127) 伊瀬『西域』pp. 269—270.
- (128) 羽田「沙州・伊州志」p. 588.
- (129) 森「寿昌地鏡」p. 314.
- (130) Pelliot, “Cha tcheou t'ou king”, pp. 118—123；羽田「沙州・伊州志」pp. 587—588, 601.
- (131) Mang-yai-chen (*Operational Navigation Chart G—8, 38°21'N—90°10'E*)。ここは連山の切れ目にあたり、西北にウズン=ショル湖 (Uzun Shor Köl), 東南にガス湖 (Ghaz Köl) とそれに連なる大湿地帯を控え、関口氏によれば長城跡までであるらしい。cf. 関口精一『シルクロード詳図』津, 1982, 第3図；中国科学院地理研究所編制『青蔵高原地図 1 : 3000000』。さらに私は、近代の嚙斯口 (cf. 羽田明『中央アジア史研究』京都, 1982, pp. 366, 370) もここに比定すべきではないかと考える。
- (132) 第二回チョーマ記念学会での発表レジュメ (cf. 本稿「はじめに」) 中の地図によると、ウライ氏も私とほぼ同じ考えのようである。また、前田氏の「アルティン=ター南麓の金雁山口附近か」との考え (前田『河西』p. 327) も我々に近い。一方、山口氏は沙州・伊州志の「薩毗城、西北去石城鎮四百八十里」の「西北」は「東北」に改めるべきであると主張する (山口『吐蕃王国』pp. 734—735) が、余程明確な根拠がない限り、原文を故意に変えるべきではない。
- (133) 池田「沙州図経」pp. 39—46.
- (134) 池田「沙州図経」pp. 48, 93, 95.
- (135) 池田「沙州図経」pp. 40—42.
- (136) 岩佐『遺稿』pp. 195—198；松田『天山』pp. 374—375；護『古代トルコ』pp. 195—196；Köl Tegin 碑文, 東面, ll. 35—40 & Bilgä Qayan 碑文, 東面, ll. 26—28 (cf. 小野川「訳註」pp. 300—303, 369—370；Tekin, *GOT*, pp. 269—270, 276)。なお前註 (115) も参照せよ。
- (137) 岩佐『遺稿』pp. 189—191；*CTS*・巻 103, pp. 3187, 3190.

- (138) 岑仲勉氏は「阿了達干^{タルカン}」であるという(岑『質疑』pp. 166—167)。
- (139) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 148—149.
- (140) 前嶋氏は、この時の大食軍の司令官はアミール=クタイバ(畏密屈底波)であるという(前嶋・寺田『中央アジア』p. 86)。
- (141) cf. Dunlop, “Arab Relations”, pp. 304—306.
- (142) シャヴァンヌ氏はアクス Aksu とするが(Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 8, 361), ペリオ氏はウッチ=トゥルファン Uč-Turfan であるという(Pelliot, *TP*, 1931, p. 398)。
- (143) この時の三姓カルルクは唐側に付いている。cf. 伊瀬『西域』pp. 279—281.
- (144) 寺本「地図」pp. 47—48; 『大正蔵』巻50, No.2055, p. 291上.
- (145) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 162—165.
- (146) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 128—129.
- (147) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 129, 168—170.
- (148) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, Notes additionnelles, p. 43, n. 1; Jettmar, “Bolor”, 1977, p. 415.
- (149) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 166—168.
- (150) 山口「羊同」p. 90.
- (151) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 162—165.
- (152) Uray, “A Survey”, p. 283.
- (153) 山口『吐蕃王国』p. 245.
- (154) ベックウィズ氏はこの Qala-i-Panja を Qala Panja と見、さらにそれを Qara Panja と読み換えて、これと黒 Ban-'jag とを同一視する(Beckwith, “Empire in W.”, p. 34)。おもしろい意見ではあるが、即座には賛成しかねる。ちなみに Qara はチュルク語で「黒」の意。
- (155) Bushell, “The Early History of Tibet”, p. 460.
- (156) Pelliot, *Histoire ancienne du Tibet*, pp. 98—99.
- (157) 佐藤「訳註」p. 234; 佐藤「古チ」p. 439.
- (158) 実際、通鑑には「〔開元二年〕(714年)夏四月辛巳、突厥可汗默啜復遣使求婚，自称『乾和永清太駙馬・天上得果報天男・突厥聖天骨咄祿可汗』」(TCTC・巻211, p. 6699)とあって、默啜も骨咄祿と呼ばれる資格の十分あることを示している。この骨咄祿はもともとチュルクの王公貴族の名前や称号の一部によく使われる語 Qutluy「幸ある、幸福な、天寵を持てる、運強き、etc.」の音写であるから、毗伽可汗にもあてはまる可能性は、これまた十分にある。
- (159) 王忠『新唐書吐蕃伝箋證』p. 66.
- (160) 佐藤『古チ』p. 490, n. 27.
- (161) 後に本文でみるように、727年突厥は吐蕃からの対唐同盟の誘いを断わり、逆に唐に誼を通じている。しかし731年の Kōl Tegin の死に際しては、吐蕃から大臣(ロン)が弔問使として突厥に来ているし(cf. Kōl Tegin 碑文, 北面, 1. 12; 小野川「訳註」p. 310; Tekin, *GOT*, pp. 237, 272.: “tüpüt qayanta bölön kälti”=「チベットの可汗よりロン Blon 来れり」), また TCTC・

卷 215・天宝元年 (742 年) 之条, p. 6848 では河西節度使の役割を「断隔吐蕃・突厥」としているのであるから, 史乘に明文がなくとも, 吐蕃と突厥との交渉はかなり頻繁に行なわれたものと推測してよいであろう。

(162) 開元五年 (717 年) 七月に突厥から唐に派遣されてきた使者は次のように言ったという。

「堅昆 (キルギス) 使来及吐蕃使不願入漢, 并奚・契丹等俱知之。」〈TFYK・卷 974・外臣部・褒異, p. 11445 下〉。ただしこの言葉の意味とその背後事情は未だつかみきれないでいる。

(163) 森安「Dru-gu と Hor」pp. 9—10, 13—15.

(164) 岩佐『遺稿』pp. 207—208.

(165) 『大正蔵』p. 977 上・中; 定方「慧超伝」p. 17 下.

(166) 新唐書には, 没謹忙が唐の助力を得て吐蕃を大破したあとにつづけて, 「詔冊為小勃律王。(中略)。没謹忙死, 子難泥立。」〈HTS・卷 221 下・西域伝・勃律之条, p. 6251〉とあり, 冊府元龜には「(開元十九年) (731 年) 冊小勃律国王難泥為其国王。」〈TFYK・卷 964・外臣部・封冊二, p. 11344 下〉とあるから, 726—727 年頃にも彼は在位していたはずである。

(167) 「初勃律王(=没謹忙)来朝, 上^{やしないて}字之為子。」〈TFYK・卷 358・将帥部・立功十一, p. 4245 上〉;
「開元初, 王没謹忙来朝, 玄宗以兒子^{やしなう}畜之。」〈HTS・卷 221 下・西域伝・勃律之条, p. 6251〉。

(168) 伊瀬『西域』pp. 327—328. 関根氏もこれに従う(関根「カシュミール」pp. 102—103)。ただし藤田氏や定方氏のように, 勃律の分裂は 670 年代後半 (cf. 前註 41) のことで, その時ギルギット方面へ逃げた王は没謹忙の父祖であるとみる (cf. 定方「慧超伝」pp. 17 下—18 上) ことも不可能ではない。また秋本氏にもユニークな見解がある(秋本「高仙芝の西征」pp. 18—23) が, 今は論及しない。7 世紀から 8 世紀前半の勃律の歴史, とくにその王統やコータンとの強い結び付きについては新しい史料とそれに基づく研究が続々と公刊されつつある状況であるので, 将来それらが出揃うのを待って, 再検討をしてみたいと考えている。cf. Jettmar, “Bolor”, 1977; ditto, “Bolor”, 1980; Fussman, *JA*, 1983—1・2, pp. 205—206; Hinüber, O. von, “Die Kolophone der Gilgit-Handschriften”, (In: *Studien zur Indologie und Iranistik, Festschrift Paul Thieme*, H. 5/6, ed. by O. von Hinüber & c., Reinbek, 1980) pp. 49—82; ditto, “Die Bedeutung des Handschriftenfundes bei Gilgit”, *ZDMG*, Suppl. Vol., XX I, 1983, pp. 47—66; ditto, “The Paṭola Śāhis of Gilgit — A Forgotten Dynasty”, *Studies in Indo-Asian Art and Culture* (印刷中); Jettmar, K., “Zu den Fundumständen der Gilgit-Manuskripte”, *ZAS*, 15, 1981, pp. 307—322 (未見)。

(169) 伊瀬『西域』p. 311.

(170) 前嶋「タラス」p. 168.

(171) 伊瀬『西域』pp. 351—353; 佐藤『古チ』pp. 449—453.

(172) cf. *CTS*・卷 8・玄宗本紀, p. 191.

(173) このことは, 本文に引用した通鑑の記事の直前にある。また *CTS*・卷 103・王君奭伝, *HTS*・卷 133・同伝, *TFYK*・卷 446・将帥部・生事篇などを見よ。

(174) 羽田「唐ウ」p. 181.

(175) *TCTC*・卷 213・開元十四年之条之末尾や両唐書・西突厥伝・蘇祿之条 (cf. 護「訳註」pp. 255, 293) などを見よ。

- (176) 佐藤『古チ』p. 447.
- (177) 悉諾邏恭祿すなわち *Stag sgra khong lod* とこの時の事件との関わりについては, cf. Demiéville, *CL*, pp. 294—295; 佐藤『古チ』pp. 450—456.
- (178) 「〔開元〕十六年(728年), 春正月壬寅, 安西副大都護趙頤貞敗吐蕃于曲子城。」(TCTC・卷213, p. 6781)とあるから, 西域に入った吐蕃軍が趙頤貞に退けられたのは開元十五年の末のことであろう。莽布支や悉諾邏が常楽県を攻めたのは十五年九月のことであり (cf. TCTC・卷213, pp. 6778—6779), その間, 閏九月・十月・十一月・十二月と約四ヶ月あるから, 吐蕃が安西(クチャ)方面まで軍を進める時間的余裕は十分あったはずである。
- (179) 佐藤『古チ』pp. 457—463.
- (180) これを李侗にあてる説もあるが, 佐藤説に従う。cf. 佐藤『古チ』p. 465; Petech, “Glosse”, p. 265.
- (181) 伊瀬『西域』p. 337.
- (182) 「開元末天宝の初め, 小勃律が吐蕃に完全に羈属したのを転機として, その西北の二十余国が吐蕃の支配下に入ったとあるのも, 畢竟その結果だけを伝えたもので, かかる態勢は護密国をも含めて開元二十一, 二年頃からすでに形成されつつあったと見る事ができるのである。」(伊瀬『西域』p. 345)。
- (183) Bilgä Qayan 碑文, 北面, ll. 9—10 に次のようにある (cf. 小野川「訳註」pp. 285—286; Tekin, *GOT*, pp. 246—247, 280)。

[t]ürgiš qayanqa qizim[in] [……………]

チュルギッシュの可汗に我が娘を ……………

ärtiηü uluy törün idī (or alī) birtim.

甚だ大いなる儀礼もて送り (or 取り) 与えたり, 我。

tür[giš] [qayan] [-iη?] qizim ärtiηü

チュルギッシュの可汗の娘を甚だ

uluy törün oyluma alī birtim.

大いなる儀礼もて我が息子に取り与えたり, 我。

- (184) 佐藤『古チ』pp. 469—471。さらに, 佐藤氏は言及していないが, 『唐丞相曲江張先生文集』卷10に七つある「勅安西節度王斛斯書」の第4・第5・第6(四部叢刊本, pp. 59下—60上)も証拠として挙げるべきであろう。吳廷燮の『唐方鎮年表』によれば, 王斛斯が安西節度使になるのは733年のことであり, 最近三年間に突騎施と攻戦してきて手柄を立てたことを誉める勅書・第6は737年のものであるというから(『唐方鎮年表』北京, 中華書局, 1980, p. 1243), 勅書の第4・第5が736年のことを伝えている可能性は大きい。そしてその第4には「兼聞吐蕃與此賊(=チュルギッシュ)計会。應是要路斥候, 須明事, 必預知動, 即無患耳。」とあり, 第5には「吐蕃與我盟約(733/734年に赤嶺に分界碑を建てたことを指す), 敵血未乾, 已生異心, 遠結凶党(=チュルギッシュ)。」とある。

(185) 佐藤『古チ』pp. 468, 833.

(186) 伊瀬氏はこの三つの紀年を全て信じて, 「すなわち小勃律は, 開元二十二年(734)より二十五年にかけてたえず吐蕃の攻撃をうけ」ていた, と考えている(伊瀬『西域』p. 343)が,

この考えには従えない。

- (187) とくに理由は記さないが、ペテック・山口両氏も同様にみている (cf. Petech, *KL*, p. 10; 山口『吐蕃王国』p. 712)。一方、ベックウィズ氏は本項に列挙した諸史料を、吐蕃はまず 734 年に大勃律を攻破し、736 年に小勃律に攻撃をしかけ、737 年にこれを征圧した、と段階的に解釈した (Beckwith, "Empire in W.", p. 34) が、これは余りに想像をたくましくした結果であろう。氏は *CTS*・巻 198・西戎伝の「勃律国」を大勃律とみなし、さらにこれをブルシャと同一視しているが、これはまことに奇妙である。
- (188) 前嶋「タラス」pp. 166—169.
- (189) 伊瀬『西域』pp. 354—357.
- (190) Gibb, *The Arab Conquests*, pp. 65—85; 前嶋「タラス」pp. 164—176.
- (191) 『大正蔵』巻 50, No. 2061, p. 714 上; 『大正蔵』巻 21, No. 1249, p. 228 中; Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 314; 寺本「地図」p. 64.
- (192) シャヴァンヌ氏は「大石」をアクスとするが (Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 314), ここの「大石」が「大食」と同じであることは「吐漢対照西域地図」からも明らかである。cf. 寺本「地図」p. 76.
- (193) Pelliot, *TP*, 1931, pp. 397—399.
- (194) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 152—154 & map; 曾問吾『支那西域』pp. 311—315 及び付図「魏晋及び隋唐代西域地図」。ただしスタイン氏は高仙芝軍の到達した小勃律国をギルギットではなくヤシンとみ、秋本氏やイエットマー氏もこれを是とする (cf. Stein, *AKh*, pp. 9—11; Stein, *Serindia*, pp. 56—59; 秋本「高仙芝の西征」pp. 23, 25—26; Jettmar, "Bolor", 1980, p. 120)。これは極めて魅力的な説であり (もっとも、この説を最初に唱えたのはスタイン氏ではなく、おそらく清の丁謙であろう。cf. 『浙江図書館叢書』第一集「新旧唐書西域伝地理攷証」28 a), 将来勃律史を再検討する (cf. 前註 168) 際には是非とも考慮せねばならないが、今は小勃律国の中心はギルギットであったとする従来の一般的見解に従っておく。この見解を支持する側には、問題の藤橋(娑夷橋)のあった位置を現在 Alam 橋がある地点とたやすく結び付けられる利点がある。cf. Fussman, G., "Inscriptions de Gilgit", *BEFEO*, 65—1, 1978, pp. 8, 56, pl. 1 (map).
- (195) ペテック氏はこの Kog-yul と Gog (これについては pp. 29—30 に引用した 756 年の条も参照) とを別物と考えているが (Petech, "Glosse", p. 253), これは同じものとみなす方がよいであろう。さらに言えば、ここに Kog-yul (*DTH* による) とあるのは、写真 (*CDT*, Pl. 592) を見る限りは Gog-yul である。
- (196) この byim-po を山口氏は「徴発兵」と訳し (山口『吐蕃王国』p. 244), 王堯氏らは「斥候」とみる (『敦煌』p. 174)。
- (197) シャヴァンヌ氏は Sarhad に比定する (Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 154, note (d)).
- (198) もちろんヤシンあるいはフンザ・ナガル地方の可能性もある。山口氏はブルシャの東方であろうというが (山口「羊同」p. 85; 山口『吐蕃王国』p. 245), 具体性に欠けるので従えない。他方、ベックウィズ氏はこの Gog (Kog) を、本文ですぐ後にみる掲師 (帥) に比定し、これをコクチャ川流域ないし Khwâk 畔周辺とみなしているが (Beckwith, "Empire in W.",

- p. 34), これまた従えない。
- (199) 現行のテキストには誤字・脱字が多い。シャヴァンヌ氏の仏訳や伊瀬氏の解釈なども参照して、最小限の校訂をおこなった。cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 214—215; 伊瀬『西域』pp. 347—348; 関根「カシュミール」p. 112. ただしこのテキストの読み方に関してはシャヴァンヌ氏より伊瀬・関根両氏の方が比較的正確である。
- (200) この「知る」の主語をシャヴァンヌ氏は「羯師」とみている (Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 214) が、私は「吐蕃」とみるべきだと思う。
- (201) 文中の鎮軍とは747年以來の帰仁軍(1,000人→2,000人)を指す。またこの時のカシミールから小勃律への食糧補給路については、Jettmar, “Bolor”, 1977, p. 417に面白い見解がある。これは関根「カシュミール」にはない観点である。
- (202) この「已来」は「～まで」の意。唐代のトゥルファン出土文書「石染典過所」にもこの用法がある。cf. 『文物』1975—7, p. 36.
- (203) Chavannes, *Doc. Turcs*, Notes additionnelles, p. 83, n. 1; Stein, *AKh*, pp. 13—16; Stein, *Serindia*, pp. 28—32; 白鳥庫吉『西域史上の新研究』(同『白鳥庫吉全集』第6巻, 東京, 1970) pp. 109—111; 岑仲勉「羯師與賧彌今地詳考」, 『西突厥史料補闕及考證』pp. 208—214.
- (204) cf. 前註203に引くスタイン説; 秋本「高仙芝の西征」p. 26; Klimburg, “Crossroads”, pp. 26, 32, 34—36; Jettmar, “Bolor”, 1977, p. 416.
- (205) 前嶋「タラス」.
- (206) 松田・小林『中央アジア史』pp. 33—35; 保柳睦美「西域の歴史時代における自然の変動」, 『史苑』28—2, 1968, pp. 1—50; 保柳睦美『シルク・ロード地帯の自然の変遷』(東京, 1976) pp. 34, 43—45, 53—103.
- (207) cf. 前註(59).
- (208) 松田氏が『アジア歴史事典』第5巻(東京, 1960, Repr. 1968) p. 291の「鄯善」の項で、「7世紀後半になると、鄯善地方は青海から進出した新興のチベット勢力(吐蕃)のターリム盆地における前線基地となり、ミーラーンが再生されて、チベット式の屯城が営まれた。」(傍点引用者)というのは、私の考えとは相容れない。
- (209) Stein, *AKh*, I, pp. 62, 428—430, 546.
- (210) Thomsen, “Dr. M. A. Stein’s Manuscripts in Turkish<Runic>Script”, p. 185.
- (211) Stein, *Serindia*, I, pp. 471—473.
- (212) 黄文弼氏はこれを「隋・唐之際」すなわち7世紀前半のものとする(黄文弼『西北史地論叢』p. 188)が、時代錯誤も甚だしい。
- (213) ロブ地方とウィグルとの結び付きについては別に論ずるつもりであるが、しばらくは山田「トルキスタン」pp. 468—480及び森安「ウィグルと敦煌」第一章(とくにpp. 303—304)と第五章を参照。
- (214) Müller, F. W. K., “Zwei Pfahlschriften aus den Turfanfunden”, *APAW*, Phil.-hist. Abh., 1915, Nr.3, 38p., 1 plate; 森安孝夫「ウィグル仏教史史料としての棒杭文書」, 『史学雑誌』83—4, 1974, pp. 38—54.

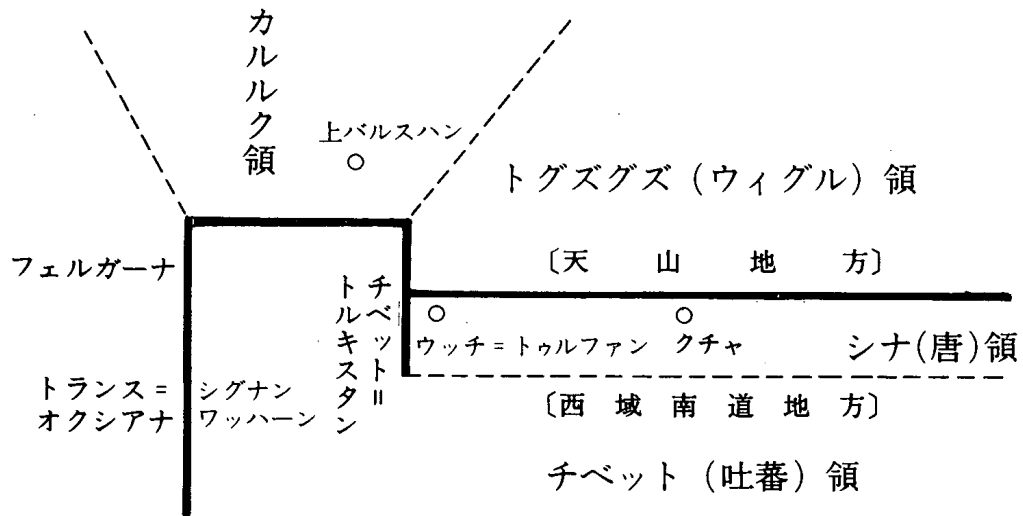
- (215) Bailey, H. W., "Turks in Khotanese Texts", *JRAS*, 1939, 1, pp. 85—91; ditto, "The Seven Princes", *BSOAS*, XIII-3/4, 1948, pp. 616—624; ditto, "A Khotanese Text concerning the Turks in Kantṣou" *AM*, I—1, 1949, pp. 28—52; ditto, "Śrī Viṣṇu Śūra and the Ta-uang", *AM*, XI—1, 1964, pp. 1—26.
- (216) cf. 伊瀬『西域』p. 228.
- (217) cf. Chavannes, *Doc. Turcs*, pp. 44—47, 81—86, 279—299; 曾問吾『支那西域』pp. 294—301; 伊瀬『西域』pp. 300—301; 護「訳註」pp. 257—259; 292—298.
- (218) cf. Pritsak, O., "Von den Karluk zu den Karachaniden", *ZDMG*, 101, 1951, pp. 274—276; 山田「トルキスタン」pp. 480—481; 森安「Dru-gu と Hor」pp. 9—11, 32 (地図).
- (219) 松田・小林『中央アジア史』pp. 33, 35; 榎「仲雲族の牙帳」pp. 95—98; Hamilton, "Čungul", pp. 353—357.
- (220) cf. 松田『天山』pp. 57—58.
- (221) これは既に後藤氏によって指摘されていた。cf. 後藤「南道経営」p. 153.
- (222) 岑参『岑嘉州詩』卷7 (四部叢刊, 初編, 集部) pp. 52—53.
- (223) 聞一多「岑嘉州繫年考證」, 『聞一多全集』丙集・三, 1948, pp. 121—123.
- (224) Chavannes, 1907, p. 546. 前註 (209) も参照のこと。
- (225) Chavannes, 1907, p. 546. シャヴァンヌ氏は唐蕃会盟碑の実例を挙げて、大蕃が吐蕃であることを註記する。さらに同碑には唐側の会盟使の一人として太常卿がみえることにも注意したい (cf. 佐藤『古チ』p. 895)。太常卿の本来の役割は国家の祭祀を司ることである。
- (226) Stein, *AKh*, I, p. 428.
- (227) Stein, *AKh*, II, Pl. XI; 『西域文化研究 第五 中央アジア仏教美術』(京都, 1962) p. 65.
- (228) cf. 井上以智為「唐十道の研究」, 『史林』6—3, 1921, pp. 1—36.
- (229) Stein, *AKh*, I, p. 428.
- (230) Stein, *AKh*, I, p. 428.
- (231) ただし、この学術報告書たる *Ancient Khotan* よりも前に出版された一般向けの本 (Stein, A., *Sand-buried Ruins of Khotan*, London, 1904, pp. 396—398) の中では、スタイン氏自身、「開元七年」と「貞元七年」の両方の読み方ができ、それぞれの場合にかくかくの背景が考えられるという柔軟な態度を取っていた。
- (232) cf. 伊瀬『西域』p. 337. また慧超もすでに「過播蜜川, 即至葱嶺鎮。此即屬漢, 兵馬見今鎮押。」として言及している (cf. 『大正藏』卷51, p. 979上; 定方「慧超伝」pp. 27—28)。
- (233) 本稿は吐蕃の中央アジア (西域) 進出を対象としており、その河西進出について述べる余裕はない。これについては、佐藤『古チ』・伊瀬『西域』・長沢「河西」・前田『河西』などを見よ。
- (234) Hoernle, "Report II", p. 24 & pl.III; Chavannes, 1907, p. 523.
- (235) Chavannes, 1907, pp. 521—524.
- (236) シャヴァンヌ氏は註ではこの原字「𑖀」を「傑」(Kie) であろうとしながらも、本文で

- は「例」(Li)の音で読んでいる。しかしこの字が「傑」の異体字であることは今や明らかである (cf. 藤田豊八「西域研究」, 『東西交渉史の研究 西域篇』東京, 1933, pp. 270—271; 岑「唐史餘瀋」pp. 259—260)。また P. 2704 では「英傑」を, P. 3730 では「地傑人奇」をいうのにこの字を用いている (cf. 那波利貞「唐代社会文化史研究」東京, 1974, p. 587)。
- (237) この文書の解読にあたっては池田温氏の御教示を迎いだ。記して感謝する。ただし細部の解釈は全て筆者の責任においてなされた。
- (238) cf. 菊池英夫「西域出土文書を通じてみたる唐玄宗時代における府兵制の運用 (上)」, 『東洋学報』52—3, 1969, pp. 37—38, n. 10.
- (239) cf. 菊池, 同上; 「悟空入竺記」, 『大正蔵』巻51, p. 980下。
- (240) Hoernle, “Report II”, p. 24.
- (241) Chavannes, 1907, p. 524.
- (242) 「信」を署名とする考えはすでに井ノ口氏によって出されている (井ノ口「Viśa 王家」p. 42, n. 42)。
- (243) そのような実例は敦煌文書中に無数にある。
- (244) Hoernle, “Report II”, p. 22.
- (245) ハロウン氏の六城に対する註はおおむね妥当であるが, 六城管下にあった傑謝鎮をダンダン=ウィリクそのものとみているのは頷けない。cf. Bailey, *KT*, IV, Appendix: Chinese Texts tr. by G. Haloun, pp. 176—177.
- (246) 「王姓裴氏, 自號阿摩支, 居迦師城。」〈*HTS*・巻221上, p. 6233〉
- (247) 「(開元)十六年正月, 封于闐阿摩支知王事右武衛大將軍員外置同正員上柱国尉遲伏師為于闐王。(中略)。又封疎(勒)阿摩支裴安之為疎勒国王。(中略)。咨爾疎勒阿摩支知王事左武衛將軍員外置裴安之(後略)。」〈*TFYK*・巻964, p. 11344下〉
- (248) Thomas, *TLTD*, I, p. 126.
- (249) Emmerick, *TTK*, pp. 58—59; 佐藤「古チ」p. 378. 本書はコータン語の原文からチベット語に翻訳・増訂されたものらしい (cf. 寺本「于闐国史」pp. 67—68)。
- (250) Thomas, *TLTD*, II, p. 191; Bailey, H. W., “Kaṇaiska”, *JRAS*, 1942, 1, p. 26; Bailey, *KT*, IV, p. 62.
- (251) シャヴァンヌ氏は「信」を手紙に権威を持たせるための印やサインのようなものと考えて, 尉遲信というひとまとまりの姓名であるとは考えなかった (Chavannes, 1907, p. 524)。尚, 尉遲曜なる人物については, *CTS*・巻144・尉遲勝伝及び「悟空入竺記」(cf. 前註239), さらに Chavannes, *Doc. Turcs*, p. 311 を見よ。
- (252) 例えば *CTS*・巻195・廻紇伝, p. 5196 などを見よ。
- (253) *CTS*・巻5, p. 100; *HTS*・巻221上・西域伝・于闐之条, p. 6235; *TFYK*・巻964・外臣部・封冊二, p. 11341上
- (254) *HTS*・巻43下・地理志, p. 1134.
- (255) このダンダン=ウィリク出土文書は寺本氏も引用・解説しているが, 氏の解釈は余りに強引すぎて, 私は到底これを認めることが出来ない。cf. 寺本「于闐国史」pp. 156—158.
- (256) 768年のダンダン=ウィリク地方において既にこのような状況にあったとすれば, ここ

よりずっと東方のエンデレは少なくともこの時点では吐蕃の手に落ちていた可能性が高くなる。だとすると、先に「開元」か「貞元」かで迷ったエンデレの寺院址に残された落書きの紀年は、やはり「開元」とすべきかとも思われる。しかしまだ決して断定はできない。というのは、大暦十六年(781年)及び建中七年(786年)(ただし唐本土では大暦の年号は十四年まで、建中の年号は四年までしか使われなかった)の紀年を持つ別の文書には六城や傑謝鎮の名が見え、ここに再び彼の地の百姓が日常的・平和的生活を送っていたことが知られるからである(cf. Chavannes, 1907, pp. 525—526, No.3 & No.4)。また建中七年の紀年を持つマザール=ターク出土の書記の手習い文書と覚しきものの中に「使節度副使開府太常卿蘇」という文字が見えていることも、秦嘉興が太常卿であったことと関連して、注意さるべきである(cf. Chavannes, *Les documents chinois*, p. 217)。

- (257) cf. 『元和郡縣図志』巻40；田坂「西北」pp. 197—198；長沢「河西」；前田『河西』pp. 193—194.
- (258) Chavannes, 1907, part 1.
- (259) Maspero, *Les documents chinois de la troisième expédition*, p. 186, No.449 & No. 448.
- (260) Maspero, *op. cit.*, pp. 187—188, No.456. 但し、マスペロ氏の仏訳では790年を誤って632年としている。貞元を貞観と取り違えたからである。
- (261) 「悟空入竺記」, 『大正蔵』巻51, p. 980下.
- (262) cf. 菊池「隋・唐王朝支配期の河西と敦煌」pp. 186—193.
- (263) 山口「吐蕃支配時代」pp. 197—198.
- (264) cf. 後註(271)に引用する拙稿.
- (265) cf. 田坂「西北」p. 198, n. 3；佐藤『古チ』pp. 652—655.
- (266) cf. Thomas, *TLTD*, II.
- (267) cf. Stein, *Serindia*, pp. 1288—1289. また、トマス氏はミーラン出土のチベット語文書を8世紀前半のもの、マザール=ターク出土のチベット語文書をそれより約一世代おくれるものとみなしたが(Thomas, *TLTD*, II, pp. 271—272), 氏のこの推定は結果的には私が本稿で述べてきた吐蕃のロプ地方及びコータン地方への進出の過程と年代におおむね合致する。
- (268) Thomas, *TLTD*, II, pp. 184—185, 198—199, 213, 313—314.
- (269) 789年の段階でも「安西道」が存在したことは「悟空入竺記」の記事より明らかである(cf. 『大正蔵』巻51, p. 981上)。この「悟空入竺記」には仏訳もあるが、肝心なところが誤っている(cf. Sylvain Lévi & Ed. Chavannes, “L’itinéraire d’Ou-k’ong (751—790)”, *JA*, sept.-oct. 1895, pp. 365—366)。
- (270) これに関連してフランケ氏は次のように述べている。“Then the Chinese and Tibetans were united against a rebel in Sze-chuan. As the Chinese had treated the Tibetans like barbarians, there was again war between them, and the Tibetans conquered Turkestan. The Tibetan inscription at Endere (see M. A. Stein, *Ancient Khotan*, p. 569, Tibetan sgraffiti) may refer to that war.” (Francke, *The Chronicles of Ladakh*, p. 88, note).

- (271) 森安孝夫「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」、『アジア文化史論叢 3』東京，1979，pp. 199—238；Moriyasu, T., “Qui des Ouigours ou des Tibétains ont gagné en 789—792 à Beš-balīq?”, *JA*, 1981, pp. 193—205. 因みに、イタリアのルビナッチ氏はペテック氏らの後をうけ、イドリーシーその他のイスラム地理書にみえるチベットの西北境を考証し、その結果を次のように(作図は筆者)まとめ、且つそれが吐蕃王国の絶頂期である780—840年頃の情勢を反映したもの、との結論に達した。これまた「北庭争奪戦」及びその後の西域情勢を考える上で大変興味深いものである。cf. Rubinacci, “Il Tibet nella Geografia d’Idrisi”, pp. 205—206.



- (272) 吐蕃の河西支配については関係文献が余りにも多いのでいちいち挙げない (cf. 前註 233)。一方、吐蕃のパミール地方(とくにその南部)支配が810年代までは確実に、そして恐らくは10世紀くらいまで続いたであろうことについては、cf. Михайлова. “Новые эпиграфические данные”, pp. 16—18; Jettmar, “Bolor”, 1977, pp. 421—423; Beckwith, “Empire in W.”, p.35 & n.76.

- (273) 「吐蕃の中央アジア進出」の動機としては、経済的理由をはじめとして色々考えられるが、ベックウィズ氏がおもしろい見方をしているので参照せよ。cf. Beckwith, “Empire in W.”, pp. 30—31.

文献目録

(漢文史料及び欧文雑誌の略号も含む)

AM = *Asia Major*, New Series.

AOH = *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*.

APAW = *Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, Phil.-hist. Klasse.

Bailey, *KT*, IV = Bailey, H. W., *Indo-Scythian Studies, being Khotanese Texts*, vol. IV (Saka Texts from Khotan in the Hedin Collection), Cambridge, 1961 (Repr. 1979), viii + 192p., 2 plates.

Barthold, W., “Die alttürkischen Inschriften und die arabischen Quellen”, (In: W. Radloff,

- Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, Zweite Folge, St.-Petersbourg, 1899), 29p.
-, "Tibet", *Encyclopaedia of Islam*, vol.4, 1934, pp. 741—743.
-, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, Third Edition, London, 1968, xxxii + 573p., 1 map.
- Бартольд, В. В., "Древнетюркские надписи и арабские источники", В. В. Бартольд Сочинения, V, Москва, 1968, pp. 284—311.
- Beckwith, Ch. I., "Tibet and the Early Medieval Florissance in Eurasia. A Preliminary Note on the Economic History of the Tibetan Empire", *CAJ*, 21, 1977, pp. 89—104.
-, "Empire in W." = "The Tibetan Empire in the West", (In: Michael Aris & Aung San Suu Kyi, ed., *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson = Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies, Oxford 1979*, Warminster, 1980), pp. 30—38.
- BEFEO* = *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient*.
- BSOAS* = *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*.
- Bushell, S. W., "The Early History of Tibet", *JRAS*, New Series, vol. XII, 1880, pp. 435—541.
- CAJ* = *Central Asiatic Journal*.
- CDT* = Spanien, A. & Imaeda, Y., *Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale*, II, Paris, 1979.
- Chang Kun, "An Analysis of the Tun-huang Tibetan Annals", *Journal of Oriental Studies* (東方文化), V, 1959/1960, pp. 122—173.
- Chavannes, *Doc. Turcs* = Chavannes, Ed., *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux*, Taipei, 1969 (Orig. ed., St.-Petersbourg, 1903), iv + 378 + 110p., 1 map.
- Chavannes, 1907 = ditto, "Chinese Documents from the Sites of Dandān-Uiliq, Niya and Endere", (In: Aurel Stein, *Ancient Khotan*, I, Oxford, 1907), pp. 521—547.
- Chavannes, Ed., *Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan Oriental*, Oxford, 1913, xxiii + 232p., many plates.
- CTS* = *Chiu T'ang-shu* 舊唐書, 中華書局版, 全 16 冊, 北京, 1975.
- Demiéville, *CL* = Demiéville, P., *Le concile de Lhasa*, Paris, 1952, viii + 399p., 32 plates.
- DTH* = Bacot, J. & Thomas, F. W. & Toussaint, Ch., *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, Paris, 1940, 206p., 2 plates.
- Dunlop, D. M., "Arab Relations with Tibet in the 8th and Early 9th Centuries A. D.", *İslâm Tetkikleri Enstitüsü Dergisi*, V, 1—4, 1973, pp. 301—318.
- Emmerick, *TTK* = Emmerick, R. E., *Tibetan Texts concerning Khotan*, London, 1967, xiii + 160p.
- Francke, A. H., *The Chronicles of Ladakh and Minor Chronicles*, (Antiquities of Indian Tibet, vol. II), Calcutta, 1926.
- Gibb, H. A. R., *The Arab Conquests in Central Asia*, New York, 1923 (Repr. 1970), viii + 102p.
- Hamilton, "Čungul" = Hamilton, J., "Le pays des Tchong-yun, Čungul, ou Cumuda au X^e

- siècle”, *JA*, 1977, pp. 351—379, 1 map.
- Hoernle, “Report II”=Hoernle, A. F. R., “A Report on the British Collection of Antiquities from Central Asia, Part II”, Calcutta, 1902 (Extr.: *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, LXX, 1901), 55+31+7p., 13 facs. plates, 3 tables.
- Hoffmann, H., “Die Qarluq in der tibetischen Literatur”, *Oriens*, III, 1950, pp. 190—208.
 ……………, “Tibets Eintritt in die Universalgeschichte”, *Saeculum*, I, 1950, pp. 258—279, 1 map.
- HTS=*Hsin T'ang-shu* 新唐書, 中華書局版, 全20冊, 北京, 1975.
- JA*=*Journal Asiatique*.
- Jettmar, K., “Bolor—A Contribution to the Political and Ethnic Geography of North Pakistan”, *ZAS*, 11, 1977, pp. 411—448, 1 map.
 ……………, “Bolor—Zum Stand des Problems”, *ZAS*, 14—2, 1980, pp. 115—132, 1 map, 3 plates.
- JRAS*=*Journal of the Royal Asiatic Society*.
- Klimburg, “Crossroads”=Klimburg, M., “The Setting: The Trans-Himalayan Crossroads”, (In: Klimburg-Salter, D. E., ed., *The Silk Route and the Diamond Path: Esoteric Buddhist Art on the Trade Routes*, Los Angeles, 1982), pp. 25—37, 3 maps.
- Li Fang-kuei, “Notes on Tibetan Sog”, *CAJ*, III, 1958, pp. 139—142.
- Marks, T. A., “Nanchao and Tibet in Southwestern China and Central Asia”, *The Tibet Journal*, III—4, 1978, pp. 3—26.
- Maspero, H., *Les documents chinois de la troisième expédition de Sir Aurel Stein en Asie Centrale*, London, 1953, xii + 268p., 40 plates.
- Minorsky, HA=Minorsky, V., *Hudūd al-‘Ālam, The Regions of the World*, Second Edition, London, 1970 (Orig. ed., 1937), lxxxiii + 524p., 12 maps.
- Михайлова, А. И., “Новые эпиграфические данные для истории Средней Азии IX в.”, *Эпиграфика Востока*, V, 1951, pp. 10—20.
- Pelliot, P., “La ville de Bakhouân dans la géographie d’Idriçi”, *TP*, 1906, pp. 553—556.
- Pelliot, “Cha tcheou t’ou king”=Pelliot, P., “Le<Cha tcheou tou tou fou t’ou king>et la colonie sogdienne de la région du Lob Nor”, *JA*, jan.-fév. 1916, pp. 111—123.
 ……………, “Note sur les anciens noms de Kučā, d’Aqsu et d’Uč-Turfan”, *TP*, 1923, pp. 126—132.
 ……………, “Bibliographie: Arthur Waley, *A Catalogue of Paintings recovered from Tun-huang by Sir Aurel Stein*”, *TP*, 1931, pp. 383—413.
 ……………, *Histoire ancienne du Tibet*, Paris, 1961, ii + 169p.
- Petech, L., “Il Tibet nella Geografia Musulmana”, *Rendiconti della Classe di Scienze morali, storiche e filologiche dell’Accademia Nazionale dei Lincei*, Ser.III, vol.II, 1—2, 1947, pp. 55—70.
 ……………, “Tibet”, (In: *Handbuch der Orientalistik*, Erste Abt., V. Bd., 5. Abschn.: Geschichte

- Mittelasiens, Leiden/Köln, 1966), pp. 311—347.
-, “Glosse agli *Annali* di Tun-huang”, *Rivista degli Studi Orientali*, XLII, 1967, pp. 241—279.
-, *KL* = ditto, *The Kingdom of Ladakh*, Roma, 1977, xii + 191p.
- Pritsak, O., “Von den Karluk zu den Karachaniden”, *ZDMG*, C I, 1951, pp. 270—300.
- Rubinacci, R., “Il Tibet nella Geografia d’Idrisi”, (In: *Gururājamañjarikā. Studi in Onore di Giuseppe Tucci*, vol. I, Napoli, 1974), pp. 195—220, 2 plates.
- Samolin, W., *East Turkistan to the Twelfth Century*, The Hague, 1964, 100 p., 1 map.
- SPAW* = *Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, Phil.-hist. Klasse.
- Stein, *AKh* = Stein, Aurel, *Ancient Khotan*, 2 vols., Oxford, 1907. (Repr., New York, 1975), many plates, 1 map.
- Stein, Aurel, *Serindia*, 5 vols., Oxford, 1921, many figures, many plates, many maps.
- Stein, Rolf A., “Mi-ñag et Si-hia, géographie historique et légendes ancestrales”, *BEFEO*, XLIV, 1951, pp. 223—265.
-, *Recherches sur l’épopée et le barde au Tibet*, Paris, 1959, xi + 646p., 1 plate, 1 map.
- TCTC* = *Tzū-chih t’ung-chien* 資治通鑑, 中華書局版, 全 20 冊, 北京, 1976 (Orig., 古籍出版社版, 全 10 冊, 北京, 1956).
- Tekin, *GOT* = Tekin, T., *A Grammar of Orkhon Turkic*, Bloomington, 1968, ix + 419p.
- TFYK* = *Ts’ê-fu yüan-kuei* 冊府元龜, 中華書局版, 全 12 冊, 北京, 1960 (Repr., 台湾中華書局版, 全 20 冊, 台北, 1972).
- Thomas, *TLTD* = Thomas, F. W., *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*, 4 vols. (Part I—Part IV), London, 1935—1963, 20 plates.
- Thomsen, V., “Dr. M. A. Stein’s Manuscripts in Turkish<Runic>Script from Miran and Tun-huang”, *JRAS*, 1912, pp. 181—227, 3 plates.
- THY* = *T’ang hui-yao* 唐會要.
- TP* = *T’oung Pao*.
- Uray, G., “Notes on a Chronological Problem in the *Old Tibetan Chronicle*”, *AOH*, XXI—3, 1968, pp. 289—299.
- Uray, “A Survey” = Uray, G., “The Old Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 A.D.: A Survey”, (In: Harmatta, J., ed., *Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest, 1979), pp. 275—304.
- ZAS* = *Zentral-asiatische Studien*.
- ZDMG* = *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*.
- 秋本太二「高仙芝の西征——特に其の小勃律征討に就いて——」, 『京城帝国大学史学会誌』15, 1939, pp. 13—32.

- 足立喜六(訳註)『大唐西域求法高僧伝』東京, 1942, 6 + 254 + 14 p., 1 map.
- 池田「沙州図経」=池田温「沙州図経略考」, 『榎博士還暦記念東洋史論叢』東京, 1975, pp. 31—101.
- 伊瀬『西域』=伊瀬仙太郎『中国西域経営史研究』東京, 1968 (Orig. ed., 『西域経営史の研究』東京, 1955), 3 + 3 + 4 + 563 + 14 + 14 p., 1 map.
- 井ノ口泰淳「ウテン語資料による Viša 王家の系譜と年代」, 『龍谷大学論集』364, 1960, pp. 27—43.
- 岩佐「遺稿」=岩佐精一郎『岩佐精一郎遺稿』東京, 1936 (「突厥の復興に就いて」pp. 77—167; 「突厥毗伽可汗碑文の紀年」pp. 169—209.)
- 衛江「碎葉」=衛江「碎葉是中国唐代西部重鎮」, 『文物』1975—8, pp. 7—12, 2 figures.
- 榎一雄「難兜国に就いての考」, 『加藤博士還暦記念東洋史集説』東京, 1941, pp. 179—199. ……………, 「仲雲族の牙帳の所在地について」, 『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』東京, 1964, pp. 89—102.
- 大谷勝真「安西四鎮の建置とその異同に就いて」, 『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』東京, 1925, pp. 271—292.
- 王治来『中亞史』第一卷, 北京, 1980, 3 + 2 + 278 p.
- 王忠『新唐書吐蕃伝箋證』北京, 1958, 166 p.
- 王輔仁・索文清『藏族史要』成都, 1980, 3 + 1 + 270 p., 4 plates.
- 小野川「訳註」=小野川秀美「突厥碑文訳註」, 『滿蒙史論叢』第四, 1943, pp. 249—425.
- 郭平梁「阿史那忠在西域——〈阿史那忠墓志〉有関部分考釈」, 『新疆歴史論文続集』1980, pp. 182—193.
- 菊池英夫「隋・唐王朝支配期の河西と敦煌」, 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』東京, 1980, pp. 99—194.
- 黄文弼『西北史地論叢』上海, 1981 (「古楼蘭国歴史及其在西域交通上之地位」pp. 173—209, 1 map).
- 呉震「告身」=呉震「從吐魯番出土“汜德達告身”談唐碎葉鎮城」, 『文物』1975—8, pp. 13—17.
- 後藤「南道経営」=後藤勝「唐朝の西域南道経営」, 東京教育大学東洋史学研究室(編)『東洋史学論集』第三, 東京, 1954, pp. 141—156.
- 酒井敏明「パミールをめぐる交通路」, 『史林』45—5, 1962, pp. 63—88, 3 maps.
- 定方「慧超伝」=定方晟「慧超往五天竺国伝 和訳」, 『東海大学文学部紀要』16, 1971, pp. 2—30.
- 佐藤『古チ』=佐藤長『古代チベット史研究(上・下)』2巻, 京都, 1958—1959 (Repr. 1977), 1 map.
- 佐藤「訳註」=佐藤長「吐蕃伝」, 『騎馬民族史 3 正史北狄伝』東京, 1973, pp. 103—291, 1 map.
- 佐藤長「チベット民族の統一とラマ教の成立」, 『岩波講座 世界歴史 6』東京, 1971, pp. 491—520.
- 嶋崎昌『隋唐時代の東トウルキスタン研究』東京, 1977, 23 + 583 + 36 p.
- 饒宗頤「碎葉」=饒宗頤「李白出生地——碎葉」, 同氏『選堂集林 史林 中』台北, 1982, pp.

614—655.

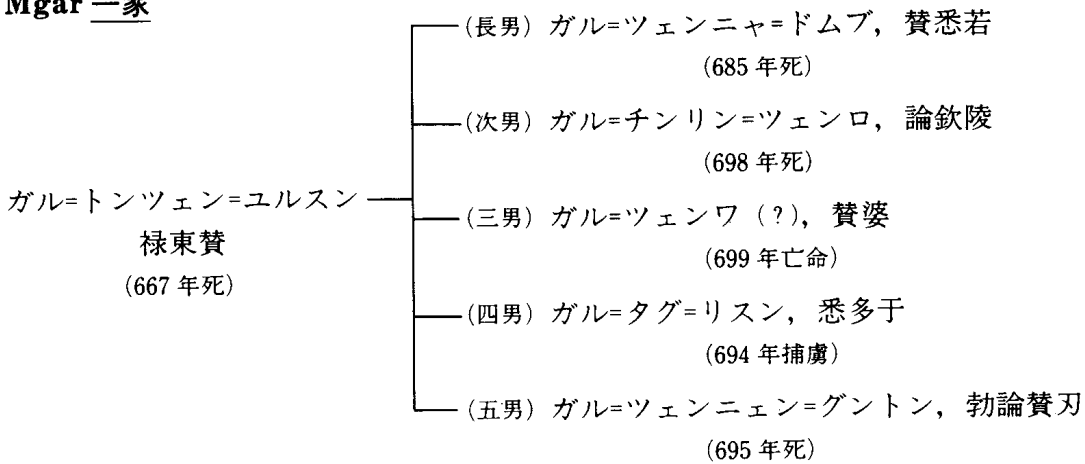
- 岑仲勉『西突厥史料補闕及考證』Repr. 京都, 1972, 2 + 2 + 256 p.
- 岑『質疑』=岑仲勉『通鑑隋唐紀比事質疑』香港, 1977, 2 + 24 + 402 p.
- 岑仲勉『唐史餘瀋』上海, 1979 (Orig. ed., 1960), 1 + 7 + 278 p.
- 鈴木隆一「吐谷渾と吐蕃の河西九曲」, 『史観』108, 1983, pp. 47—59, 1 map.
- R. A. スタン (著), 山口瑞鳳・定方晟 (共訳)『チベットの文化』東京, 1971, xii + 346 + 38 p. (原本: Stein, R. A., *La civilisation tibétaine*, Paris, 1962)
- 諏訪義讓『于闐国懸記』漢訳攷, 『支那仏教史学』1—4, 1937, pp. 79—88.
- 関根秋雄「カシュミールと唐・吐蕃抗争——とくに小勃律国をめぐる——」, 『中央大学文学部紀要 史学科』23, 1978, pp. 99—118.
- 蘇晋仁・蕭鍊子『《冊府元龜》吐蕃史料校證』成都, 1981, 7 + 4 + 394 p.
- 曾問吾『支那西域』=曾問吾 (原著), 野見山温 (訳補)『支那西域經綸史 (上)』京都, 1945, 42 + 10 + 530 p., 3 maps.
- 『大正蔵』=『大正新脩大蔵経』
- 田坂「西北」=田坂興道「中唐に於ける西北辺疆の情勢に就いて」, 『東方学報 (東京)』11—2, 1940, pp. 171—211.
- 陳燮章・索文清・陳乃文 (編)『蔵族史料集 (一)』成都, 1982, 2 + 569 p.
- 寺本「地図」=寺本婉雅「我が国史と吐蕃との関係」, 『大谷学報』12—4, 1931, pp. 44—83, 2 plates.
- 寺本『于闐国史』=寺本婉雅『于闐国仏教史の研究』東京, 1974 (Orig. ed., 『于闐国史』1921), 3 + 10 + 171 p., 2 plates.
- 戸田茂喜「吐谷渾の西藏名と支那史伝」, 『東洋学報』27—1, 1938, pp. 63—104.
- 『敦歴』=王堯・陳踐 (訳註)『敦煌本吐蕃歴史文書』北京, 1980, 276 p., 4 plates.
- 中村「唐公式令 (三)」=中村裕一「唐代告身四種と制書について——唐公式令研究 (三) ——」, 『大手前女子大学論集』10, 1976, pp. 93—170, 6 plates.
- 長沢「河西」=長沢和俊「吐蕃の河西進出と東西交通」, 『史観』47, 1956, pp. 71—81.
- 羽田「唐ウ」=羽田亨「唐代回鶻史の研究」, 『羽田博士史学論文集 上巻 歴史篇』京都, 1957, pp. 157—324.
- 羽田「沙州・伊州志」=羽田亨「唐光啓元年書写沙州・伊州地志残巻に就いて」, 同上書, pp. 585—605.
- 前嶋「タラス」=前嶋信次「タラス戦考」, 同氏『東西文化交流の諸相』東京, 1971, pp. 129—200.
- 前嶋信次・寺田穎男『中央アジアの過去と現在』東京, 1942, 14 + 403 + 30 p., 6 plates, 1 map.
- 前田『河西』=前田正名『河西の歴史地理学的研究』東京, 1964, 27 + 689 + 28 p., many maps.
- 松田壽男「吐谷渾遣使考 (下・完)」, 『史学雑誌』48—12, 1937, pp. 37—71.
- 松田『天山』=松田壽男『古代天山の歴史地理学的研究 (増補版)』東京, 1970 (Orig. ed., 1956), 5 + 6 + 534 p., 3 maps.
- 松田・小林『中央アジア史』=松田壽男・小林元・木村日紀『中央アジア史・印度史』(世界歴史大系・10) 東京, 1936 (Orig. ed., 1935), 10 + 643 p., many plates.

- 水谷『西域記』=水谷真成(訳註)『大唐西域記』東京, 1971, 15+463+5 p., many figures, 1 map.
- 森「寿昌地鏡」=森鹿三「新出敦煌石室遺書特に寿昌県地鏡について」, 同氏『東洋学研究 歴史地理篇』京都, 1970, pp. 309—324.
- 護『古代トルコ』=護雅夫『古代トルコ民族史研究 I』東京, 1967, 16+656+25 p.
- 護「訳註」=護雅夫「西突厥伝」, 『騎馬民族史 2 正史北狄伝』東京, 1972, pp. 189—298.
- 森安「Dru-gu と Hor」=森安孝夫「チベット語史料中に現われる北方民族——Dru-gu と Hor——」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』14, 1977, pp. 1—48.
- 森安孝夫「ウイグルと敦煌」, 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』東京, 1980, pp. 297—338.
- 山口瑞鳳「古代チベット史考異(上)(下)」, 『東洋学報』49—3, 49—4, 1966—1967, pp. 1—39 (=pp. 279—317), pp. 40—96 (=pp. 466—522).
- 山口「蘇毗」=山口瑞鳳「蘇毗の領界」, 『東洋学報』50—4, 1968, pp. 1—69.
- 山口「白蘭」=同氏「白蘭と Sum pa の rLañs 氏」, 『東洋学報』52—1, 1969, pp. 1—61.
- 山口「羊同」=同氏「吐蕃」の国号と「羊同」の位置」, 『東洋学報』58—3・4, 1977, pp. 55—95.
- 山口瑞鳳「吐蕃支配時代」, 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』東京, 1980, pp. 195—232.
- 山口『吐蕃王国』=同氏『吐蕃王国成立史研究』東京, 1983, xxviii+915+60 p., 3 maps.
- 山田「トルキスタン」=山田信夫「トルキスタンの成立」, 『岩波講座 世界歴史 6』東京, 1971, pp. 463—490.

チベット文字転写表

ka	kha	ga	nga
ca	cha	ja	nya
ta	tha	da	na
pa	pha	ba	ma
tsa	tsha	dza	va
zha	za	'a	ya
ra	la	sha	sa
ha	a		

^ガ^ル
Mgar 一家



吐蕃王統表

I. Srong btsan sgam po, ソンツェン=ガムポ

(在位 6世紀末—649年, 途中で一度退位)

I'. Gung sron gung btsan, グンソン=グンツェン

(在位 638?—643年) (文成公主ははじめこれに降嫁したが, 死去したため, その父のソンツェン=ガムポと結婚)

II. Mang srong mang btsan, マンソン=マンツェン (=Mang slon mang brtsan, マンルン=マンツェン)

(在位 650—676年)

III. Khri 'dus srong, チ=ドゥーソン, 器弩悉弄

(在位 676—704年)

IV. Khri lde gtsug brtsan, チデ=ツクツェン, 棄隸縮賛

(在位 704—754年)

V. Khri srong lde btsan, チソン=デツェン, 乞黎蘇籠獵賛

(在位 755—796年)

VI. Mu ne btsan po, ムネ=ツェンポ

(在位 796—798年)

VII. Khri lde srong btsan, チデ=ソンツェン

(在位 798—815年) (798—804年は Sad na legs セナレクの別名で呼ばれる)

VIII. Khri gtsug lde btsan, チツク=デツェン, 可黎可足

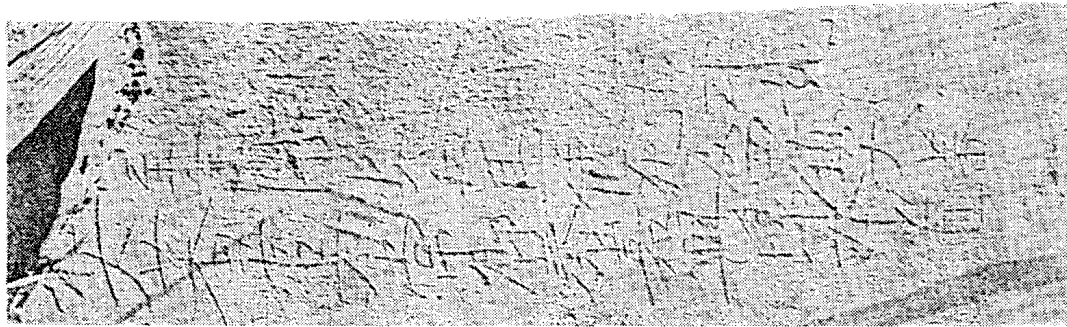
(在位 815—841?年) (815—838年は Ral pa can レーパチェンの別名で呼ばれる)

IX. Glang dar ma, ランダルマ, 達磨

(在位 841?—846?年) (別名 'U'i dum btsan ウィドゥムツェン)

Aurel Stein, *Ancient Khotan*, Oxford 1907.

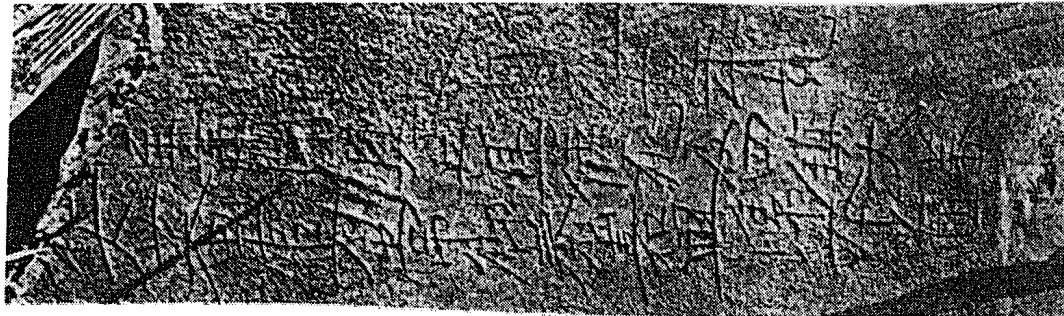
图版 I



(扩大 A)



CHINESE SGRAFFITO OF A.D. 719, ON WALL OF
TEMPLE CELLA E. i, ENDERE FORT.

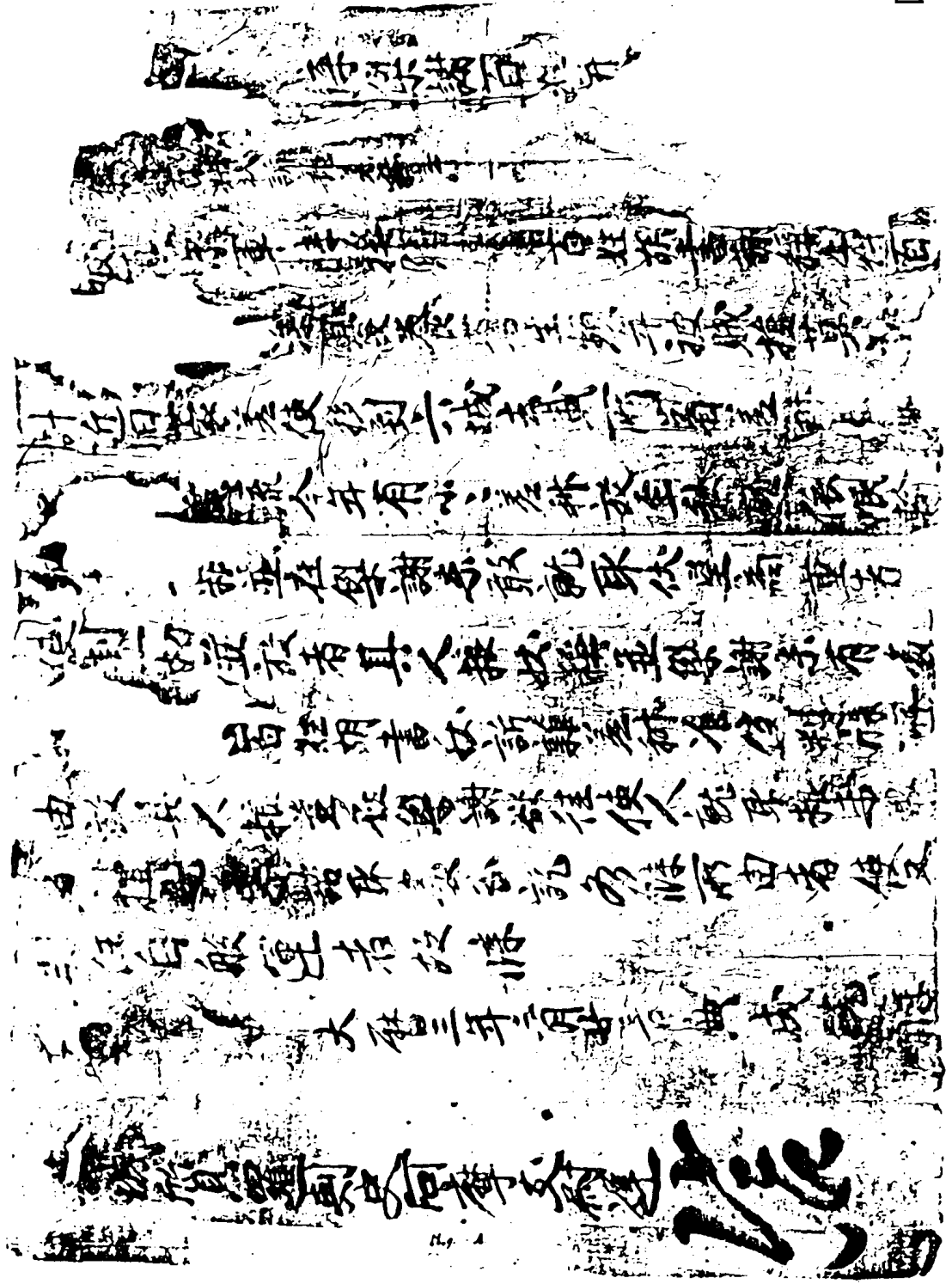


(扩大 B)

(See Chap. XII. ii; Appendix A, part iii.)

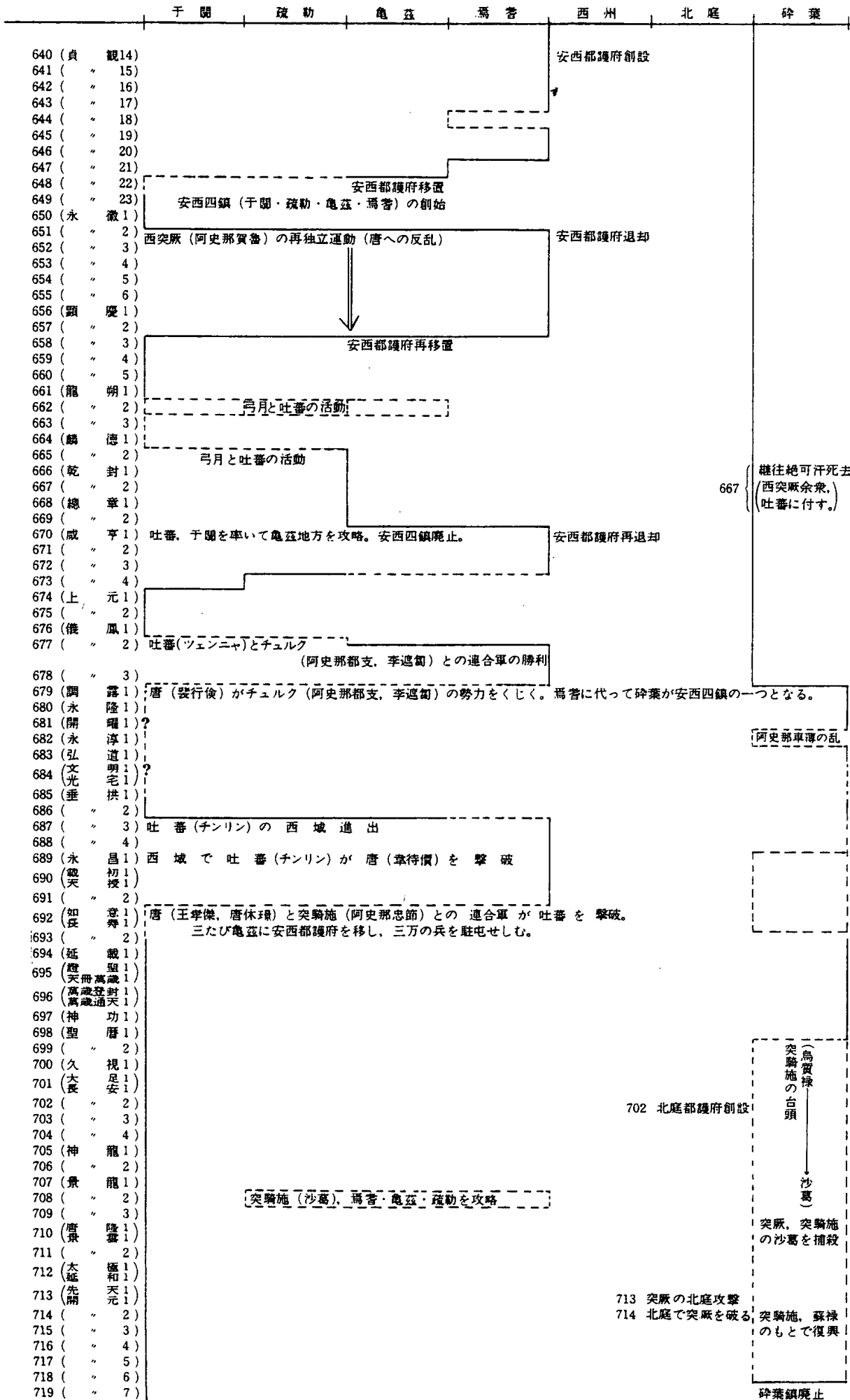
Hoernle, A.F.R., A Report on the British Collection of Antiquities from Central Asia, Part II, Calcutta 1902.

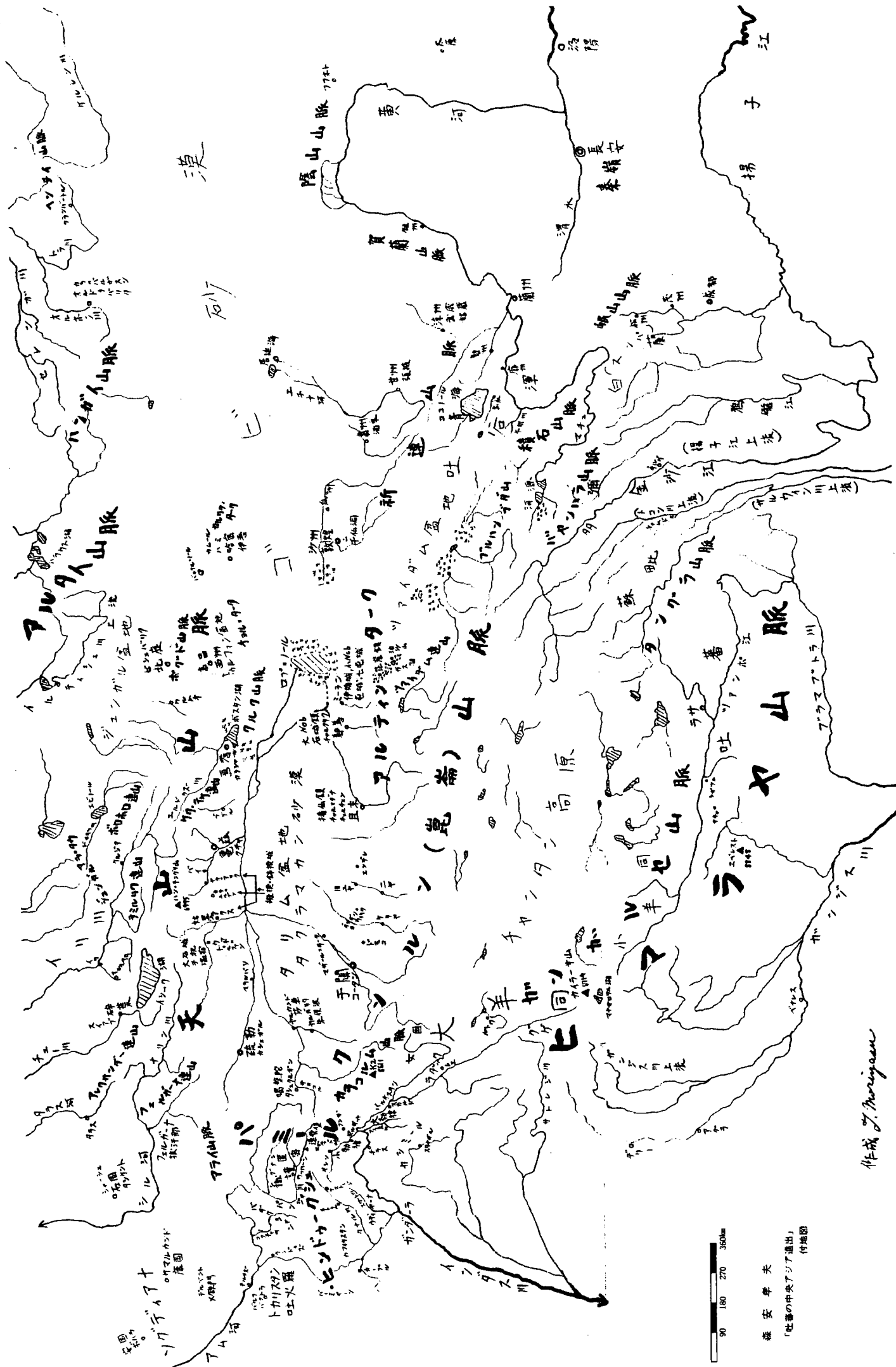
(原載: Journal, As. Soc. Beng., Extra Number, 1901)



圖版 II

「唐の西域支配の消長」





森安 孝 夫
「吐蕃の中央アジア進出」
付地図

作成 J. Morijama